

ぶっ飛び少女がDIO様の メイドになるお話

ふろんていあ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

殺人鬼JKハナコちゃんがDIO様のメイドになる話。

DIO様と少女がおくる、ハートフルストーリー（大嘘）

日本でやらかしにやらかした女の子ハナコちゃん。

警察に追われて、DIOさん（本人はラジオネームかなんかだと思ってる）さんを頼りにエジプトに密入国するぜツ!!

どうかしてるぜツ!!

※最大の注意※

たまにバカみたいな下ネタ満載の下品な話が出てきます。本当にアホです。9割はシリアスですが、残りの1割バカです。下ネタの被害者は承太郎なのでかっこいい承太郎をお望みの方はバックしてください。

非常に下品でD I O様がクソです。ハナコちゃんがひたすらに可愛そうな話とかあると思います（推定）

それでもよければどうぞ←

目次

海外逃亡しよう！

第1話 経緯 | 1

第2話 デンジャラスは突然に

16

第3話 そもそも人間じゃなかった。

第4話 天職だった | 27

第5話 DIOという男 | 42

第6話 続 ハナコとギャンブル | 54

すまっち | 68

第7話 続続 ハナコとギャンブル

カジノ王に俺はなる(嘘) | 83

第8話 ハナコの逆襲 | 97

第9話 アヴドウルの店に行く

111

第10話 ハナコ、承太郎に会う

127

第11話 若い時の父さんにもそんな

事あつたぜ。 | 146

第12話 人生は見せ物 | 166

第13話 花京院典明君 | 187

第14話 愛 | 206

第15話 まさかあいつが敵だったな

んてッ!! | 223

海外逃亡しよう！

第1話 経緯

始まりの話

私はその日、なんだか朝から胸騒ぎがすると思った。

なんでこんな気持ちになるのだろうと思っただけれど、別に今日が特別な日というわけじゃあ無いし、いつも通り、6時に起きてご飯食べて歯とか顔とか髪とかやって家を出た。朝からシユークリーム食べて家を出た……………

いつもと違うことといえば、お友達のイチコちゃんがジヨウタロウ君がうんたらかんなら……………ジヨウタロウ君と言うのは同じクラスの男子の名前であり、我が校の王子様の名前である。

イチコちゃん曰く、雄々しい肉体と知的なグリーンの瞳がたまらない！らしいが、正直言つて私にはジヨウタロウ君もジローラモ君もジョンソン君も変わらない。さらに言えば、これは個人的な意見なのだが、寡黙な男は全然話してくれないから絶対離婚率高いと思う、私は将来絶対に寡黙な男とは結婚しないと誓っている。

……………付き合っている時だけだ。そういうのは付き合っている時だけクールに

感じて、本当に結婚して子供が生まれたら苦労するのだ。

「ハナコちゃん聞いているの？今日ジョウタロウ君が来る日なのよ！頑張って待ち伏せすれば、取り巻きの子達よりも早くジョウタロウ君に会えるのよ〜！」

「イチコちゃん……どうせジローラモ君には取り巻きの子たちがもう居るって……」

「ジローラモ誰よ、ジョウタロウよ〜！」

「……………ジョウタロウ君ね。」

この子とは一年生の時からの付き合いだが、ちよつとお馬鹿な、頭の弱い女だ。

その後、無事にイチコちゃんはジョウタロウ君を拝めたが、取り巻きの女には睨まれた。

真に馬鹿な女とは、他人に迷惑をかける厄介な女の事である。昼休みに私はイチコちゃんにご飯を食べていた。

「ハナコちゃんジョウタロウ君かつこよかったね〜！」

「そうね。」

「やっぱり取り巻きの子たちには敵わなかったけど、絶対コツチ見てくれたわよ〜！」

「そうね。」

イチコちゃんは頭はゆるゆるだけど、明るくて友達思いなところは好きだし、何やかんや言つてこの子は感覚の鋭い女である。

「でもちよつと、取り巻きにヨウコちゃんがいたから………何かされないか心配だなあ……」

「そうかしら。」

所詮私たちはカースト下位の人間である。ジローラモ君にくっ付いているのは上位の人間たちだ。

イチコちゃんは天然で嫌われてるし、私は気味の悪い女だと思われているため、時たまいじめの対象になるのである。最近イチコちゃんに目をつけているのがヨウコという女で、昨日の席替えで私がジローラモ君の隣になったから、私も目をつけられている。女というのは、めんどくさい生き物である。

その後、5時間目6時間目と終わり、この日は普通に学校を終えた。

放課後の話

人生なにが起こるか分からないと言うのはこの事である。

ハナコの人生のサイコロは家に帰って、その瞬間にその家にいじめっ子たちが押しつけてきたところから、ゴロンゴロン回って移動し始めた。

その移動距離は、日本列島よりも長い。ただ転がってんだと。だってエジプトに行かないといけなくなったんだもの。長いわよ。

そしてそれは、良い方向に向かっている気がしない。このまま私は人攫いにでもあつて、きつたねえ男どもの性奴隷にでもなってしまうんじゃないか。

というか、身包み剥がされそうな方向に回っている。
怖い。

ハナコは不安でいっぱいだった。

同行者は浮かぶ胎児だ。屈強な男だったら少しは安心できたかも知れないが、そんなうまい話ではない。

突然なのだが：ハナコは高校2年生の5月から海外逃亡しなければいけなくなつた。

ここで、5月4日、冒頭の「胸騒ぎがする朝」の1日に何があつたか説明すると、

ハナコは久しぶりに部活のない放課後に、早めに家に帰つた。

が、友人であるはずのイチコちゃんや、ヨウコちゃん達の脅しに遭つて、自宅の場所を売られてしまった。家の場所が結構近かつたので、ヨウコちゃんの鬱憤ばらしの相手に定められてしまった。

ハナコ家に入ろうとした瞬間にヨウコちゃん達4人の女子が私を半ば押さえつけながら家に上がり込んできた。

それが全ての原因だ。

本人たちは、

「ハナコちゃんのお友達で〜す」

「すみません、ハナコちゃん体調悪かったみたいで送って来ました〜」

だとか、「母親がいるだろう、バレないようにリンチしなきゃ」という計算のもと脅して家に入り込んできた。が、想定した母親の返事が無いと家に私しかいない事を悟り、調子に乗った。ハナコを荒々しく中に引き摺り込んで蹴りを入れられた。

何故家にあがられるのが問題なのかをここで説明する。

ハナコは、実は2年前に父親と引きこもりデブの兄を計画的に殺している。1ヶ月前には母親を事故死させてしまっていた。この三人の死体は完璧に処理したが、弟の死体だけは残っている。しかも相当臭い。

なので、部屋に上がり込まれるというあの状況は、非常々にまずかったのである。

結果から言うと、ハナコは逆上して、女子3人を殺し、1人を取り逃して、警察に通報されることとなる。

ここでハナコ身の上話を話したいと思う。

ハナコの家はアパートの角部屋で、酒乱の父と精神的に問題のある母親と、ストレスゆえの爆食いからの引きこもりメタボな兄とともに生活していた。

幼少期はゴキブリの混ざった食事とゴミ袋だらけの異臭の中で育った。

とてつもなく臭いので私のあだ名はウンコだったし、部屋の隣と真下には誰も住もう

としない。その辺の犬のウンコ食えって言うイジメにもあったし、ウサギ小屋の水を飲まされたこともあった。

………つまり何を言いたいかというと、ハナコは特殊な家庭環境により、いじめられたりして、精神的に問題がある女性に育ってしまったと言うことである。

多少の良心や必要程度の常識を兼ね備えてはいるが、やっぱりちよつとおかしい女の子なのであった。

12歳になる頃には父は私ハナコを性的な視線を送るようになった。母は私のまつ毛を抜いて目玉のオブジェと魔法陣の手拭いに捧げるようになった。

兄はハーブやつてる。百円玉がないと黒電話とポストの結婚式に出れず、肝臓にマンダラキノコを植えつえられるらしいので百円をあげていた。

その辺でハナコは、「この家族の保護がなくても生きていけるといえるか、私が生かしているようなものだぞ」と気付いたので、家を飛び出した。が、運悪く補導されたので、家から家族を排除してしまおうと考えた。

…そんな矢先、どっか行ってた父が大金を持って家に帰ってきた。

父が持ってきた大金によって我が山田家は少し潤った。それでも、あいも変わらずバカしかないものであった。

ハナコはパクった金で、ホームレスのような生活をした。シャワーを浴びたい時は銭

湯に行った。

実家に比べればとてつもなく平和で清潔な日々であった。

だから「家族を排除するの、ちよつと後でもいいかな？」って気持ちになったのである。お金があるとはとても素晴らしい事である。

………で、そんな生活がなぜ家族殺害という急変を迎えたかというところ、それは、母の妊娠である。

それを知った時、ハナコに何かよく分からない物が込み上がった。母のお腹に宿った命、私が守らなくてはと謎の使命感が湧き上がった。

それは、イカレ女の母がお腹をさすって笑っていたからかもしれないし、裁縫をして赤ん坊の服を作っていたからかも知れない。

大きくなった母のお腹を撫でた時、ハナコの時もこうだったのよ、あんたの兄弟よ、ハナコお姉さんになるのねえ………と、母はハナコの名前を呼んだのである。その時、母が物凄く清らかに感じ、また、愛されて生まれて来たのだと嬉しくなって、どうしても弟を守ってあげたくなったのだ。

そこからの行動は早かった。

母が臨月に入ると私は酒に睡眠導入剤を入れて眠っている父を刺し殺し、爆音でイヤホン聴いてる兄の首を縄で締め殺した。

それから2人を金槌やら、ノコギリやらでバラバラにしてスパイスやら醤油やらを
ブチ込み、圧力鍋で茹でて、最後はゴミ収集車に任せた。

我が家から血痕が出ないようにとブルーシート引いたりだとか大変だったが、これで
何も心配いらないと安心したのだった。

清らかな弟を迎えるために父と兄は悪影響すぎるのである。

さて、いよいよ母の出産………と、なりたいのだが、そこでまたアクシデントが
起こった。

赤ん坊が生まれないのである。

ハナコは2年弟を待って、痺れを切らして自己流帝王切開を実行したら、母が死に、
やっと取り出した弟はちよつと腐っていた。死産だったのである。

ハナコはその時凄く、悲しんだ。どれくらい悲しかったかというと、オリンピック出場
の決まったスポーツ選手が、交通事故に遭った時くらいの悲しみである。

(が、本人は自殺しようとか考えていないので、立ち直りは早い。)

あんまりに悲しいので、ハナコは母の死体は近くの山に埋めて弔い、弟は諦めきれな
いのでクローラーボックスに入れて置いた。

で、弟腐つてた事件はつい1ヶ月前のことである。

先に結果を述べてしまったが、家に押しかけてきた女子4人に私は取り押さえられ、

暴行を受けたのち、弟を見られてしまった。

これは殺すしか無いと、衝動的にヨウコやらを3人仕留めたが、最後の最後で1人に逃げられ、警察に通報されたのである。

以上が5月4日に、この山田花子に起こった平穏な日常をぶち壊す災難である。

「これは国外逃亡するしかない」と腹を決めたのは、2年前に父を殺してから途絶えたデューアイオー（ラジオネーム??）さんという人物からの手紙を見つけた事がきっかけである。

巨額の金はこの男からのようで、エジプトと日本の中継を父のスタンド（?）がして、案外重宝されていたらしく、うんたらかんたら………そこで触っていなかった父の机をあさったら、なんとエジプトのとある座標が精密に書かれたメモ書きや、でっかい屋敷の写真が出てきた。

ハナコはピン！と来た。よし、ここで雇って貰えばいいじゃないか！と。あの酒乱が雇ってもらえたのだから、私なら楽勝だ！と。

その時の彼女は、物凄くハイになっていたのでバカだった。

それからは早かった。エジプトに行ってやろうとすぐに空港に向かった。

凄くバカなのだが、この時チケットやら何やら全く考えておらず、荷物もポストンバックに下着と、何故か制服を冬夏全部突っ込み、乾パンを突っ込み、サバイバルナイ

フ：ではなく包丁を突っ込み、売れそうなダイヤ？みたいなキラキラしたものをつ
込み、物凄くアホなのだが凄く満足して家を出た。

服、よし！

食い物、よし！

武器、よし！

多分金になるもの、よし！

いけるッ！

こんな感じで家を出たのである。

おいおい、お前々そんなんで飛行機に乗れるわけねえだろ嬢ちゃんよおくと。

ところがどっこい、ハナコは何故か空港を素通り出来て、エジプト行きの際に飛び乗
れた。隣のシートに座っていた外国人らしき、ハンサムガイは自然に握手を求めて来
た。また、機内食も普通に配られた。

そこまで来て私は飛行機の機内で流石におかしいと思ひ始めた。

そういえば。パスポートだって持っていないんだぞ私は……………

ラッキーというにはおかしすぎる現状に私はキョロキョロと機内を見回した。気が
気でなかったから脳汁出すぎてたのか、ハイになりすぎてノリで飛行機に乗ってしまっ
ているけふこのころ……………

すると、どこからか赤ん坊の声がした。真剣に耳を済ませてみると、なんと、上から聞こえてくるのである……ホラーだ。

怖くて如何に凶太いハナコあるうと、すぐに上を向けなかった。仕方ないので私は隣のナイスガイに尋ねた。これでも私、英語は学年十位以内の中々に頭の良い女であるはずなのだ。

「すみません、私の頭上に何か居ませんか？」

「……？ いいえ、何も居ませんが、虫か何か見たのですか？」

「……………ありがとうございます。大丈夫です。」

隣の男性は何も居ないよと言うのでそれを信じた。ハナコは自分の真上を見た。

『オギャヤヤアアアア!!!』

いた。

間違いなくいる。

その赤子は今まさに母親の胎内から生まれ落ちたかのように、血に塗れて、それがハナコの顔に垂れている。

また、ハナコの手には何かを握っている感触がある。それは赤ん坊から垂れ下がっているへその緒だった。ヌルついていて気持ちの悪い……………赤ん坊は風船のようだった。浮いている。泣き声は私にしか聞こえておらず、姿も私にしか見えていないよう

だ。だからみんな驚きもしない。風に揺られているのかゆらゆら踊っているように見える。

私はもう一度ナイスガイにこの子が見えていないか尋ねるために、彼に話しかけようとした。

「うっ、な、な、なんだこれ、エエエ、大丈夫……じゃ、絶対無いわね。」

彼の両方の黒目がくるくる回っており、何かぶつぶつ言いながら髪の毛を抜いていた。彼は情緒不安定になったのかなんだかヤバくなってきた。

異常な状態である。

「駄目だ………ストーブの虹色の炎が消える前に運動会で一等賞を取らないと僕に明日は無いし、フィリピンにいる僕の弟と妹の子供にウエルカムドリンクを用意するために鈴虫の親子に連絡しないと……ゴキブリを混ぜた中華料理店で働きたくなかったらイカレ坊主の葬式の助手をするのが条件ってもんさ……アツアツアツアツ、もう駄目だっ!!隣の家がミートボールを温めているっ!!殺される!!アツアツアツアツ、助かったぞ、奥さんが孕んでいたのは子供との子じゃなくて火星人のお爺さんだ……」

この人度でかい声で叫んでいるのだが、全く周りの人は加減な顔をしていないし、全然聞こえてませんって感じだ。

なに言ってるんだこいつ………!!!

まるで兄みたいに、やばい薬でもやってるかのような眩きだ。流石のハナコと怖すぎ
てちよつと涙が滲んできた。

頬には紅葉のような小さな赤ん坊の手形が墨のように黒くペイント？されていた。

あれ、この人こんなペイントしてたっけ？

赤ん坊からまた血が垂れて来た。今度は青年のおでこにかかった。そうするとまた
黒い手形が浮かび上がって来た。青年は小刻みに痙攣を始め、皮膚が黒く染まり始め
た。

これは、どう考えてもいきなり出現したこの赤ん坊と関係あるんじゃないか……
「……………全部この子がやっていたの……？私が空港に入れたのも……この人が……こんな
ふうになったのも……全てこの子の魔法のようなものなの??」

まさに驚き。脳がガンガンしている。我ながらこのパニック時に驚きの理解力。不
思議なこと全部こいつが原因だよ、絶対。

しかし、このハナコ自身には何の効果も現れておらず、ちよつと守護されているかの
ような心地だ……

皮膚全てが黒く染まったのか、そこから男性は縮んでいき、黒い赤ん坊になって血み
どろの赤ん坊の隣に浮いた。へその緒は二股になった。

今後黒い赤ん坊が増えたら百股、千股にもなるのだろうか……

乗り切ったのだった。

ちよつと人生舐めすぎじゃね？

と言うぐらい簡単に、人生の転機5月4日から5日後、無事にエジプトに着いたのだった。

同行者は、頼りない……というかむしろハナコが守るべきかも知れない赤ん坊である。

そして、今、ハナコは日本よりも明らかに治安の悪い街中を頑張つて現地の人に聞きながら、目的の館を探して彷徨い歩いているのである。

第2話 デンジヤラスは突然に

「……………ここだ、この建物だ」

私は苦勞の末、ついに目的の場所を発見した。

トンガリ屋根の大きなお城である。此処こそ、私の探していたディーアイオーさんの自宅である。今私の胸が喜びでドキドキしている。少しの不安もよぎるが、これからのことを考えると、ドキドキしてしまう。ああ…アポ無しで来てしまったけれど、大丈夫かしら、求人広告見てきたって嘘つくのはよく無いよね。こんなに大きなお城ならメイドとか見習いでも、何かしらお仕事があるかも知れない…英語はできるんだから、舐められないように対等に、意思を強く持たなくては。

……………結構ですって言われたら粘り強くいくしか無い。何でもこなす自信があること、やる気があることを精一杯アピールしなくては。

「ケーーーーーン」

風邪を切る音とけたましい鳴き声が響いた。空を見上げると帽子被っているように不自然に頭の出っ張った鳥が上空を飛んでいる。ああ、帽子を被せられていると言うことはこのお屋敷のインコとかオウムとかを放し飼い？しているのかも。私の勝手な妄

想だが、きつと可愛い小鳥ちゃんに違いない。

「け、け〜ん」

柄にもなく調子に乗って泣き真似をした。今のうちに媚を売っておくのだ。先程と言っていたことがまるで違うが、それは臨機応変というやつなので問題ない。

その時、小鳥ちゃんはバラバラと粒のようなモノを落とした。それは重力に従って私の方に降ってくる。もく危ないな、悪戯好きなのかな?と、粒と私には結構な距離があつたため、少し離れて屋根のあるところに移動した。

さて、何を落としたのかな、と3秒ほど待っていると、ドドドド、とまるで氷のように小鳥ちゃんが落とした何か地面に深くめり込んでいた…………

「ケーーーーーン!!」

もう一度空を見上げた。

「嘘だろ全然オウムじゃ無い」

で、デカイ…あれはオウムなんかじゃ無い…………トンビよりも大きい…………鷹とか鷲の類だ!

しかも、めり込んでいたのは氷柱のような氷の塊だった。地面を粉碎し、ボコボコになつている。アイツ絶対あわよくば殺すつもりだった。番犬ならぬ番鳥なのか…?!

……………私はここで引けるほど、余裕のある身では無かった。

あの鳥は明らかに飛び抜けた知能があるとみた。もしかしたらこの鳥の包囲網を抜けてこそ雇う素質のある者と……いや、そんなデンジャラス面接あったまるかと叫んでやりたいけど、この魔法の力が目ざめたからには、修行とか戦闘とか小説のような話を信じないわけにはいかなかった。

私が脳内会議しているうちに鳥は既に急降下していたらしく、再び氷の弾丸を私の真横から打ち出して来た。私の頬と左脇腹を擦りながら壁に突き刺さる。体に熱いような痛みが走るが、ここで止まる私ではない。逃げるのだ!!鳥に背を向けて走り出した。

………そうするつもりだったが、後ろは行き止まりである。雨宿りのために作ったんですか??と言うくらい無駄な場所だ。3メートルくらい奥行きのある謎の張り込みに私は逃げ込んでしまっていた。出口はもちろん一つ。その出口で鳥が勝ちを確信して笑っていた。

もう夢であつてくれと思えて来た。

いや、冷静になつてみればこいつ氷を自家製産している。つまりふつうの鳥じゃ無いし、なら夢か?……いやいやいや、脇腹も頬も痛い。氷を作り出して飛ばせるなんてずるい。氷を作れるなら多分その出口を魔法で固める事もできるんじゃないか?出来なかったとしても、圧倒的に優位に立っていると自覚しているこの鳥は私を翫つて殺そうとする。絶対にそうだ。そう言う顔をしている。

ここで私は思う、世界には一定数魔法を使える人間がいて、能力は人それぞれで、私のようにビジョンのあるものは魔法使いにしか見えないのでは無いか……街中でもう一人、メカのようなものを背負った男性を見つけたがその人は私以外見えていないようだった。この鳥の氷はどちらか分からないが、もし、空気中の水分を凝固させているのだとしたら他の人にも見えるし、私も魔法使いだと思って殺そうとしたのでは無いのかも知れない。

さつき適当に番鳥だとか言っただけけれども、本当にその通りで、無差別に近づくものを殺していつているのかも知れない。

この鳥は私が反撃できる牙を持っていることにまだ気づいていない!!

『オギャヤヤアアアア!!』

機内で殺してしまったナイスガイを筆頭に、私の黒い方の赤ん坊風船は14人になっていた。血みどろこ赤ん坊は増えていないが、この魔法を14回も使ううちにだんだん使い方がわかって来た。そして、この魔法を使うのに必要な心構えは冷静さと思いきりと覚悟である。

私は血みどろの赤ん坊を急いで両腕で抱えて黒い赤ん坊を鳥に押し付ける。背を低くして鳥の左側から抜けようと、渾身の力を込めて地を蹴った。つかさず鳥は氷の刃で黒い赤ん坊を破裂させた。

思った通りだ。ビチャビチャつと風船は破裂し、頭からそれを被った鳥は全身に手形を作つて倒れた。

人間やろうと思えばできるものだ。鳥はぐったりとして動かなくなつた。私が同じ魔法使いに初めて勝利した瞬間であつた。

目をくるくる回しているうちはまだ大丈夫……これが手形が増えたり大きくなつたりしたら末期症状へと向かつていることになるが、この子はあと5分くらい持つはずだから、屋敷に入つてから魔法を解いてあげよう。

私は五分以内に建物に入り、鳥さんにかけて魔法を解いてあげた。

建物に入つてから不法侵入したと気付いたが、入っちゃつたのはしょうがないし、今から言い訳を工作するのもこれから働こうとしている職場に対して失礼なので、全て正直に話すことにした。それにしても鳥に屋敷を守らせるなんて、なんとも斬新な職場である。

それと、あんな凶暴な鳥に館を守らせていたなんて、この建物には何か秘密があるのだろうと言うことにも気づき始めているが、私は色々なことで疲れてしまったのもあつて、あまり、やり直しをしたく無い気分であつた。

私別に、生きてれば何でも良いと言う人間じゃ無い。

クラスのみんなからは不気味で日本人形みたいな能面女って思われていたけれど、本当はそんな事ないし、結構笑うし独り言は激しい方で、実は陸上部に所属する多忙な女で、県大会だって本気を出せば1番をとれる。実は釘バット拳法を近くのチンピラのタケシさんにならっていたから、ちよつと不良みたいなことだつてした。勉強だつて学年三位を取つたことがある。

少し性格に難があるだけで、それを表に出そうとはしてない。趣味は料理に裁縫にスケッチ、読書：普通の女の子だ。

だから危険なことは嫌いだし、出来るなら紅茶やお菓子を摘みながら読書をして暮らしたい。そんなこと出来たことないけど。

やつと邪魔な重荷がなくなつて、綺麗なお屋敷に使えることができるチャンスなのだ。ヤクザの屋敷なら逃げるけど、ここはそんな感じじゃ無いし、父のようなクズの魔法も買ってもらえたのなら、私の魔法だつて買ってもらえるはずだ。父より有能な私は喜ばれるかも知れない。

ちなみにこれ全て玄関のドアの隣にある小さな椅子に座つて考えていることである。誰か来たら声をかけよう。家の中まだ入り込んだら本格的に不法侵入を責められる気がしてならない。

結局夜になってしまった。

屋敷の出口に通りかかると人はおらず、私は夜まで赤ん坊をあやしていた。この子はなかなかいい子で、大声で泣くことは普通に行っている時はほとんどない。私はそろそろ眠くなってしまうと、目蓋が半分閉じ始めていた。こくん、こくん、と

垂れそうになる頭に合わせて、かつん、かつんと何かの音がしている。……それが足音だと気づいたのは私も朝入ってきた扉が開いてからである。

人が来ている!!

ハッと顔を上げると、変な帽子をかぶって、顔に線が入っている男性がこちらを見下ろしていた。

「……………あなた、今入ってきた方より早くこの屋敷に入ってきたのですか?」

彼は私を疑り深い目で眺めている。ところで今入ってきた人?とは……………キヨロキヨロ周りを見回すとフラフラしている女の人が見えた。あつ、また女の人が入ってきた。

屋敷に侵入した女の人は2人いて、両方、なんだか恍惚とした表情を浮かべていたの
で、私はなんだか大人の世界を見てしまった気持ちになった。

そこで私は目の前の男性の質問に答えていないことに気がついた。早く答えなくては変なやつだと思われる……………

「……………今、ではありません……………もつと前から……………ここに居ました。訳あつて屋敷に無断で踏み入ることになってしまいました。決して妖しい者ではございません…私、父の手紙を頼つて参りました…この館の主のお役に立つため、どんなことでも致しますので…どうか……………」

「……………平たく言うとは、この館の主はその身を捧げに来たということの間違いありませんか？」

……………ん、んんん…ちよつとまで、一気に話が怪しくなつてきたぞ。夜に訪れた先程の2人の女性……………身を捧げると言うのは下の方の奉公のことか??もしやこの館、性奴隷コース直通快速新幹線なんじゃあ無いだろうな……………」

いやしかし……………平たく…ひらたく言えば私は『その身を捧げに来た』で間違いないこともないな。

……………ここは私の覚悟が試されているのかも知れない……………覚悟だ……………全ては覚悟が道を切り開くのである。

「間違 いご ざい ま せん」

あつ、彼ちよつと引いてる。まあいいか、こいつも連れてつてやろうみたいな顔してるぞ。

しょうがないだろう、この、17のうら若き乙女にとっては死ぬか生きるかの1人旅

なのだからな。私の目はきつと血走っていたであろう。

「……………ではお三方こちらにいらしてください。」

えええー何で私こんなことしてるの……………

湯気で霞む天井を見つめる。確かに極楽だけれど、私のバージンの行方が心配になって来た。

私たち訪ねて来た女性3人は金ピカな風呂に突っ込まれて、とにかく匂いをバラの香りにしろと言わんばかりにシャンプー、リンス、ボディソープ、風呂まで全部バラである。この館の主人の趣味は決して良いとはいえないそうだが、人の美学をバカにするのは良く無いことだ。

「ねえ、あなた。」

女性のうちの1人が私に話しかけて来た。

「何ですか？」

彼女はエジプトでは珍しいであろう、ブランドの髪を持つ女性であった。ニコニコと笑顔がすてきだが、どこかもどかしい様な、私に向かつては、しょうがないから時間を潰しているのよ、と言う焦る雰囲気か伺えた。

「あなたもDIO様に見初められてここにいらしたの？」

「……………?? あっ（ディーアイオーさんじゃなくて、デイオさんだったんだ）私は父の手紙を頼りに、ここで雇ってもらう為に来ました…」

「ふーん、確かに彼に惚れ込んでいてって雰囲気じゃないものね。」

「……………えっと、貴方様はDIO様という方にどのような御用があられるのですか？」

「私？ 決まってるわ、この身全てを頂いていくのよ。」

「無知で申し訳ないのですが、それは比喩的な意味でしょうか、その……アツチ系の意味で？」

「そうね……………どちらもじゃ無いかしら？」

「どちらも??」

「どちらもと言うのは、「身全てをいただく」が、直接的な意味でもあるし、比喩的な下っぼい意味でもあると言うこと……………?」

「ここで私は一つの結論に至った。」

「もしや私が頼みの綱にしていたDIO様は、女性を狙ったセレブのカニバリズムを支持する男性なのかも知れない。」

「ただくと言うのは、つまりはいただきますと言うことで、私もバクバク逝かれてしまふのでは無いか…バージンどころか生命の危機に陥ってるのかも恐れなくないまじい。」

「これは逃げた方がいいのかも知れない…」

「貴方もそろそろ出ませんか？もう十分湯につかったでしょう？」

さつき話していたのとは別の黒髪の女性が私に呼びかけてくれた。

いやいや、憶測で物事を進めるのもいけない……大体、私の憶測が正しいのならあちらの女性2人もバクバク食べられに来たと言うことだ……惚れ込んでるからって自分の肉を食べてもらうために来ましたとかそう言うの难道い……流石にありえないでしょ……

お風呂から上がると、2人の女性達はせつせとお化粧をしたり髪をセットしたりしている。私もした方が良いのか迷ったけれど、就職面接にバツチバチにメイク決めてくのもちよつとヤバイ奴だから、いつも通り自慢の黒髪を乾かして、制服の正装を着ていく事にした。

廊下はどこまでも続いているような気がした。

「(一)案内致します。」

執事風の男性が賛同する中、私は女性2人についていった。

第3話 そもそも人間じゃなかった。

「と、とんでもないところに来てしまったぞ私は……………」

執事風の方に案内されて進んだドアの先には、超イケメンの金髪のマツチヨお兄さんがいらっしやった。瞳の色は赤、日の光を浴びていないんじゃないかってくらい肌が白い。

ベッドの上に上半身全裸で待ち構えていた彼は、最初に私に話しかけてくれた女性を手招きしてベットに乗せ、彼女の体をサスサスし始めた。何やら物色するかなのような手つきである。

うわー、エッチだ、へえこの人がこれから私の上司になるのか、かつこいいなあ、すごいイケメンだ、…でもなんか怪しい雰囲気だし、こつから雇ってくださいつて言っても強姦されてエジプトの街にぼいってされたらどうしよう……………そうなりそうになつたら、その時は赤ちゃん頼みで逃げ切ろう、そんでお宝盗んでまたどつかに高飛びでもするしかないか……………

次の瞬間、金髪のニキは女の人の首に手をぶつ刺した。

「え?!?!」

驚きすぎて私目は点である。金髪ニキの長い指が女性の首に埋まって、完全に刺さっていた。奇怪な行動に、非常に不安になり、また、お決まりの展開なら、自分の分が回ってくるんじゃないかとも思い、軽くパニックになる。

「……………あり、が……………ごいまず……………」

ニキが首に手をぶつ刺してから数秒で女性が萎れて倒れた。あれはどう考えても死んでる、なんか吸い取られたかのように、と言うか実際に体の水分か何かを持ってかれているに決まっている。だって、見るからにアジの干物みたいな乾物になっていらっしやる。

こ、殺したのか女性を……………しかも女性もニキに向かって感謝しながら死ぬということも奇妙な死に方……………何故かB級映画の陸を歩くサメを思い出す……………同じ奇妙でもジャンル全然違うけど……………彼はB級のサメよりももつと厄介で、どちらかというトバンヘルシングに出て来そうだけれど。

「……………ククク、中々美味じゃあないか…女、光栄に思え…貴様はこのD I Oの血肉となる榮譽ある死を与えられたのだ。」

ちよつと待つて未来の上司デンジャラスだ。

「D I O素敵！私も早く召し上がってくださいらないかしら！」

「嘘だろ姉ちゃん目を覚ませ」

いや、このままでは私も殺される。あと、すごく危ない思想をお持ちのようだ。当の本人DIO様はコツチに近づいて来ているぞ、向かつてる先はどう考えても私だ！不味いんじゃないかこれは！後ろの扉は鍵がかかっているのか全然動かない！

アツ、私だけ逃げてでも隣の女の人も殺されるかも………というか、殺されるだろう。だがしかし、今は他人のことなんて考えられない。それに、なんかもう、この人殺されたいらしいから放っておこう。

「次はその東洋人の女だ。こつちに来い。」

やばいぞ人生終わったぞ。だけど、彼は機嫌みたいだ。これは土下座して交渉すべきか……だつてあんなムキムキの男の人に勝てないよ、赤ちゃん使わなきゃ、赤ん坊使つたらそれはそれで私の明日が真っ暗になるよ、未来の上司のロストで、だ。それでも明日は巡ってくるって言うがね。

いやいやいや、こんな心の中では嫌がつてるけど、何故か私の足は彼の方向に動き始めた。何でだ……ご都合主義と言わんばかりの………しかし、「威圧感です！」と言わざるを得ないこの圧力に、私の足は彼の元に動き始めていた。

ア……もう駄目だ、もうここで叫んで交渉するしか無い……日本に逃げ帰つたつて私にやあ、後が無いのご存知？

私の理想だけど、この乙女ゲームにでも出てきそうな人、DIO様。イチコちゃんが

貸してくれた雑誌にあったように、普通の女じゃ無いですよアピールをしたらイベント？が発生して『お前、面白いな』と訳わからんことを言ってお金くれ無いだろうか……：絶対ないけど。

「あ……………あの……………」

「アツ、ちよつと待て女、貴様何型だ？」

D I O様の歩みが止まった。私ともう一人の彼女を見比べている。

「おつ、O型で御座います……………」

「そうか……………おい、お前は何型だ？」

「A型ですわ。」

「今はA型の女の血が飲みたい気分だ。おい、O型お前はベットで待機しろ。」

くう……………やっぱりめつちや怖い……………あと、いつのまにか私の名前はO型になってしまった……………くうつ……………怖い……………なんか威圧感するぞ、逆らえない……………

「……………御意。O型待機しております。」

私はこのD I O様が私より圧倒的な力を兼ね備えていることを確信し、逆らわないほうがいいけれど、何もしなければ私はこのまま、あの女性同様体液をカラカラに抜かれ、乾物となることが決定している。まだ生きているもう一人も、指を首にめり込まされて、もうすぐ殺されるだろう……

アツ、刺された。

「あ……………ああ……………ありがとう……………ごさいました……………」

黒髪の女性がやられてしまった……………

嗚呼……………私の番が来てしまった……………交渉だけでもするべきかも知れない……………話だけでもしてみよう……………

私の今の気持ちは、雇ってもらえるなら全力で働く気合いはあるのだけれど、なか未来の上司となる人が人外じみていて、今現在殺されそうな場面に直面しているので怖すぎて逃げたいが、希望は忘れずに取り敢えず交渉だけはしてみよう、という気持ちである。

「あの……………」

「なんだ、東洋人の女よ」

「私に話す時間をくださいませんか？」

「ほお、この世に残したい言葉があると。」

違うわこのアホ。

「私、山田 花子という者なのですが……………父が2年前まで貴方様にお世話になっておりまして……………」

「それがどうした？自ら食べられに来たと言うことか？」

「違いま」

「黙れ女、何故距離を取っている？」

そりや逃げるわ。相手の立場に立つて物事を考えようって教わらなかつたの？どんな奴に育てられたか親の顔が見てみたいぞ。

「私はその…食糧志望というより使用人志望というか…」

「テレンスだけで間に合ってる」

いや嘘つけ、こんな広い屋敷掃除はどうしてんだよ無理だろ。1人じゃ、オーバーワークだよ。テレンスって人、パワハラ受けてるんじゃないか？

「くう…安月給でも構いませんから…」

「お前を食うのに金はいらぬ」

「私にはテレンスさんの悲痛な声が聞こえます……」

「何言ってるんだお前」

「この屋敷を1人で請負うテレンスさんの激務を想像したことはありませんか？」

「知るか金は払っている」

「そう言うところですよ、きっと彼は働きすぎて鳥インフルエンザか豚コレラにかかる寸前ですよ」

「お前テレンスを家畜だと思ってるのか？」

「かわいそうに、テレンスさんは多分人間ですよ?……エッ、鳥インフルエンザって人間にかかるんですか?」

「俺に聞くな、どの口が言うんだ、クソうるさいなこいつ」

多分テレンスさんはパワハラを受けている(推定)

彼の態度から察するに、傲慢で女好き(食料)で、色々ヤバイ奴に違いないだろう、あと、股間全開、見せつける趣味があるらしい……そんな奴がまともな上司のはずかないだろう。それと体液を吸い取る習性もある。

ん、そう言えば何で首に指をぶつ刺しただけで体液が吸い取れるんだ?

だいたい、体液を吸い取るってなんだよ体液を吸い取るって、このDIO様と言う男人間じゃ無いんじゃないか?

あれ、すっかり魔法の存在を忘れていたけど、つまり、この男は私の同じく魔法が使えて、その副産物で吸血鬼みたいなことができるということなのか。つまり私が攻撃を仕掛けたら屋敷の外の番鳥の時みたいなのバトルを繰り広げなければいけないという事になる。私の魔法自分から仕掛けたら勝ち目あんのかこれ……

というかこの屋敷、もしかしたら魔法使い結集してるのでは?

「……………それで、お前は何が言いたいのだ、このDIOに下らない事伝える為に俺の時を奪っているのでは無かろうな?」

「……………め、メイドでも清掃婦でも食料以外何でもいいので雇ってもらえないでしょうか……」

「先程言った通りテレンスで間に合っている。やつは鳥インフルエンザにも豚コレラにもかからん。貴様のようなスタンドも使えぬ小娘、腹の足しにする以外使い道など無いわ」

「ひえっ……………」

この男、本当に私を殺すつもりだ。眼力が脅しじゃない、本気になって私をデザートにするつもりなのだ。

いかん、相手を怒らせてしまった。うそやん、さつきまで結構ツツコミしてくれてノリ良かったやん。

うそ、こつちに迫って来ている。

私はとにかく一旦距離を取る。この部屋逃げ場は無いが結構広いし、本が沢山あるから、投げたり障害物を作ればなんとか黒い赤ん坊の出汁をぶっかけられるかも知れない。

相手はまだ私が魔法使いだと気づいていないから、ワンチャン投げれば当たる。

「……………えっ、何処にい」

「無駄なことはそろそろやめにしよう小娘」

「ギャー………ツ!!」

何てこつたい、いつの間にか回り込まれていた。ホラーさながらの展開に私は叫び声を上げてビビった。

「うがつ」

右足を軽く払われ、視界が揺らいだ。こういう時人間は転ぶと分かっているても何もできないもので、重力に従っている時やけに周りがゆっくりに見えるのはお決まりである。

バランスを崩して背中から彼の胸筋にダイブする。アツ…これはもう駄目なヤツだ…そのまま顎を鷲掴みにされ固定、巷で噂の顎クイもコレじゃあ、全然嬉しく無い。何がいいんだこんなの、最近の女子みんなドMか。大きく振りかぶった手の先の鋭い爪の行方は私の首だ。そのままジエンド………

『うわ………ツ!!』

の、ギリギリのギリで彼の爪が止まった。私は今さつき響いたどでかい叫び声、それと何か落下した音によって助かったのである。保留されただけかも知れないけれど………私の体からはどっと汗が流れ出した。

「な、何…誰の声………」

「テレンス？」

先ほどの叫び声の主は最近話題の人、テレンスさんだったらしく、彼は私の顎を締め付けるのをやめて、立ち上がった。あれ、何で私のことじっとみているんですか？

DIO様、直立不動で数秒間私を眺めた後、座り込んだ私の上着の胸ぐらを掴んで立たせた。

「……………小娘一つ質問する。」

「な、なんなりと。」

「俺に人を殺せと言われたら、殺すか？」

…あれ……………これはもしやチャンスというものでは？

生命の危機からテレンスさんの叫び声一つで面接っぽくなって来た。私への態度が急変したと言うことは、何かハプニングが起こったであろうテレンスさんの穴埋めとして、今現在、私のDIOカンパニー入社試験が執り行われていると言うことで間違いございませんねー………☆

「も、もちろんでございませう！」

私は間を入れず、相手に好印象をもたらすように、目を見開いて笑顔で答えた。

「そうか、ならばその言葉、試させてもらおうぞ」

「有り難き幸せ!!」

DI O様はフツと軽く笑って私に背を向けた。私もおっきな声でしつかり答えたし、彼の返事からも私がとりあえず研修生として認められたことが伺えた。だって「試させよう」だから、まだテストはあるかも知れないけれど、これは結構期待できる展開ではないでしょうか。

「それでは小娘、半回転してドアの方を向け。」

「仰せのままに」

私は上機嫌になって直ぐに後ろを向いた。部屋の雰囲気はランプで薄暗かったけれど、私にはラメが入ったみたいキラキラしている風に見えた。

「私がいいと言うまで目を瞑って耳を塞いでいろよ。」

「もちろんでございます。」

耳を塞いで目も瞑った。

しかし、これなんの儀式だろうか……聖水でも振りかけられる？これなんか何も分からん間に危害加えられるパティーンでは無いよね、平気よね。

「痛っ」

DI Oに背を向けてから数秒後に、ハナコは背中を熱い何かで貫かれ、余りの体の熱さに耐えきれずに意識を失うのであった……

D I O 様から見たハナコという女

俺がこの小娘を生かそうと思ったのは、本当に気まぐれからであった。他2人の女は気合を入れてきらびやかなドレスを纏う中、1人だけ日本の制服を着た、長い黒髪のが入ってきた。そもそも、この屋敷に招いたのは、2人だけで、1人

知らない女が混ざっていると言う状況であったが、敵意は感じられず、わざと隙を見せた際、飛びかかって来なかった。

まあ、前に道で見かけてこの屋敷にたどり着いた女もいたから不思議なことではない。

もしや、この屋敷に引き寄せられたスタンド使いかとも思ったが、殺されそうになってもスタンドは出さなかった。つまりは、やはり、ただの女である。

つまらない、食ってしまおう。そう思った時、テレンスの悲鳴が屋敷に響いた。ここまでこんなにも大きく聞こえると言うことは、それ程遠くでは無い。にも関わらず、テレンスの足音は吸血鬼の聴力で耳を傾けても聞こえなかった。と、いうことは、テレンスは倒れているのか、蹲っているのかその場から動いていないと言うことである。

あの男が動けないほどの怪我をしたのか？

奴ならば、大変失礼致しました。と、この部屋に声を掛けるだろう。

普段は樂觀視している事も、このヤマダ ハナコの先程の言葉、「私にはテレンスさんの悲鳴が聞こえます」から、「まさか……」と思ってしまった。

少しすると、立ち上がって歩き始めたが、アア、ズツズツと足音は跋扈引いた様な怪我をした様な足音になっている。これは案外重症だったのかも、明日生きてるか知ら？
ふむ、ここでもう一度ヤマダハナコを見る。

うゝむ、この女、最初から俺に魅了されていたという訳じゃあ無さそうだ。目の前で殺人が起こっても冗談を言う余力のある、普通とは少しだけ変わっている女。

テレンスが本当にヤバそうだった場合、スタンド使いにして肉の芽を埋め込めば、使えんこともなさそうだ。

……よし、スタンド使いにしてしまえ。

少し希望をちらつかせて命令したらすんなりとこのDIOに無防備に背を向ける。案の定ヤマダハナコはすんなりと矢に打ち抜かれ、スタンド使いとなつた。気絶しているが生きていけると言うことは、スタンドに目覚めると言うことである。

ヴァニラ・アイスに別室に運ばせたついでに、テレンスの身に起こった事を聞くと、どうやら何かの拍子にぎっくり腰をやってしまつて現在酷く苦しんでいるらしい……

正直、ちよこつとだけ、この女はナイスタイミングだったのかも知れないと思つた。

この小娘の父親、山田 太郎という名には確かに覚えがあった。日本に居る私の部下の1人でテレポト能力を有するスタンド使いである。本人は酒に溺れてはいたが、命令は律儀に遂行していたのと、中々に役立つ能力であったため、一応肉の芽を埋めて重宝していた。

しかし、一年前に何者かに殺されているのだ。山田太郎には、肉の芽を埋め込んでいた為、宿り主の死因は肉の芽を通じてある程度分かる。あれは他殺だ。包丁で何度も繰り返し刺されていたため、考えられるのは怨恨である。

……あの酒乱に1番の恨みがあったのはおそらく家族だろう。父親がアレではまともな家庭ではなかった筈だ。

その娘が俺を尋ねて来たと言うことは、この小娘、向こうで何かやらかして、父親の遺品から俺の手紙を発見してここを訪ねて来たのではないか？ そうじゃなきゃ、ガクセー1人でエジプトに行こうなど考えないだろう。

例えば、父親を殺したことがうっかりバレたとか。それでパニックになって国外逃亡なんていうぶつ飛んだ方向に思考が着弾とかなあ？

なるほど、話が見えて来たぞ、あの父親が雇ってもらえたなら自分なら楽勝だとか、とにかく楽観的な考えで、後先考えずにエジプトまで来たな、このバカ娘。だから雇って

ください、雇ってくださいとやかましくねだつて来たのだろう。そうだろうな、お前には後が無いからな。

このヤマダハナコという女は、肉の芽が無くても案外なんでもやる部類の人間かも知れないと、後のハナコの上司となる男、D I Oは思ったのだった。

第4話 天職だった

「つまり、私の仕事の大部分は死体処理であると言うことですね。」

「その通りです。」

昨日、屋敷の主人D I O様にスタンダード？の矢をぶつ刺されてぶつ倒れて、1時間前に起きたところだ。ベットと机とクローゼット、備え付けの風呂とトイレ、キッチンがある、少し埃臭い部屋だった。隣には顔に線が入っている、私をD I O様の部屋まで案内した、あの男性が座っていた。彼の名前は、テレンス・T・ダービー。そう、あの噂の人、テレンスさんだったのだ。私の体調が平常かどうか伺って、問題ないと知ると、彼は私に、晴れてこの屋敷で雇われる事になった事、これからこなさなければいけない仕事の事を教えてくれた。あと、D I O様が相当な食いしん坊でヤリチンだから肉体的にも貞操的にも気を付けろと忠告して来た。

いろいろ苦労が多そうだなだと思った。

「テレンスさん大変でしたね。」

「全くその通りなんですけど、いかんせんD I O様は人間では無いので、私たち下等種族の肉体疲労事情なんて興味あられないんですよ。」

「……………D I O様人外なのですか?」

「ご存知ありませんでしたか?」

全くの初耳でございます。なんだか人外じみた能力だと思っただけで、あれはステータスだったのか…………?

「何だか人間味の無い方だとは思ったのですが…」

「あの方は吸血鬼ですよ。この国の若い娘たちを貪り食ってますから、貴方もお気をつけて。近いうちに訪れるであろう宿敵に備えているそうですから……………食欲旺盛な時期なんですよ。」

「エッ、私のご主人様もしかして成長期?それに、D I O様に宿敵なんているのですね、もしかして、ヴァン・ヘルシングですか?」

「まさか、そうだったらどんなに楽チンか。彼の話だと黄金の精神を持つ屈強な一族だとか……………ア、そういうえば貴方スタンドはどうなってるんですか?」

「……………スタンド?……………私の下半身に立つものはありませんし、つける予定もございませぬわ。」

「馬鹿言ってるんじゃないや有りません。スタンドというのはですね、いわゆる特殊能力の様な物で、貴方にも矢に貫かれたお陰でスタンド能力が開花している筈なのですよ。コレ、貴方見えるでしょう?」

テレンスさんが指さした先には人形のロボットのようなものが見れた。目はライトのように鈍く光って口は無い。ほっぺにTDの文字があつて、左右は対象だからかなんだが少し不気味な印象を受ける。これが彼の魔法……いや、スタンド……

「うわっ、コレ、スタンドって言うのですか?」

「アラ、心当たりのものがお有りです?」

心当たりも何も私の赤ちゃんがそれでありませう。

なほるほど、私がずっと魔法魔法呼んでいたものは、スタンドという概念で確立されたものであり、私はそれを全然知らなかったがために、DIO様との食い違いが起こり、スタンドを発現させる矢をぶつ刺された。なんだ、最初から使えますって、言えていれば、あんなに怖い思いをする必要無かったじゃあないか。

「もしかしてスタンドという単語を知らなかった?」

「………はい、今知りました。」

それにしても、テレンスさんのものは二足歩行の人間をモデルにした人型のスタンドだが、私のはどうだろう。私のスタンドは赤ん坊である。これが精神の具現化であるとするなら、私の精神は赤子同然ですよ、と言われているのか。それはそれで腹の立つ案件だが、もつとむかつくのはコイツの能力が能力だけに、私がとち狂った女みたいじゃないかと言うことだ。あんたの精神、狂ってますよと言われているのか私は。ク

ソウ、私自身だからこそ腹が立ってくるぞ……

「はあ……自分が思い描いていたものと相棒が違うと何だか残念な気分になって来ますわ」

「ああ、貴方やはり元々スタンド使いだったのですね。『コレはスタンドというもののなか』とリアクションしてましたし、あなたがこの屋敷に来た時間も曖昧でしたから。もしも日があるうちにこの屋敷に来たなら、彼の猛攻をどうやって掻い潜ったのか不思議だと思っていたのですよ。」

「私がこの屋敷にお邪魔したのは昼すぎ頃です。」

「ならば、ペットショップ……表にいた鳥に追いかけて回されたでしょう？」

「ああ……あの恐ろしい……いえ、なんでもございませぬ。もちろん、危害は加えていない筈です。」

「今日も元気に鳴いてましたから、平気でしょう。」

「それは何よりです……でも、DIO様に怒られませんか？」

「頑張つて事情を説明すれば、仮にも配下に置いた者を理不尽に殺……いえ、叱つたりはしませんよ、多分。」

「今はそう信じておきますね。」

「これから仲間となるペットショップ（鳥）さんには失礼してしまつたから、給料をも

らったからお肉を贈呈しようと思った。

「ああ、そう言えば元々スタンド使いなのに矢に刺されたらどうなるんでしょうかね。」
「……………それは私が体験者第一号と言うことで間違いないかもしれませんね？」

テレンスさんはいやらしい笑みを浮かべて、そろそろ行きますねと椅子を立ち上がった。ぎっくり腰なのか、ギプスをつけている。痛そうにしているので、一瞬さっきの笑い方にこのクソと思っただけ、許してあげることにした。

私の部屋の話

私の部屋にはまだ最低限の物しか無い。まだ私の制服しか無いタンス、モノを書いための机とその上に載っている二冊の置き忘れのような本、ご飯を食べるための小さなテーブル、一応布団あります、と言うような白い柄のないベット、トイレと洗面所とお風呂はくつつついていて狭め。キッチン用品はまだ無い。でも、収納はそこそこあった。そもそも、この部屋はなんの部屋なのだろうか。

まあ、考えたって分からないけれど、結構小さい。でも、日当たりがよくて、いい部屋をもらえたのではないかと思ひ、嬉しい気持ちになった。

実家はクソみたいに汚いゴミ屋敷だっただけあって、私は清潔の大切さを人一倍知っているし、そもそも部屋なんて与えられたことの無い私にとっては、有頂天になるくら

い嬉しいことだった。この部屋を自分の好きなようにしていいなら、どうしよう、嬉しすぎる。流石に許されないとと思うけど、壁紙を張り替えていいなら、私、和柄とかにしたいかも知れない、古臭く無い感じの。それで、ベツトは窓際、タンスはアツチにして……：……テーブルはこっちの方がキッチンからご飯を運びやすいし。

やだ、楽しい。自分の部屋ってこんなにもいいものなのか。私本当に此処に就職して良かった！

私は空に向かってガッツポーズをするのだった……：

後ほど、D I O様の部下の1人、ヴァニラ・アイスさんから多額のお金を渡され、そのお金はD I O様が私に必要なモノを買ってこいと、渡されたお金だと知り、D I O様の財力にハナコは白目を剥いたのだった。

チャンチャン

私に与えられた仕事の話

流石にテレンスさんの仕事を全て変わる事は、私の未熟さ故だが無理なので、与えられた仕事はテレンスさんの仕事の中で最もハード（肉体労働的に）な掃除を任された。

詰まるところ、冒頭に出て来たように、D I O様の食べカスの処理をしろと言うことである。

テレンスさんにはD I O様が「お楽しみ」じやなさそうだったら早めに回収してもいいし、まあ、入れなさそうな時は朝方に来てもいいと言うこと。この屋敷に入ってこれる人間はいないので敷地内だったら煮るなり焼くなり好きにして処理してくれればいいと言われた。

ヴァニラ・アイスさんの能力に頼つてもいいとおっしゃった。D I O様の食ベカスなら彼は喜んで回収してくれるらしい、D I O様信者だから。

さうで、私はどうやって処理しようかしら。なるべく辛くなくて静かに片付けられるものが良いわ。ヴァニラ・アイスさんの能力は死体回収に向いているらしいけれど、私の能力はどうなのかな？死体も黒い赤子に出来たら私はドンドンストックが増えていくし、嫌な匂いもしないならW I N | W I Nだし、料理とかそっち系の使用人らしい仕事を任せてもらえるかも知れない。

目の前に転がる3人の女に血塗れの赤子の体液を流し続けてみると、予想通り、皮膚がドンドン黒くなっていつて、体全体が染まると、縮んで赤ん坊になった……

天職だった………☆

マライアお姉様とお買い物

「本日は貴重なお時間ありがとうございます……どうぞよろしくお願いします。」

「ああ、ハイハイ。そういうのはいいわ、D I O様からの命令だし、仕方なく付き合っ
てあげるだけよ。」

なんだこの美女は……私の心臓は久しぶりに青春の音を奏でていた。

私は初仕事の次の日、自分の生活用品の買い出しに出かけようとしていた。ヴァニラア
イスさんから受け取った大金を、すられないように懐に仕舞い込み、D I O様の部下の
1人の女性が同伴してくださると言うことだったので、屋敷のエントランスで待つてい
た。

そうしたら、凄まじく顔の良いお姉様がこちらに向かってやってきたのだ。そう、私
に同伴してくれる女性とは彼女のことであつたのだ。

彼女はマライアさんという方で、まさにお色気お姉様という言葉がどっしり当てはま
る女性だ。長い足を惜しげもなく黒タイツで際立たせているファツションは、数々の男
を虜にしたであろう素晴らしいプロポーションも相まって、女の私からみても魅力的で
ある。

それに、少し気怠げでSっぽい態度は、私の好みにドストライクで、すごくドキドキ
した。自己紹介と社交辞令の挨拶だけで、私は彼女のことをとても好きになつてしまつ
たのだつた。

「早いとこ済ませちゃうわよ。エプロンとか足りない洋服は自分で選びなさい、家具な

んかはおんた英語下手くそだから私がやつといてあげるわよ。」

街は私の見たことのないもので溢れていた。ガヤガヤと人で溢れに溢れていて、日本の制服の私は目立っていたようだ。めっちゃ狙われてる。そんな時は赤子の餌食にしてくれる……………

マライアお姉様が、私の熱視線に気付いているようで、先程からわざと手を繋いでくださっていると言うビッチ加減が最高です。

「あんだ、最初はどこ行きたい？」

「あ、えつとですね……………キッチン用品みたいです…かね…フライパンとか…」

「ふーん、じゃあアツチの店ね。」

マライアお姉様は私の手を引いてすすい進んでしまう。とにかくついていくのが大変で私は一生懸命足を動かした。

私はお姉様に連れられた店で鍋や薬缶やフライパンとか小さめなものを購入した。

ピカピカのフライパンは、実家の錆びたり変なものごびりついたフライパンとは違って、私の胸を高鳴らせた。私は結構料理に興味があったから、最初は家庭科部に入るつもりだったのだけれど、私の実家がゴミ屋敷だと言うことは学年のネタになっていたので、家庭科部の部長の耳にも届いてしまい、入部を拒否された。だから、自分だけのキッチンがあると言う事が飛び跳ねるくらい嬉しかった。お菓子作りの道具が目

入ってすぐく欲しくなっちゃったけど、流石に厚かましいと思ってやめた。皿は有り余ってるから、適当に取っていけばいいとの事だった。

「ボウルや泡立て器くらい買ったって、何も言われやあしないわよ。」

「いえ、自分のお金で買ってこそその達成感ですので、お給料が入ったらにいたします。」

「そ、家具屋が近くにあるわ。行くわよ。」

家具屋と言われても買うものは余り無い気がするけど……だってベッドも机も有れば正直私は十分だった。

「何も買うものないの？なんか買つといてもDIO様のお金なんだから、使っちゃえばいいのに。」

「私にはもう家具は十分ですから……ア、」

「何か見つけたの？」

私の目線先には深い青の壁紙が目に入った。私に与えられた小さなあの部屋に青色の壁紙をはって、自分で描いた絵を小さな画に入れて飾つたらかわいいかも知れない。でも、無駄なお金が掛かってしまうし、我慢しよう、必需品じゃ無いし……衝動買いたい時とはこういう時なのね……

私が悶々としているのを見て、マライアさんは私の肩を叩いた。

「そんなに迷ってるなら買っちゃいなさいな。それでも嫌ならお金を稼いで返したら良

「のよ」

「返しても、そのお金は元々D I O様から出た物なんですけどね。」

「あんた幾つよ？」

「今年で17です。」

「なら、保護者は一応D I O様ね。どうせ残ったお金は返すんだから、保護者に甘えなさい。其れも抵抗があるなら、私を買ってあげるわ。見返りは求めるけどね。」

「ええっ!? 申し訳なさすぎます！ お姉様やめて下さい！」

「お姉様？ なら、あんたの姉貴分として買ってあげるわ。」

「いやいやいや、でも」

「でもは無しよ。私の言うことが聞けないっていうの？」

「聞けますけど。」

「ならよろしいわ。黙っていらっしやい。」

そういうとマライアお姉様はサツと青色の壁紙を購入してしまった。勿論貼るのは責任を持つて私一人ですが、それよりもお姉様が買ってくださった壁紙の中で過ごす事がちよつと恐れ多い気がして、今から緊張してきた。

また、マライアお姉様の女気に私の脳味噌はやられてしまって、そこから先の買い物事は全然覚えていないが、お姉様が寝巻きに超セクシーなスツケスケのランジェリーを

勧めて来た事だけは覚えている。一瞬、これで私を襲いに来なさいということかと錯覚したけど、さすがに馬鹿な考えすぎると、地味な高校生にはハードルが高すぎて遠慮させてもらった。

壁紙を貼り終えて、家具を好きな位置に移動させた後の私の部屋はあまりにも完璧になりすぎて、自分でも恐れ多いほどだった。

そして、マライヤお姉様を買っていただいた壁紙をぐるっと見回すと、私の頭にはお姉様がぼんやり浮かんでくるのだった。

「お姉しゃましゆき〜〜っ！」

今日もお仕事頑張るぞ〜〜〜☆☆

第5話 D I Oという男

ハナコから見たD I Oという男性

「おい、小娘。」

「ハナコです、D I O様。如何致しましたか？」

「死体になれているな。」

「もう10体以上片したので。」

「片付けたら下がれ。」

D I O様と私は、私が死体回収をしにD I O様の部屋に行く時くらいしか顔を合わせない。が、彼が毎度の事、私に話しかけてくるようになった。

私は誰にでも自分に興味を持ってもらえて嬉しいと言う感情を抱く女ではない。ましてや、彼のような吸血鬼に気に入られても、彼は乙女ゲームに出てくる厚かましいイケメンでは無いのだから、私を擁護してくれる訳でもないし、厄介ごとの前兆でしか無い。

今考えればそりやそうだ。

最初は父のようなクズですら雇う心広い就職先と人生ナメ腐った考えをしていたけ

ど、あんなクズ雇うところなんて、悪い事考えてるロクでもない組織に決まっていた。

「おい、小娘。」

「ハナコです、D I O様。如何致しましたか？」

「スタンドを見せろ。」

「どうぞ。」

「……………赤子か。こいつを殴ったりぶついたりして攻撃を加えるのか？」

「いえ、正確には黒いのは割って戦いますね。」

「割ってみていいか？」

「ウンコ垂れ流して死にたいならどうぞ。」

「……………下がれ。」

「おい、小娘。」

「だからハナコですってば、D I O様。如何致しましたか？」

「その本を取れ。そしてこの本を左から3番目、1番上の棚、左から32番目の位置に

閉まってくれ。」

「承知致しました。お預かりさせていただきます。」

「時に小娘、お前は本は好きか？」

「好きです。」

「好みは？」

「……………後味のすつきりとするミステリは嫌いです。どうぞこの本ですね。」

「そうか、下がれ。あと本違うけどな。」

「おい、小娘。」

「ハナコです、D I O様。如何致しましたか？」

「何でもない。」

「D I O様もしかしてめっちゃ暇なんじゃ無いですか？」

「わかるか？」

「おいおいおいおい、ちょっと待てよオ、お前遊び人設定じゃなかったのかよ、D I O様。」

「私が冗談で言った「暇ですか？」と言う言葉。しかし意外、それは凶星であった。私は絶句した。こいつ、若い女の子の命を奪っておいて暇とか言ってるぞ、悠々自適な生活してるくせにな。」

「…えーつと……………遊びます？」

「しかし、私にたてつく権利など無かったし、そんな事したら首が飛ぶこと間違いなしだ。」

「正直めっちゃ遊びたい。しかし……………ただ……………それだとやっぱりこのD I Oに憧れる者達

に示しつかない気がするのだ。」

「……………（めっちゃウズウズしてるやん）」

「このD I Oが、この私がだぞ。実はニートしてるとか、可愛い方面までファンを開拓しちゃうだろ。」

「ファンのくだけは流石に冗談ですよね？」

「……………。」

「進路指導の教師ですか？目を合わせてくるのやめてください。本当にやめて……………そうですね、秘密を共有する友を見つければいいんじゃないでしょうか？」

「友達……だと？」

「こう、D I O様が大口開けて笑い合えるって感じのお友達を、ですよ。」

彼はとても暇だったらしい。

今は屋敷に身を隠してゆうっくり力をたくわえて、その間、部下への指示と金が入ってくるように根回しする仕事は有るけど、それ以外は基本本を読むしかする事が無かったらしい。

そうして、D I O様は私のアドバイスの元、気の合うお友達、と言うよりも秘密を共有して遊べるお友達を探しに、屋敷のメンバーを1人1人見て回ったらしい。

が、誰も応じてくれそうな人（実のところ本人の好みが大きいと思う）が居なかったらしく、彼はまた私に話しかけて来た。私が彼の部屋にしたい回収に通り始めて一週間くらいした頃から毎回毎回話しかけてくるので、この人私と話したいのかしら、と薄々感づいてはいたけど、結構寂しがり屋のくせしてDIOという男は、こだわりとプライドがロッキー山脈のように連なっている男なのであった。

後日、DIO様は私に

「俺は深く考えた。その結果、部下であるお前に暇つぶしを命じれば、お前はやるしか無いのだし、屋敷を夜な夜な見て回るよりも効率的だと言うことに気づいた。よし、お前を任命する、テレンスは人形遊びに忙しいからな。あと、ヴァニラはちよつと怖い。」と仰った。

小学生でも分かるようなことを恥ずかしげも無く、いかにも素晴らしいものを発見したかのように言う、小5男子のようなこの上司に、私は深くため息をついた。

あと、知りたくもなかったテレンスさんの性癖を垣間見てしまい、

「WRYYYYYYYYY!!!」

と勝ち誇ったようにハイになっている彼とは真逆に私は、性癖暴露によるショックを受けてブルーになっているのであった。

この時、ハナコのDIOに対するイメージは悪のカリスマ、怖い、に「小5男子」「め

んどくさい男」「ちよつとあんぼんたん」が追加された。

2人の秘密の密会

「八つ裂きの刑……これが一番好き。」

「これは、パフォーマンスが目的だから派手だな。四肢を馬の馬力で引きちぎって殺すと……人間の身体というのは結構丈夫だから、間違つて駄馬を用意されたらたまつたもんじゃないや無いな。ククク………地味なお前を処刑する時は、こう言う派手な殺し方がいいいな?」

「引きちぎれなかつたら健を刃物でぶち切つて仕舞えばいいんですわ。それと、余計な言葉が混ざつてますわ。大体、使用人を夜中にベッドに引き入れるなんて、いけない人ですわね。」

「お前、そう言う言い方すると余計に昼ドラマみたくなるぞ。」

「みたこと無いくせに何言つてるんですか。」

「………w r y y……」

私は今、D I O様のベットでフランスパリの処刑の歴史という本を眺めている。シャルル・アンリ・サンソンは歴史人物の中でも好きな方の男性である。異性としてはなく、死刑執行人という特殊な職業に対する憧れからのものだ………彼は、慈悲深い人

だったらしいけど。

話が脱線したが、メイド（格好だけ）に就任してから約1ヶ月。私は1週間に1度ほどの頻度でD I O様の部屋に呼ばれらようになっていた。決して卑猥な意味ではなくて、馬鹿みたいな理由である。

おっと、口が滑った。彼の、大事な大事な、暇つぶしの仕事ですわ、クソくらえ。（そんなに嫌でも無いけど）

彼の暇度は彼にとつての就寝前、ピークに達するらしく、私は朝の4時ごろに呼び出されることになっていた。

一週間に1回の呼び出しに関わらず、彼の夜型の生念により、私の生活習慣はボロボロで夜型人間になってしまった。彼の身のお世話をしようとすると、どうしても夜型になるので、それは職場が人間向きでなかったと言うことで仕方ない。

最近、私の仕事は死体処理以外にも洗濯やら皿洗いやらでやつとメイドらしくなってきたところだ。なぜ仕事が増えたかと言うと、死体処理が板についてから、テレンスさんの仕事を3分の1ほど受け負うことになったからである。テレンスさんのオーバーワークには私もドン引きした。ヴァニラさんは手伝わないのかと思って尋ねてみると、彼は護衛や他の人間を円滑に勧誘するためや経理的な仕事などをしていているらしい。ハイレグで。

いやいやいや、馬鹿にしているわけじゃ無い。人のファッションに口出ししちやあいけないよなあ？たとえ、二十代後半の男が毎日スクール水着みたいな格好してても、彼には信念があるかも知れないんだからね。

「おい小娘、お前他のことを考えているなあ？」

「いえいえ、シャルルがどうしたんですっけ？」

「結婚した。」

「そうそうそうそう。で？」

「小娘、飽き始めているなあ？」

「いえいえいえいえ、ぜんぜん……………ふわあ…ですわ。」

「眠いのか？」

「……………眠く無いように見えますか？」

「見えはしないが、寝かせるわけにはいかない。」

彼との遊びは案外質素なものだった。お互いの好みの本を一緒に読んだり、外国版コックリさんみたいなものを試したり……………（吸血鬼でも呼び出せなかった）

もつと夜の街に出てギャンブルでもするのかと思っただけれど、そんなこと全然無くて、たまにあやとりなんかもしちゃうくらい、落ち着いていた。

「D I O様、本がお好きですよね。」

「知識は有れば有るだけ良い。金と違ってな。」

「お金は、駄目なんですか？」

「このDIOには、金はいくらあっても身の丈に合っているが、お前のような下々の民が金を得たとて、持て余すだけだろう？」

「確かに………経済的なちようどいい身の丈というものは、下には伸びませんが、人の素質によつて上限はあると思います。私、お金がない惨めさは知っていますが、でも、お金というのはあり過ぎてても努力をしないとイケないんですから、難しいものです。」

「金に執着し過ぎると良い事はない。」

「昔、世界一の金持ちになりたいって短冊に書いた事があります。」

「タンザク？」

「ジャパンの願い事を書く紙ですよ。」

「叶ったのか？」

「叶っていたらこの屋敷を訪ねていません。」

「………お前の人生も波乱だな。願うことは悪いことじゃあ無いさ。」

「………ひとつだけ、「自分の好きなように生きてみたい。」という願いには、近づいていると思います。」

私は好きに生きるために、身内を3人殺したのだ。

弟を幸せにしてあげたい、というのは確かに「私の」願いであるならば、それは私が「好きに生きる」ことを願って実行したことだ。

「小娘、お前は17年という人生に、取り返しのつかないことがいくつか有るようだな。」
「わかります？ 実行したあとですから取り返しがつきませんよ……後悔もありませんが。」

「それを実行に移すか移さないか。また、どのような手段を取るのか……私は結果が全てだとは思わない。だが、社会は結果が伴わない実力は認めない。私も事を成し遂げる能力を持たぬ者には興味が無い。それは今も昔も私だけではなく、多くが認識していることであり、他人からの視線でもある。」

「……D I O様は私が、良い結果をもたらす人間だと思いませんか？」
彼は、私の目を数秒見つめた後、深くため息を吐いた。

「……お前を生かしたのは俺の気まぐれだ……ただ、お前はスタンド使いであり、あの状況を生き延びた運も有る。期待はしているさ。」

そう言った後、日が昇り始めていたのでD I O様は彼の寢床である棺に移動した。おやすみなさい、と声を掛けると珍しく、お前もな、良い夢を、と私も気を使うような言葉をかけて、頬に口付けた。

棺が不気味な音を立てて閉じる。

「…………おやすみなさい……ませ……………」

棺が閉まる音を聞くまで私は驚きで固まったままだった。このキスは、異性としての口づけでは無く、多分慈悲とかそういう類のもただろう。しかし、彼のような殺人鬼に慈悲やら愛やら……………そっちの部類の心が残っていたとは驚きである。

あの慈悲のじの字もなさそうな金髪男に、みじん切りしたキャベツのひとかけらほども相手を気遣う心があった事に、何となく気持ち悪い気さえしてくるのであった。

流石にそれはかわいそうかも知れないので、「D I Oしやまにも優しい気持ちくらいあるんでちゅね〜」くらいには思ってあげよう。

その後、私は眠りにつき昼の10時まで寝ていた。

ハナコとギャンブルの話

「……………なんでこんな事になったの…」

元はといえば、私が口を滑らせてしまった事が原因だった。私がD I O様に対して抱いている、彼の遊びのイメージはギャンブルやら女あさりだと言う事を先程上記したと思うが、それをうつかりD I O様本人に伝えてしまったのだ。

「D I O様ギャンブルはなさらないんですね、強者をバツタバタ倒してカジノ王とかになれそうな雰囲気ありますけど。」

「ほお……お前がギャンブルに興味があったとはな、静かな顔をしておいて金遣いは荒い方か？」

「……………私が金遣い荒いと思えますか？ましてやギャンブルなんて、すつからかんになるどころか借金負わされます。それで拳句1日300円の仕事に就かれますよ。」

「被害妄想は激しいな。」

「ギャンブルなどでお金を稼げたら人生楽チンですよ。」

「……………行ってみるか？」

「エ……」

彼は思い出したかのような顔をしていた。新たな金稼ぎのツテを思いついたらしい顔である。

そこからは怒涛の勢いで遠出の支度が始まった。何が起きたか彼の気まぐれで、私はD I O様、テレンスさん、ヴァニラさんと一緒にラスベガスに行く事になってしまったのである。

「待ってください、お願いします、後生ですから……アアッ！」

飛行機はちよつとだけ楽しかったが、今現在、自慢の黒髪をズルズル引つ張られてカジノに連行されている現状に、喜びもへつたくれも無かった。

いつものセーラー服を脱ぎ、私は露出度の高い黒いスケスケのドレスを着ている。乳

首が見えそうでハラハラしながら歩くのは楽しいものでは無かった。

「貴様、ここまで来ておいて観光で終わらせるわけないだろう？ 私が負けても怒らないよ、と言っているのだから、お前は楽しめば良いだけだ。」

「エ、エ、楽しむって1万円くらいの安いギャンブルですよ？ 初心者でも出来るくらいの。」

「……………そんなわけ無かろう。賭けるのは億単位だ。」

「ヒイイイイ!!!無理ですわ！ 私殺されてしまいますー！」

「ククククク、安心しろ、安心しろよハナコ。もしお前が負けたせいでこのDIOが破産したら、お前をなるべく高く売って許してやるからな。」

どうやら私は負けたら売られるらしい。

嫌、嫌だ……………ギャンブルなんてしたこと無いぞ。

負ける負けない以前に私は熟練のギャンブラーにルールも全然分からないまま挑むのだ。無理に決まってるんだろ、そんなルール聞いたって、カックカクの生まれたての小鹿vsヒグマみたいなもんだろ。

「DIO様許して……………ギャンブルなんてしたこと無いんです…汚いおっさんに私の人生売られたく無いです……………大体私なんて高値で売れるわけないじゃ無いですか……………」
「スタイルは悪く無いぞ」

「やだホント?」

「何、私が負けるだけのギャンブルをする訳がないさ、勝てば一獲千金、負けてもマア…………ちよつと食事が質素になるだけさ。」

「あ”あ”あ”あ”…………」

そうして私はD I O様に連行された。ロスウェル事件の宇宙人さながらの悲壮感が漂っていた。

同行者のテレンスさんとヴァニアさんが、両手にジュラルミンケースを持って来たのを見てもう意識が途切れそうだった。

「…ケ・セラセラ」

なるようになるさー…☆

ハナコのギャンブル編 t o b e c o n t i n u e d

第6話 続 ハナコとギャンブル ですまつち

続 ハナコとギャンブルの話

「なんでなんでなんで…」

『いいですか？ 貴方の能力はいわば一撃必殺なんです。罨を張ろうだとか、ちゃんと考えて戦って下さい。でないと高確率で負けますからね、負けたら貴女、オークションにかけられてどこぞの変態ジジイルートでジ、エンドですよ。』

『お前、陸上の選手だったのだろう？ なら足は速いんだから、それでなんとか凌げよ。負けたら許さん。』

「何が頑張れば出来る、よ……全然こんなの出来ないわ…」

目の前には筋骨隆々としたスキンヘッドの男、スキンヘッドに比べれば細身だけどマツチヨな金髪の青年、ヒグマ、中肉中背の中年男性がいる。そして、彼らと同じ舞台に私がいる。

中央に舞台、その周りを囲むように観客達の席が並んでおり、一部のVIP席の様なところにDIO様達が座っている。

こここの会場に入った瞬間もう何が起こるか分かるような舞台だった。

これはバトルロワイアルだ。

誰が生き残るかに観客は多額の金を掛けているのだ。

ここは流血沙汰を楽しむ違法な賭場で、観客には明らかにやのつく自由業の方々や、私でも見たことのあるような有名な方もいらつしやつた。また、皆さんヤバいくらいの金持ちだ。

つまり、誰に賭けるかで大金が動く上に、日々の鬱憤ばらしにもちようどいい、刺激的な賭場でもある。まさに金持ちだからこそできる、人の生命を弄ぶ贅沢な遊び。

最悪………

このギャンブルデスマッチ、1日に二戦あるようで私が今出場しているのは最も盛り上がる二回戦目だ。

一戦目は先程私も観覧させて頂いたが、これは酷い。

まず、選手に2人バトロワ熟練の方々がいるのは分かった。

それはいい、だけど、完全初心者と男たちが楽しむ為の女性がいるのは非常に不愉快極まりなかった。とくに女性の方。彼女は非常に可愛そうで、えぐいプロレス技を何度もかけられて身体中アザだらけにされた拳句、最後は素っ裸にされて性的な屈辱を受けた後に男に馬乗りされて殴り殺された。

一回戦目の女性は金髪のとて美しな若い年くらいの少女でだった。観客席で「なん

で娘なんですか!? 借金したのは私なんです!!」と黒服のサングラスに掴みかかって泣き叫んでいる父親らしき男性がいたので、どうやら彼女は父親の尻拭いで殺されたらしい。

で、今日の二回戦目のその女性のポジションが私なのである。

ああああああ……私殺されるのね……

一回戦目の男ども、勝者の男性はスタンド使いで、もう1人は強そうに見せてそんなこと無かった。だって、スタンドが見えていなかったから。完全初心者、女性はもちろんスタンド使いでは無い。

つまり、今私の前にいるこいつらスキンヘッドと金髪、どっちがスタンド使いなんだろう……いや、どっちもスタンド使いかも知れないから、2人でもかかられたら私はボコボコにされて弄ばれて殺される……あとヒグマがいるのはなんで……ヒグマよ、人間じゃ無いし、すごく大きい。3メートルぐらいあるぞ……最悪。

逃げたい、でも逃げたらDIO様に殺される、DIO様は誰に賭けているのかしら……
エ、私? 私なの? 違うでしょ?

次の瞬間、ホール全体の照明が落ち、いつのまにか登場していた司会者にスポットライトが当てられた。

『サア始まりました! 我がカジノの目玉、バトルロイヤルデスマッチ!! 1番の大金が動

くこのゲーム!!参加者は十人十色、一国の王族に世界的ミュージシャンにエジプトの大富豪!その他の皆様も高貴な方々ばかりであります。さて、このゲームのルールですが至つてシンプル!ステージ上に立っている選手5人が殺し合い、最後に残る者を予想するといふのでございます!サア、では選手のご紹介をさせて頂きたいと思ひます!」

スポットライトはスキンヘッドの男に最初に向けられた。

『ア、彼の名前はブライアン・スミス、元凄腕の兵士でしたが、あまりに残酷な殺し方から上司に反感を買い、落ちに落ちて今はこの死のステージに上がつていふというわけであります。そして、彼が持参した武器はメリケンサック!いやア、このメンバーにメリケンサックを選んできるところ、自身が伺えますなア?』

次に紹介されたのは金髪 of 男だ。

『続いては彼、シヤナ・アンダーソン!彼はこの中で一番の注目株であります!この男美丈夫、なんと、強姦、強盗、恐喝、窃盗、そして殺人!殆どの犯罪をコンプリートしており、さらに、2年前アメリカを騒がせた女性連続殺人の犯人なのだア!!そんな彼が選んだ武器は、ゴルフクラブ!个性的過ぎるうう!!』

このシヤナという男、私にとつても注目株である。

悪い意味で……いや、本当に無理だ。

舞台上に上がつてからずっと私を見ている。私に対してたまにウィンクしたり、投げ

キツスしたり、股間を振って挑発的な態度を取ってくる。

無理無理無理………最悪、早く殺されるブライアンに。

でも、このクソのおかげで、なんでこんなのに罵られて死なないといけないのだ、と少しだけ闘争心が芽生えた。

続いてスポットライトが当たったのはヒグマと中年のオツサンだ。

『この2人……いや、1人と一匹に説明はいりませんねエ！こつちのオツサンは借金まみれのクズ！ですウ。日本に残して来た妻子には大金持ちになつて帰ってくるぞ、と意気揚々と伝えて来たそうですが、コツチのヒグマのジョンソン君に食われるのがオチですかねえ？？ヒグマのジョンソン君6歳！数年間人肉しかあげてません！今まで死体しか食べてこなかった分、生きた人間を見て興奮しています！武器は己の爪でしょうね！』

扱いが雑だった。

『さてさてさて、今宵のビツチちゃん……じゃなくて、可憐な女性選手はアアア、日本人のハナコ||ヤマダちゃん17歳！エー、ハナコちゃん実は、今さつきご主人様に捨てられちゃつた可愛そうな雌猫ちゃんでして……だからア、みんなに可愛がつて貰いたくて仕方無いようですねエ！さて、選んだ武器は釘バッド！ヒエ………自分が殴られたいのかな？』

この司会、後で殺してやる。金髪の変態はこっちみんな。

不本意だけど、世界のクソの中でもD I O様はマシな方だと思った。

司会が選手を紹介し終わった後、其々の倍率が発表された。ブライアンが1番倍率が低くて、2番がヒグマ、3番が変態でオッサン4番、最下位が私の20倍。エ、皆んな一桁なのに私20倍なの？ どんだけ人気ないのよ……

因みに人気があるのはヒグマと変態で、ブライアンはあんまり人気じゃなかった。私は……

私は目を疑った。

エ、1人50億くらいかけてる人がいる……

その人は勿論D I O様だ。本人は不気味な笑みを浮かべているけど、周りからはクスクス馬鹿にされていた。そりやそうだよね、私女だもの。さつきみたいにボコボコにされてパイパイ見せて終わるんでしょって、思われてますよ。

そんな中でも、D I O様は私に50億投資してくれている。私、本当に彼にとっては負けても痛くないセーフなゾーンでお金を賭けるんだと思っていた。

「D I O様……」

彼は私をそんなに信じてくれていたのか。

こんなに人に期待された事なくて、涙が出そうになってしまった。D I O様は本気で

お金儲けをしようとしていたのか、と。私をデスマッチに参加させてことは許せないけど、頭引きちぎって頭蓋骨馬糞を擦りつけて、ゴキブリ口に詰め込んででも許せないけど、彼も相応のリスクを負っていることを思い知らされ、私の心には少しの責任感が生まれた。

確かに、50億有れば、私くらい全然買えますわ……

「エ、DIO様本当に自腹で50億ですか？」

「馬鹿いえ、そんなわけないだろ、バカ令嬢が親の金盗んで寄越した金だとか、ババアが私と寝るために積んだ金やらを色々まとめたものだ。ヴァニラにも伝えて無いから今後の予算とかに全然関係ないから安心しろ。」

「私達の知らないDIO様のどうでもいいヘソクリって事で宜しいですか？」

「しかも40億はどっかのバカが、頼んでも無いのに私に寄越した金だ、今さっきな。だから賭け金に緊急の追加だ。」

「確かに私どもは10億しか運んでいない………おお、さすがDIO様です！これもDIO様の人徳あつての事なのですわね！」

「ブレないなヴァニラ………」

そんな会話をDIO、テレンス、ヴァニラの3人が話している露知らずハナコは感激してやる気を滾らせているところだった。哀れにもこの愛に飢えた少女は金という1

番現実的な投資を目の前にし、現在進行形、DIOに対する感謝や尊敬や親愛の類の感情を募らせていくのであった。

『サア、お待たせいたしました！バトルロワイアルデスマッチ、スタートです!!!』

「まあ、小娘に期待してないわけじゃ無いさ。だが、万が一にも殺された場合はそれはどうでも良いということよ。」

ここからの戦闘描写は作者の文章力の問題で三人称視点やらハナコ視点やらちよつと混ざつてる文章で物語を進めていっています、誠に申し訳ございません

戦闘が始まって、まず最初に仕掛けたのはスキンヘッドの男ブライアンだった。中年のオッサンにつかみかかり、物凄い腕力でヒグマにぶん投げた。オッサンが宙を舞う。

「うわああああああ、アー」

オッサンは見事にキャッチされて熊に切り裂かれて食べられてしまった。

え、うそん、そんなに早い？つていうか、人間が人間をそう軽々と投げられるものなの？スタンド能力なの？

ハナコはなるべく冷静にいることを心がけたが、一対一では無いこの戦い、あの人はこの人はと考えているうちにだんだんと混乱してくるのだった。

熊はオッサンを一心不乱に食べていて、ブライアン君は熊を仕留めようと背後に回っている。変態はハナコに近づいてきていた。ハナコはそれに気付いているので少しづつ

つ場所を変えながら、強がっているが怯えて何もできない女性を演じた。強がっているの設定は最初に変態野郎を睨んでしまっているのだから付け加えた。

「なんで逃げるの？」

「近づかないでください。」

とうとう変態はハナコに話しかけてきた。ハナコが逃げる速度も速くなり、変態が追いかけてくる速度も速くなった。

変態は構わず話しかけてくる。ハナコはこいつだけに構ってられないので、一生懸命に熊とブライアンの闘いにも目を向けるのだった。

「僕東洋人の女性って一番好きなんだ。」

「私は金髪の男性がもうトラウマになりそうです。」

「ハハッ、本当々？相思相愛だね僕たち。」

「何言ってるんだこいつ」

「ねえ、君は処女？」

「うわああああ!!アウトだああああ!!!」

ハナコはやけになって走って走ってしまった。変態のあまりの気持ち悪さに吐き気を感じたのだった。

少しブライアンとヒグマに近づいてしまいうけど仕方ない、この変態に私耐えられない

……!

ハナコは別に男性恐怖症というわけでは無い。しかし、自分の成長と共に父親から性的な目を向けられるという経験から、自分に対して性的な干渉をしようとする、又はしてくる異性に対してとてつもない嫌悪感を感じるのだった。

ブライアンとヒグマは格闘している。ブライアンが熊の背を土台に高くジャンプした。

どうやらブライアンはスタンド使いらしい。背中から筋肉質な赤い男性のスタンドを出現させ、熊を殴りにかかっている最中だった。

ガン！と大きな音がり、観客全員、私たち選手もこれはヒグマを仕留めてくれたかと思った。

が、倒されていたのはブライアンの方だった。大きな音は、彼の頭が吹っ飛ぶ音だった。なんと、ヒグマもスタンド使いだったのだ。ヒグマのスタンドは四足歩行のガイコツの様なスタンドで、見るからにパワータイプだ。それに、人間が出す物と比べてとても大きい。本体が高いと、スタンドもこうなるのだろうか……

ハナコは数秒間、ヒグマがスタンド使いだということに呆気にとられた。すぐにハナコはペットショップを思い出した。そして少し遅れて、

そうよ、ペットショップちゃんみたいに動物のスタンド使いも有り得ない事じゃ無

かった！不覚だったわ……………

ああ、でもクマのスタンドをガン見しちゃいけないわ。もしも後ろの変態もスタンド使いだったらどうするの？私のスタンドは殴ったり出来ないんだから、スタンド使いだとバレてしまったら致命傷になる。

と気づき、変態がどんな反応をしているか振り向いた。

「エツ……………ぎやうつ！」

「そうだねえ、熊がスタンド使いなんでビックリだよ。僕も初めて見たよ。でもハナコちゃん、君もスタンド使いだよね？」

なんと、変態はいつのまにかハナコの真後ろに立っていた。

ハナコは振り向いた瞬間、変態に取り押さえられてしまったのだ。指一本動かさないような取り押さえ方、スタンド使いということがバレている事に、ハナコの頭はパニックになっていた。

…なんでなん？なんでバレてんのよ……………

「君、叫び声も上げないし、どうも行動が冷静すぎるんだよなあ、まるで自分にはとっておきの切り札があるみたいだね。マッコの男とヒグマに釘バッド一本で女の子な勝てる訳ないのに、君は勝機のあるような動きをしている。なら、スタンド使いとか考えられない…………………………」

た、たしかに私の動きは一般人の女にしては冷静に動きすぎた。もつとおどおどすれば良かったわ!

ハナコは凶星を突かれて、ハッ、としたような顔をしてしまった。すると、変態はニヤリと笑い、

「つて、今カマかけてるんだけどやっぱりスタンド使いなんだ。」

と、言った。

そう、この男変態のくせして頭が良かったのである。

ハナコは自分が変態の罠にハマりにハマってしまったことに、悔しいと思うと同時にこの男をぶちのめしたい気持ちに駆られた。

ううう、こんなヤツ、私のドグラ・マグラでどうとでも出来るんだぞ、クソクソクソ、殺してやる殺してやる…気持ち悪い…

ハナコはDIOの屋敷に勤めて2ヶ月の間、能力者はみんなスタンドに名前を付けていると知った。ハナコは自分のスタンドに自分の好きな小説からドグラ・マグラと名付けた。

この、ドグラ・マグラに殴る、蹴るなどの力は無い。

だから、もしも変態のスタンドが、DIO様レベルの身体能力を兼ね備えており、私の頭を吹き飛ばせるほどの力を兼ね備えていたらどうしよう。私は最後の最後まで

黙ってチャンスを伺うしか無くなるかも知れない。

「よ、よくわかりましたね。」

「やっぱりそうだよね。でね、ボク困ってるんだ。ハナコちゃんを見た？どうやらあのヒグマの能力はレーザービームみたいになにかを打つ能力らしいんだけど、何を飛ばしてるのか全然見えなかった。」

「ちよ、ちよつと待ってください、貴方私にヒントを渡してどうするんですか?」

「簡単だよ、倒して欲しいんだアレを。」

「はあ?嫌ですよ、そこまで能力が分かっているなら自分でしてください、私のは戦闘向きじゃ無いんですよ!」

「困るなあ、じゃあこのまま殺しちゃうよ?」

「いやいやいや、待ってください、貴方の能力でなんとか出来ないんですか?」

「僕の力じゃ無理だ。相性が悪すぎる。」

「って言って、私の能力を探るつもりですよね??知ってます」

「で、やるのやらないの?やらなかったらこのまま……………」

「この至近距離なら、死ぬのは貴方です。」

「ここで強気にならなきゃやられる……………」

ハナコはここで、ハッターに見えるかも知れない真実で戦いに出た。ヒグマがそろそ

ろブライアンを食べ終わる頃だ。こちらに近づいて来ている。

「ほら、どうするんです？ヒグマが近づいて来てますよ、本当に貴方の能力が熊ちゃんの能力と相性が悪いなら、そろそろ退いた方がいいんじゃないですか？」

「ハツタリかまして強がらなくていいよ。」

変態はニコニコしていたが動かなかった。

私がこの至近距離ならば変態を瞬殺出来るというのは本当だ。彼が本当に戦闘向きじゃ無いならね。

彼にあのヒグマを殺せる力があるなら、さっさとヒグマを殺してハナコを助ければいいだけだが、わざわざこのように脅迫してまでハナコにヒグマを倒す事を頼んでいるのは、果たしてハナコの能力を危惧しているだけか、それとも、ハナコの能力を危惧しているからヒグマを倒して能力を見せろと命令しているように「見せかけたい」本当に戦闘向きじゃ無い能力者……

おかしいじゃあないか。

ハナコは冷静になって考え直す。

私がスタンド使いと悟り、自らの能力をバラさずに私のスタンド能力が如何なるものか見定めたいのは分かる。

だけど、ここまで、ここまで交渉してくるなんて、ちよつと本気になりすぎじゃない

?

確かにハナコは明らかに戦闘慣れしていない女だっただろう。だからこの変態金髪男は、私が焦って言うことを聞き、自分に倒せないヒグマを退治して、最後は私の能力をコンプリートして、痛ぶって殺すつもりだったんじゃないか？そう、考えたのだ。

ハナコは賭けに出る。

この、ヒグマがこちらに突進して来ているという状況で、変態が私を殺さず逃げたら、本当に戦闘向きじゃ無いとみなす。闘いに向いているなら、至近距離なら変態を殺せると言った私をすぐさま殺すか、気絶させ、ヒグマを倒して私を罫り殺せばいいだけだからな。

「どうします？ヒグマもうこっちに来てますよ。」

「……………」

「どうするんですか？」

「君俺のこと舐めすぎね。」

ハナコの背筋に悪寒が走った。変態男はハナコを解放して、距離を取ったのだった。

To be continued

第7話 続続 ハナコとギャンブル カジノ王に俺はなる（嘘）

ヒグマはスタンドを出現させながらハナコの方に突っ込んできた。急いで体勢を整えて、素早くヒグマのスタンドを見極める。よくよく見ると、大きな骸骨のようなスタンドだが、足が無い。

どうやら変態が言っていた、レーザーのような能力は持っているがスピードは本体に依存していそうだ。腕力はあるかも知れないが、一瞬の隙を突くことが出来れば、一発で仕留められる。

私だってやればできる！

ハナコはヒグマに向かって走った。回避する方向は左か右、どちらの腕を振り下ろすかによる。

右腕を大きく振りかぶった。つまり、進むべき方向は左だ。そのまま、見えないレーザーを避ける為には熊とスタンドの死角に入るしか無い。

スタンドの顔はまだハナコの方を向いていた。このままだと撃たれてしまう。が、当たらなければいいのだ。

ハナコは本体の赤ん坊を抱えて自分の周りを黒い赤ん坊で覆った。一か八かの賭けだが、これで背を低くして走り抜ければ、レーザーは適当な黒い赤ん坊を割るだけで自滅してくれるんじゃないかという、ちよつと思いつきの作戦である。

しかし、やるしか無かった。そして、この作戦が成功しても、もう能力があの変態にバレてしまっているので直ぐに変態への攻撃を始めるしかない。

予想通り、レーザーはハナコの顔面スレスレを通り抜け、四つほど割れた黒い赤ん坊からの汁が、ヒグマの主に顔にジャストミートした。致死量に達したため、黒く変色し黒い赤ん坊へと変化する。

次は変態を仕留める。

変態もとうとうスタンド能力を出現させ、私を待ち構えている。そんな時には、特性の釘バットが活躍するのである。

変態のスタンドは確かに貧弱で戦闘向きでは無さそうだが、成人男子ほどの体格はある。だから、殴られたり蹴られたりしたら女の私は吹っ飛んでしまう。稼働範囲が短ければ私は高確率で勝てる。また、ガード系の能力じゃなきや勝てる。

ハナコが釘バットを選んだ理由は、風船を割りやすいからだ。

ハナコのスタンド、血塗れの子以外の黒は、風船のような弾力を兼ね備えているので、触れるだけじゃ割れない。逆にツンツンしていたりすると、効果は抜群。

自らのスタンドを稼働域ギリギリの10メートルまで伸ばす。変態はハナコが正面から突っ込んでくるわけじゃ無いと悟り、距離を詰め始めた。やはり、変態のスタンドは稼働範囲が狭いうえ、戦闘向きでは無いのだろう。

変態はスタンドを傘のように扱ひ、なんとかハナコの赤ん坊の汁を防ごうとしている様子だ。

「ああ、君と遊んでる余裕なんて無かったね……！」

「女だからって油断したそっちが迂闊なんだよ！」

死体処理を始めてから大量に増えた、黒い赤ん坊のスタンドが舞台の上を黒雲のように覆い隠した。

お互いの距離はすでに1メートル先程までに迫っている。ハナコは急いで釘バットを全力で投げた。投げるのには自信があるハナコなので、すぐに変態の方を向き、ゴルフクラブでの攻撃を避けようと打算する。

しかし、奴は肉弾戦に慣れていた。

素人のハナコの動きなどお見通しかのように、スタンドでハナコの脇腹を蹴り、バランスを崩したところにゴルフクラブを横殴りに側頭部を狙って振りかぶった。が、ハナコもやられているだけの女では無い。ゴルフクラブを左手でしっかりと頭をガードした。

「ぐえ」

それでも腕に鈍痛が走る。カエルが潰れたような声が口から漏れて、脳が揺れる感覚がした。

しかし、止まるわけには行かないのだ。相手を恐れて恐怖に落ちた時こそ、相手に突っ込んで不意をつけ。

「いだああああい!!」

「ギャツ!」

口から本音が漏れたが、そんな事気にしてられない。ハナコが引くかと思っていた変態は、突っ込んできた事に対応が遅れ、押し倒された。また、股間を思いつきり踏まれて涙が滲んでいた。

しかし、奴も諦められない。ハナコの髪を引っ張り上げてグーパンを顔にお見舞いし、首に手をかけようとした。

ハナコもハナコで負けてられない。首に手を掛けられそうになったところで人差し指を反対の右目に突き入れた。

「あああああ!」

余程痛かったようで、叫び声が上がると。

好機だと言わんばかりにハナコは距離をとり舞台の上を逃げた。先程投げた釘バツ

ドは落ちた衝撃で真つ二つになっていた。

すでに黒い赤ん坊が地面から10メートルのところまで、釘バットで割られ、赤ん坊汁の雨が降り注いでいたので、あの時から1分も有れば、変態は致死量に達して死ぬことが確定していたのだった。

先ほどの攻防を私が凌げばハナコの勝ち、変態がハナコを殴り殺せば変態の勝ち。

ハナコに逃げられたところですでに金髪の変態シャナの運命は決まっていたのだ。

「ああ、負けちゃったよ……ハナコちゃん結構好みだったのにね。」

己の死を確信した変態男シャナは、最後の最後までブレずに言葉を続けた。

「僕が勝つてたら、君に酷いことなんてしないのにね。ただちよつと悪戯してから気持ちいいまま殺してあげるつもりだったのに、○*○を★☆☆☆して僕の●◆●●で○○○しなかったのに残念♡」

※シャナの言葉は下品すぎて、チンコウンコパイパイ言ってる私の小説でもそのまま書くことは出来ませんので一部効果音を加えさせていただきます。

ハナコも傷ついた体を引きずりながら変態に近づいていった。どことなくハナコは思い詰めた顔をしている。

彼の側まで行き、お互いよくやった、頑張ったなどと、称賛の言葉を与え………

………るわけもなく。

「うううう、クソつたれがよお！いてえんだよこのウンコ！」

ハナコは動かなくなつて、さらに体から小さくなりつつある変態の頭をガンガン蹴っていた。わざわざ痛む体を引きずつて至近距離まで来てやる事が小学生レベルである。

「バーカバーカウンコチンコ、死ね死ね変態!!」

さて、1人暴言を吐き続けるハナコであるが、ホール全体は異様な空気に包まれていた。

まあ、規格外の金持ちが集まるこのギャンブルで金がどうこう言うケチはいないが、究極の咬ませ犬であつたはずの女が優勝者として舞台上に残つていることに啞然としていた。

また、この事を予想していたかのように、周りを嘲笑つている美しい男に対して、イライラを募らせていた。

「い、イカサマだ！」

「そうだ、こいつが送り込んだのは凄腕の女刺客だつたんだ！」

「ズルじゃ無いか！」

などと、他の観客達はハナコを参加させたD I Oに対し、文句を言っている。文句を言つてはいるのだが、D I Oが規格外の美形なので小声でしか言えてないところが面白いところだ。

「D I O様消しますか？」

と、ヴァニラ・アイスが尋ねるが、

「いや、勝手にさせてやれ。私は今気分がいいのだ。」

「御意。」

「ハナコさんが勝ったからよかつたものの、これ負けてたら観客皆殺しでしたよ。」

テレンスは呆れたように呟いた。D I Oは大金が手に入り嬉しいようだ。

「死ねエー！このビチグソがあゝ！！あつはつはつはつは！」

もうすぐ黒い赤ん坊になる絶命した変態男を、満足気に罵倒するハナコの笑顔は輝いていた。

賞金を受け取ったD I O様とハナコ

「よくやったぞハナコ」

「きやく〜！D I O様〜！」

なんて嬉しい言葉なんだろう。

ハナコはD I Oに、デスマッチでの優勝を熱い抱擁という形で褒められていた。ハナコはD I Oに対して異性としての感情は無いけれど素直に、信頼されて、そして実力で勝ち取った優勝がハナコを有頂天にさせていた。

「ああ、D I O様私やりましたよ！D I O様の期待に応えることが出来ました！」

「ああ、よくやった、お前は最高の女だハナコ。」

「きゃー！きゃー！きゃー！」

こういう時に悪ノリするのがD I Oの悪い癖である、と執事テレンスは思う。今のD I Oは内心、何も気付いていないハナコを褒めちぎってバカにしているのだ。

ヴァニラはD I Oの企みを知っているはずなのに、「なんて部下思いな……！グズン、グズン。」と涙ぐんでいた。アホである。

「クククク、お前がタフで助かった。本当に感謝しているんだ。」

「いえいえいえ、これも全てD I O様の投資が私を勇気付けてくれたおかげでございますー！」

「少しノリで女から貰った金を突っ込んでしまったから、あのヒグマがスタンド使いだと知ったとき内心びくびくしたぞ。」

「それでも私は勝利を勝ち取りました！」

「そうだお前はいい女だ！」

「やあつたあ！私、D I O様が女から貰った金を20倍にしました！」

「そうだ！お前は俺が女から貰った金を20したんだ！すごいじゃ無いかア〜！」

あ、D I O様調子に乗ってネタバレしたな。そして、ハナコはハイになって全然気づ

いていない。

テレンスはため息をつきながら冷静に傍観していた。ヴァニラは「ううう、D I O 様なんと美しい無性の愛……！」と号泣している。アホである。

D I O 様抱っこして！とガキのように強請るハナコを、D I O は脇の下を持ち上げくるくと回転した。

「あつはははは、私はD I O 様が女から……エ、女から？」

ハナコが気付いた。

「アレ、ア、でも、D I O 様が女性からお金を貰うのはいつもの事……」

「失礼な奴め。」

「いつ貰ったんですか？エ、50億全部ですか？」

「いや、10億は……いや、アレも全部女が俺に貢いできたどうでもいい金だ。」

「……………アレ、D I O 様ってどっかの会社経営してましたよね？そのお金が主な財産で……エ、エ、関係ないお金って何ですか？屋敷の経費を削って……アレ、えつと、D I O 様のポケットマネーですよ？」

「ウン？……………まあ10億の方は今まで私が女を抱いた時の賃金だし、40億も私がギャンブルをすることを知った何処ぞの女が急に寄越して来た金だから……………ウン、私のポケットマネーだな。」

「そつ……そおですよねえ〜！」

ハナコは混乱していた。

お金を私にかけてくれた事は嬉しい。けれど、普段から暇してるこの人だし、なくなつても痛くも無い金を私にかけて小遣い稼ぎしようとしたんじやあないか、と考えてしまった。素直に喜ばなくなつて来た。

なにより、初めて人に熱く信頼されたという自信がおられそうで怖くなった。

「必死になるお前は中々に見ものだった。」

「あはははは………」

お金と言う目に見える大切なモノは賭けたが、その金も思い入れのないものである。

「さて、ホテルに戻るか。今日はこの金で飲みたい気分だ。」

「車を手配いたしますね。」

「うう〜、私は感激です、D I O様あ〜！」

ハナコは現実を見据えて悲しくなった。

この二ヶ月仕事に慣れて、何か忘れていたが、そもそもD I Oはクソ野郎のカスなのだった。

それがスタンダード、ハナコにだけ特別辛辣と言うことはない。

それをハナコが忘れていただけのこと。

忘れて距離感を誤った、片思いのような事をしたハナコが悪いのだ。自分の失態を、相手に八つ当たりするのは良くない。大体、全部分かってただろう、ハナコの職場は吸血鬼を相手にする特殊な職場だ。

人の価値観なんて、私より無いんだから。

お金は賭けた。私の実力を信じてはいた。嘘なんかじゃない。

それでもハナコには、純粋な信頼を信じていた時の嬉しさと今のギャップに、心の何かが辛くなつて来た。

「私が馬鹿なだけでした……」

「当たり前だろう。」

「ははは、そもそもD I O様私の事ただの都合のいい女くらいにしか思ってませんしね。」

「当たり前だろう。」

「いや、褒めてくれただけいい方ですよ。」

「めんどくさい女だな。」

ハナコは大人になろうと思った。

自分はどうなんでも一人でできる大人だと思っていたけれど、本当に信頼した人に裏切られたらした経験は無かったし、ちよつと辛かった。でもそれが、自分を大人にして

くれる、誰もが通る道だと思って我慢する事にした。

「ん〜？なんだ小娘、まさか悲しいのか？オイオイ、それは理不尽つてもんだらう？俺はお前の才能を見込んでしつかり投資したのに、金の出所にケチつけて、俺の信頼を疑うのかア？」

ハナコが明らかにショックを受けているところを見ると、なんだか愉快的気分になって来た。自分の方が上だと思いき知らせる瞬間が好きなのはD I Oの昔からの悪い癖だった。

テレンスはD I Oが調子に乗っているところを見て、ああまた馬鹿やってるな、と再度思っていた。なんやかんや言って、弱いものいじめが好きなのはD I Oの性質をテレンスはよく分かっていた。

ヴァニアは感動で泣いている、全然現状を理解していない。アホだから。

「……………」

「泣くのか？この厚かましい女め。泣けばいいと思ってる女はタチが悪い。お前もそういう部類の女か？俺の信頼をさらに裏切るのか？」

「……………すみません」

「うるさい黙れ、謝れば済むと思うなよこのガキが。」

D I Oはそう言ってハナコの頭を鷲掴んで投げ飛ばした。

ハナコは深く息を吐いた。起き上がって歩き出したD I Oに無言で付いていく。何も出来ないからだ。

私は帰る場所の無い、ただのガキだと言うことを思い知らされて、必死に涙を堪えていた。

そして、ハナコは1人「お前はトランクに乗れ」と言われたのでボロボロのドレス姿でトランクに蹲っていた。

トランクに入ったのを確認してD I Oはテレンス、ヴァニラを連れて別の車に乗り込み発進させた。

普通にいじめっ子である。

ハナコは20分後に発信しない車を不審に思いトランクから這い出ようとしたが、鍵がかけられていて出れなかった。ハナコはトランクの中で泣いていた。

D I Oは終始調子に乗っていたのだが、ハナコの心に深い傷跡を残したのだった。

「……………殺してやる殺してやる殺してやる殺してやる殺してやる殺してやる殺してやる」

この時のハナコは、本気でD I Oを殺してやろうと考えていたのであった。少し経つてみると静かに怒りが湧き上がってくるというのは人間よくある事である。

ハナコの逆襲します。

T
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d

第8話 ハナコの逆襲

D I Oは夢を見ていた。

その夢にはハナコが出てきた。

夢の中で、許さないといいながら、包丁をD I Oにふりかざし、喚いて走り回っている。あまりにも恐ろしい形相で走ってくるので、たまらずD I Oは走って逃げた。

夢の中でよくあることだが、なぜか特殊な設定を日常のように感じたり、なぜか有り得ない人物が夢に出て来てもそれが普通のように感じるのが夢なのだ。

夢の中にいるD I Oにスタンドという概念は無い。何故か考えもつかない。なので、ハナコはとも楽しそうに好き勝手やっていた。

包丁を振り回し、D I Oを捕まえ、筋肉の隙間に振り下ろす、四脚をもぐ、去勢するなど。あまりにグロテスクで恐ろしいし、なにより痛みがあるため、寝起きは汗をぐっしよりとかいていた。

怪奇現象ともいえる連日の悪夢に心身共に参ってしまった。そしてこの朝、やつと犯人のめどかついたのだった。

「うう、このD I Oが恐怖を感じているだと……このD I Oが……クソ、ハナコめ、あの女の

差し金に違いない……許せん……」

この男、悪夢を見るのは初めてでは無かった。

ここ一週間ほど続けて悪夢を見ており、その種類は様々であったが、最後は死んで夢から覚めるといふ悲惨すぎる夢であった。なぜこんなにも続けて悪夢を見るのか……？

DIOはこの一週間、アロマを炊いたり、ストレッチしてから寝るなど、あらゆる努力をして安眠に持ち込もうとしたが、無理だった。そして、最後にはなにかの暗示かと思つて夢の内容をしつかりと振り返つてみた。

その結果、わかつた。この夢の原因はハナコであると。1日目の夢など水を運んできただけのチョイ役であったが、確実にどの夢にもハナコが登場していた。ハナコにしてやられたのだ。

確かに、ハナコの能力には強い幻覚作用があり、テレンスから聞いた話だと、矢に射抜かれる前に既にハナコはスタンド能力者であったそうだ。

ならば、その拍子に何か変化があつても不思議では無い。新たな能力が本人も知らぬ間に兼ね備わっているなど。

それに気づいたDIOはすぐにテレンスに拷問器具を用意させて、ハナコを拷問にかけてやる準備をした。

「W r r y y ……よくもやつてくれたなハナコオ………貴様は許せん、骨の髄まで責め尽く

して鬪り殺してくれる…」

DI Oの殺意は止まることは無かった。考えれば考えるほど憎く感じて仕方ない。悔しくて悔しくてたまらなかった。

この男、自分がやられたままグツと我慢するということを絶対にしない男である。やり返さないと済まないという性格なのだ。

また、悔しく思うと同時に、ハナコを拷問するのを楽しみにする気持ちも芽生え始めた。あの女は、窮地に追い込めば追い込むほど本性を表していくタイプの女である。普段は牙を隠して生きているが、追い込まれると化けの皮が剥がれて牙を剥き出しにして、殺意を放つ。

そして、それは追い込まれた末の殺意であり、絶対的な絶望下で悔しがる顔である。それができる女はなかなかいないものだ。

「ククククク………カカカ……」

そんなレアな女を拷問するのだ。DI Oの心情に悔しさよりも興奮が勝った。

今まで拷問などした事のないDI Oであったが、いつかはしてみたいとは思っていた。己にはサディズムの傾向があると自覚している。

男でもいいが、その時はとびきりの美青年を。女なら、どんなに美しくても、簡単に泣き叫び命乞いをするただの女じゃ駄目だ。気が強くて、心の芯を折ったらどうなるの

か、心の内の信じるものを失った時どんな顔をするのか。精神の向こう側を見たいと感じる女でなければ意味が無いのだ。

少し優しくされるとすぐ相手を信用する、騙されやすく、折れやすく、内に秘める思想は危うい。また、若く、未来溢れる少女だというのに、その目はどろどろと濁っていた。

なんで生きてるのかよくわからない女だが、ハナコは絶対に死にたいとは思わない。

俺は、奴のそう言うところを気に入っている。

だから、痛めつけてやりたいと思うのだった。

「いいぞ、いいぞハナコ……私はお前の様々な顔が見てみたい。お前を責め抜いて、もうやめて下さいD I O様、私が悪かったです、と言うまで許さないぞ。クククク………」

事の真相のお話

「そんなことだろうと思ってた。……クハハハハ、イヒヒヒヒククククク」

ハナコは勝ち誇った笑みを浮かべる。

眠りこけているD I Oのすぐ隣でハナコは添い寝している。隣でハナコが大爆笑しているが、D I Oはうんともすんとも動かない。

おいしい、M s. ハナコ、さつきD I O様がハナコの事拷問してやるって意気込んで

無かったっけ？

いやいや、Reader、上の文章、全部DIO様の夢ですよ。

そう、DIOは一週間悪魔を見続け、その末に犯人をハナコだと断定し、拷問にかけようとする、という夢を今現在見ている。ちなみに、ここまで濃度の濃い夢を見ているが、DIOが寝始めてから現実の時間、10分ほどしか経っていないのだった。

夢の中のDIOの予想は見事に的中しており、ハナコは死に至らない新たな幻覚作用を、元の能力の延長として手に入れていたのだ。催眠術のようなこの作用はスタンドのへその緒部分を耳に突っ込む事で完全な支配状態となる。なので、ハナコはDIOの部屋に赤ん坊の出汗を混ぜた香を充満させておくことで半催眠状態にし、夢を操るという所業を成し遂げたのであった。

手の込んだ真似をしなくても相手に自分の姿を認識出来ないようにするくらいは出来るが、DIOに事後、違和感を抱かれてない様にする為には、寝ているDIOを襲撃するのが安定策だったのだ。

さて、このままDIO様に、夢の中であっても、私を拷問させるなんてことはさせない。

次は梅毒末期の男性患者に犯される夢でも見てもらおう。お前も梅毒に侵され美貌が崩壊していく様を絶望しながら悔やむといい。

そしてその間に私はD I O様のケツにバイブでも突っ込んで恥ずかしい証拠写真を撮ってやる。

ハナコはトランクに3日置き去りにされた事を非常に恨んでいた。肋骨にヒビが入っていたり、腕を痛めていたりだと怪我をしたまま放って置かれた。その上、3日目最終日には災難なことに月に一度来る女の子の例のモノにぶち当たっていた。トランクの中は血生臭いわ、股ぐらから血が流れ出している不快感を味わった。また、迎えに来てもらったテレンスさんと気まずい雰囲気になり、迷惑をかけるわ、D I Oにはバカにされるわで惨めだった。脱水症状も出ていたし、ロズウェル事件の宇宙人のように、引きずられて悔しいったらありやしなかった。

「ふふふふ、はははははは、くくかかかか……」

ハナコは待ちわびた復讐のひと時を、悪魔のような笑顔で迎えたのだった。

※その後の所業はD I O様のコンプライアンスに関わるので、ハナコの胸にだけ留めておくことにします。ですが、ハナコは相当酷いことをやっています。※

ハナコは全ての事を済まして朝にはD I Oが全てを忘れてるように能力を設定した。この女は、復讐した相手の悔しがる顔を見たいやら、見下してやりたいやら、リスクを負うことはしない。次の日には全てを忘れ、ケツに謎の不快感を覚えるD I Oの姿をクスクス眺めているだけで満足なのだ。

「D I O様の恥ずかしい証拠写真大切にしますね♡」

夜まで悪夢を見続けるがいい、そう嘲笑ってD I Oの肛門に入れたバイブを引き抜き、当て付けでD I Oの口内にそのバイブを突っ込んだ。

「自分のウンコの味は美味しいですかー???」と、愉快的気持ちになりながら、部屋を後にした。ゆっくりと扉を閉める。

「…………おや、ハナコさんD I O様の部屋で何しているのですか?」

「ワツ！脅かさしないで下さいよ、テレンスさんか…………いえ、少し仲直りしただけです。」
話しかけて来たのはテレンスだった。ハナコはヴァニラじゃなくて良かった、と安心した。

「ふうん、全然そんな風には見えませんが…………それに、驚くと言うことは何かやましいことでも…………?」

「はははははは」

質問に、ハナコは引きつった笑いを向けるしか無かった。

テレンスは疑うような顔をしたが、危害を加えてないならセーフかな、と呟き、歩き出した。そしてすれ違いざまに、

「……………まあ、バレない程度の復讐なら許しますよ。あれはD I O様も調子に乗りすぎました。」

とハナコの肩を持つてくれたのだ。

「えへへ……ありがとう、ございます。」

「いえ、その代わり私は責任を負いませんからね。あと、ヴァニラにはバレないようにした方がいいですよ。」

「了解です。」

「では、私はこれで。」

ハナコは心底テレランスが融通の効く男でよかった、と思ったのだった。

日が沈んだ後、D I Oは起きてきて、案の定、夢の中の記憶を失っているのだった。そして、「なんだかケツに違和感がある。」とぶつくさ呟きながら一日中不機嫌だった。

ハナコはそんな姿を見て、あんなことをされたのにもかかわらず、「ああ、可愛い人だな」と思ってしまった。その気持ちは、母性本能というか奇妙な感情なのであった。

D I Oも大概だが、この女も言ってしまうえば、サディストなのであった。

D I Oに優しく話しかけて慰めてあげようと思った。なんとも白々しいが。

「D I O様大丈夫ですか？」

「……………ハナコか。いや、なんでも無いさ。」

「あら、そうですか？何かあったら出来る限りお力になるので、なんでも仰ってくださいね。」

「……………おい、お前私を恨んではないのか?」

「ホホホ、まさかそんなはずありませんわ。私あの後よく考えたんですよ。私はD I O様に生きながらえさせてもらっている人間なのだから、何もされても感謝すべきだと思います。だから、貴方様を恨めるはずありませんの。」

ハナコは花の咲き誇るような笑顔でそう言った。この言葉を聞いたD I Oは何か考えるような素振りを見せた。フン、と鼻で笑って

「ならば、永く、丈夫で良い女で居よ。お前は気の利く、器用な女なのだからな。」

と、意外にも気の利いた言葉を言ったのだった。ハナコは数秒面食らったが、すぐに当たり前ですよ、と言うふうに戻事をしたのでD I Oはハナコの本当の心の内に気づかなかった。

退室した後ハナコは一人廊下で、「クククク、掌返しもいいところだ虫のいい男よ。馬鹿め。」と、独り言を呟いた。

不気味に女は廊下を歩いて行った。

ハナコと母親についての話

「オギヤーオギヤー!」

「カナエさん、貴方D I O様に許可を貰って帰るか、本当に逃げた方がいいですよ。」

「…………ハナコさん、前も言いましたけど私には帰る場所がありません。日本に帰れたとしても私はこの子を養っていきませんわ。」

ハナコは子供を産んだばかりのカナエをほったらかしておくD I Oに不満を感じていた。この子は間違いなくD I Oの子供だ。しかし、当人はカナエの事などどうでも良いという風で、全く興味がなさげだった。そればかりか、今も他の女と情をかわしている。

前からこの館に妊婦が数人いるということは知っていた。

少し前から私は、テレンスさんから「女性が配膳した方が安心するだろう」と館で生かされている女性にご飯を配膳する仕事を任せられた。

そのうちの1人がこのカナエであり、彼女は日本人である。そして、女性達の中でも珍しい、子供を出産したタイプだ。他にも汐華という、2歳になる子供を連れている方がいるが彼女は子どもなんてどうでもいいわ、という、良く言えば放任主義だ。一方のカナエさんは子供を愛しみ、大切にしている。

正直、汐華みたいな女、ハナコはどうでもいいと思っていたが、カナエのような女は長生きしてほしいと思ってしまう。このD I Oの館に来た時点で希望は薄いけれどね。

「カナエさん、D I O様が貴方の事生かしておく保証はどこにも無いんですよ。」

「いいえ、ハナコさん。子供だけなら生かしておいてくれるわ。」

ハナコは、「何言ってるんだこいつ、お花畑か。」と呆れた。なんで私がここまで脅して逃げ出さないのかしら？DIO様、女1人くらいなら見逃すのに。カナエさんって、真実の愛とか信じているのかしら？ちよつと救えないわ。

と、思った。

また、もしかすると意地でも帰りたく無い理由があるのかもしれないとも思った。

「カナエさん、帰れないわけじゃ無いなら、その子を連れてお帰りなさい。私は妊婦がDIO様によつて殺されるところを幾度もこの数期間で見えて来ました。生まれてきた子どもが殺される場合もありました。」

「……………分かっていきます。でも、正直に申しますと帰れないんです。」

「殺人罪やら警察に追われてるわけじゃなきや帰れると思いますけど……………」

「そうですね。」

「だから帰りましょうよ。」

「はい。ですから殺人罪で警察に追われているのでごさいますよ、私。」

「さいですか……………」

ああ、この人私とおんなじ境遇でここに来たのね、と少し共感するところを見つけてしまった。可哀想だけど確かに刑務所に入って子どもと離れ離れになるより、この館に置いてもらった方がいいかもしれない。死ななければだけど。

ハナコのカナエに対する高感度は更に上がった。

「アツ、ハルノ坊ちゃんそれは落としたらDIO様に怒られます。」

「ねーね」

「姉やはこのことです。お母様のところに戻りましょうね。」

汐華は息子の面倒をとことん見ない女だった。ハルノ坊ちゃんはほとんど私が面倒を見ているし、明日この屋敷を出ていくそうだが、この子はネグレクトを受けるだろう。

この館のカオスな状況にため息が出る。

「カナエさん、何かあったら私にお申し付けくださいね。」

「何か起こらないようにこの子をしっかりと抱きしめておきますね。」

「それがいいですわ。……さ、ハルノ坊ちゃん行きますよ。」

「ばいらしい、おとおと」

「失礼しました。」

まあ、これからどうなるかは彼女の運次第で、私がどうこうするのはメイドには出過ぎた真似だな…

ハナコが一人で考え事していると、ハルノがハナコの袖を引いた。

「ねーね、ママが、さんじまで、あつちいつてろつた。」

「あら、あと2時間もありませんね。でも姉やはこれからお仕事があるんですの……」

「やだー！」

「ハルノ坊ちゃんいい子ですよね？」

「ねーねと一緒らしいの！」

「…………お洗濯手伝つてくれますか？」

「うー！」

ハルノ坊ちゃんを2時間も放置させようとしていたなんてあのクソ女め。

ハナコは母親にも当たり外れがあるものだと思った。そして、自らかハズレ母親の元で育つたため、ハルノの未来もさらに心配になって来たのだった。

「ねーね！あとでおやつ！」

「クツキーの生地がありますから、洗濯機を回してる間に型を一緒に抜きましようね。」

「あいー！」

この子の花のような笑顔はいつまで続いてくれるのだろうか。ハナコはハルノが歩むであろう普通で無い人生を見据えて複雑な気持ちになるのだった。

翌日、カナエがDIO殺された。

残った子供の始末はハナコに任せられた。その騒動があったせいで、ハナコはハルノに別れの挨拶が出来なかった。門を出るところが窓からチラリと見えた。ハルノに持たせた、2人で焼いた不格好なクツキーを「なにこれ」と取り上げて踏みつけ、泣き叫ぶ

ハルノを引きずって出て行く母親の姿が見えた。

カナエの子を抱いてハルノに持たせたクツキーを拾い、自分の部屋で食べた。我ながら美味しく出来たと、満足していたクツキーだ。ハルノが泣きながら自分の名前を呼んでいた様を思い出して、腕の中で泣くカナエの子の泣き声も自分呼んでいるように聞こえた。

「……………大丈夫、大丈夫よ、姉やが守ってあげるわ。お母さんはいなくても、私がいるわ。絶対に傷つけない…守ってあげる。」

そう言いながら、ハナコはそつと赤ん坊を自分のベッドに持つていき、ベビーベッドをどこに置くか考え始めたのだった。

第9話 アヴドウルの店に行く

お名前が欲しい話

「ほほう、それで息子さんにお名前が欲しいと。」

「いや、息子では無いのですが、私が育てることになりました……その、私子供の名前とか疎くて……日本では子供の名前をお寺さんに考えてもらおう事とかあると聞いたので……すみません……」

ハナコはエジプトのよく当たると噂の占い師の元を訪ねていた。

テレンスさんに「で、その子のお名前は？」と聞かれるまで全然気づかなかったが、この子には名前が無かった。カナエはふわふわした女だった。私も名前について質問したことがあったが、「まだ迷ってるの」と返されていた。それもしょうがないかもしれない。カナエも初めての子供だったし、彼女はすごく元気だったが何気に3日しか、息子と過ごしていなかったのだった。

じゃあ、ハナコがつけるか………と言われると、この女はそんな重大な事私決められないわ。と変な所で事を重大に捉える女であった。

「………ちなみにそのお子さん、両親はエジプト人？」

「……………うーん、多分イギリス人と、日本人ですわ。」

「ならば、どちらよりの名前をつけたいのですか?」

「そうですね……………イギリス寄り…うーん、日本のでもいいですけど、ほら、金髪じゃないですかこの子。」

「確かに。」

「なら、小太郎とか虎徹とか日本らしい名前より、外国っぽい名前の方が良いかな、と。父親の方は一応生きてますから…」

「……………そうですね…失礼ですが、貴女は乳母…?」

「はい。私しか面倒を見る人が居なくて……………この子の母親は死にました。」

占い師は赤ん坊を見て複雑な顔をした。

占い師は少し考えた後に数秒ハナコと目を合わせた。ハナコの意味やら何やらを静かに読み取ろうとしているようだった。そして、ゆっくり顔を上げ、考えを述べた。

「うーむ、私の考えなんですがね、そもそも占い師が名前を授けるといふ文化は無くてもですね。」

「……………確かに。」

「貴女とお子さんの事情に踏み入ったことは聞けません。それに、私はただの占い師ですから、やはり占いが十八番でしてね。出しゃばったことは言えませんが、これだけは

貴女に伝えてあげたい。その子の隣にいてあげられるのが、貴女しかないならば、貴方が考えてあげて下さい。」

占い師は優しくそうに微笑んだ。見た目は背の高い威圧感のある男性なのだが、ハナコと赤ん坊に対して親身になってくれていることはよくわかる。

「……………私が？」

ハナコは少し戸惑った。名前をつける事を重大な事だとは思っていたが、内心、誰かに決めてもらえればそれでいいかもしれないと思っていたのだ。

「その子の事を大切に思っただけでいるならば、ずっと一緒にいてあげたいと思うのなら、貴女がつけてあげなさい。」

占い師はしっかりとハナコを見ていた。

それは、よく澄んだ真つ直ぐな意思が受け取れる、美しい目だった。ハナコはそんな目を向けないで欲しいと思った。

自分の目は濁っていると感じていたからだ。人間、嫌いな事をされる事を願うなんて無い。極力避けていきたいと思う人間が殆どだろう。

ハナコは、子供を育てるといふのはそういうことなのだろう。とも思った。

嫌な事だつてきつとこれからたくさんあるし、自分の生まれの悪さに嫌気が差す事だつてあるだろう。でも、それを通つていかないと乗り越えられない事もある。子育て

なんて、そんなことの連発だろう。自分から嫌な事も、子供のためにしなきゃ行けない。我慢する事だつて増える。私はやつと実家から解放されて奉公先を得たばかりなのに、すぐにあの子の面倒を見る母親の変わりになることになってしまったのだ。

この占い師の人はきつと優しい。

「……………私、外国の名前の付け方は知りません。かと言って、日本の名前の付け方に詳しい訳じゃありません、漢字の画数によつてなんとらつていうのは分かりません……」

「はい。それでも貴女も同じように、名前は子供が初めてもらう贈り物なのですから。」
「……………私、ハナコつて名前なんですけど、この名前……………私の両親がめんどくさがつて付けた名前なんです。父が言っていました。」

「…それは、失礼しました。……………女性に年齢を聞くのは失礼なのですがね。お若いレディー、お幾つですか？」

「17です。両親はいません。親族は全て死んでいます。」

「……………そうですか……………なら、尚更貴女が付けるべきです。その子は貴方が授けた名前を一生誇つていけるように、心を込めて付けてあげなさい。」

ハナコは腕の中で眠る子を見た。

父親に似た彫りの深い顔、金髪……………きつとこの子はD I O様に似る。青い瞳が綺麗

な子。

私の目は濁ってしまっている。

この子にはD I O様の様にはなつて欲しくない……あんなに性格悪く育つたら泣いてしまう。でも、私の様な半曲がり方も駄目。この子は私の心の残り少ない良心。この子の目は濁らないで欲しい。

考えれば考えるほど、この子に対する想いは溢れていった。

「……………この子には、幸せでいて欲しいです。」

「そうですか。」

「この子には、愛情をたっぷり受けて育つてほしいです。」

「そうですか。」

「……………私の持つているもの全てを与えて、真つ直ぐに生きてほしいのです。」

「貴方のその子を思う気持ちを、名前の意味に込めて上げては如何ですか？」

「……………そうします。」

ハナコの言葉に悩みは無かった。本人は未熟ながら、この子を愛してあげられるのは私しかいないのだ、という自覚がハナコの意味を固くしたのだった。

「悩みは解決出来ましたか？」

「大丈夫そうですわ。」

「なら良かった。」

「なんだかもう、数通りは考えられますわ。子育ては大変だろうけど、私この子の為だったら何でも出来る気がして来ました。」

「それはそれは、貴女は立派な母親になりますな。」

「ほほほ、ありがとうございます。」

「本業の占いは全くやってませんがね。」

占いの師の男は自分の事のように嬉しそうにな笑っていた。やっぱりこの人はいい人だ。目に嘘が無い。私もこういう人と結婚したいわ、とハナコは思った。

「では、ありがとうございます。お代は……」

「こちらになります。」

「ありがとうございます。……えっと、お兄さん。」

「アヴドウルですよ。お嬢さん。」

「ホホホ、いやですわお嬢さんだなんて……また来させて頂きますね、アヴドウルさん。」

ハナコは清々しい気持ちで店を出た。アヴドウルはいい男だった。ハナコは久しぶりに善意の化身のような男に会った気がしたのと同時に、腕の中の子がいつとう愛しく思えた。

「うふふ、帰りましようね。姉やときみはずっと一緒よ。姉やはもっと強くなるわ

……さあ、今日もD I O様の食べカスをお掃除しましょう……ふふ……あら、嬉しいの？可愛い子ね。」

夜道をゆつくりと歩く姿は、微笑ましくもあるがどこか不気味でもあった。

そうして今日もハナコは今日も仕事に励むのだった。放っておく訳にはいかないから、おんぶ紐でおぶって仕事をする。

ここで、ハナコの仕事を振り返ってみよう。この女、死体処理がメインで与えられた仕事である。今この女は死体を黒い赤ん坊に変えるのを、愛しい我が子を抱きながら行っているのだ。

「うふふふ、人は脆いわ。だから大切にしてくね。ア、そいえば貴方の名前、姉や凄く考えたの。」

「きやきや」

「嬉しい？姉や朝から100も書き出したのよ。それでね……私、決めたの、貴方にぴったり。」

「きやつきやつきやつ」

ハナコがいくら純粋な思いを与えていても、そもそもハナコ持つ純粋そのものがねじ曲がっているのである。

ハナコはおんぶ紐を解き赤ん坊を胸に抱き直した。

夜風が冷たかったので、しっかりと守るように抱いた。

「愛。貴方の名前はアイよ。シンプリイズザベストって言うでしょ、貴方には私の愛をあげるわ。貴方は愛されて育ってほしいから、その意味を込めたわ。姉やは貴方が大好きよ。アイのためならなんでも出来るし、誰にも負けない。だから、私を強くして頂戴………愛してるわ。」

赤ん坊を桜吹雪の下で抱く、というのは美しい、微笑ましい情景だ。けれども、今は黒い赤子の赤ん坊風船に囲まれる赤子と少女という非常に不気味な絵であった。

その後、アイは直ぐに日に当たると火傷の様な赤つぼいアザが出来る様になり、太陽の元に出られなくなった。

まだ食べ物ミルクで間に合っているが今後輸血。パックになる事も考えなきやいけない、とハナコは思った。

そういえば、生後3日の時点で直ぐに首が据わるのもおかしな話である。歯だつてすでに生え揃っている。

館中の皆が思った。この子は父親の血を色濃く引き継いでいる、と。ハルノは黒髪で吸血鬼的な要素は全く無かったが、アイには父親の面影しか無かったのだった。

「ねえ、アイ坊ちゃん、お父様が貴方に会いたって言っていたのよ。でも私、お断りしたわ。だつてお父様に貴方を合わせたら貴方のこと殺してしまふそうだったんだもの

……子供の事、一番に考えられるのが良い母親よね。」

「ねえ、あ、きやつきやう」

父親があんなもののせいか、ハナコは更にアイに対して過保護になっていくのだった。季節はもうすぐ11月である。

ポルナレフに会う話

「あら、見慣れないお顔の方ですね。どうしました？お腹が空いたなら、今使用人の手が空いてませんから、外食をお願いします。」

「いや、そうじゃ無いですよ。何というか、迷ってしまいましたね、あの、便所は……？」

「突き当たりを右に、その次は左に曲がってから階段を降りてまた左ですわ。その方が近いトイレです。」

「メルシイ、お嬢さん。」

「ハナコですわ。日本人です。お兄さんはフランスの方？」

「そうだけ。」

最近、肉の芽を埋められた人や金で雇われた人が多く館に出入りする様になった。

何人が顔見知りになった人もいる。彼女、彼らは総じてD I O様に忠誠を誓ってお

り、盲目に信仰している。そもそも、私の様に彼のカリスマ性に惹かれない悪の方が珍しいらしい。

さて、このフランス人のお兄さん肉の芽を埋められている方の方だ。つまり性格の根っこは善人。そんな人をも虜に出来るなんて、DIO様色々ハイスペックなのね。

肉の芽を埋められるとDIO様に無条件に忠誠を誓うらしくて、彼曰く気に入ったスタンド使いを強制的に下僕にするのにちょうどいいらしい。彼は被害者という事である。

「それにしても驚いたぜ。お嬢さんみてーな女の子もDIO様に仕えているんだな。」
「彼のカリスマ性は絶大ということですよ。」

この男、ハナコにトイレを案内させた上に、年下だと分かるとペラペラ話してくるタイプだ。今は初対面だから紳士ぶっているけれど、回数を重ねるごとに馴れ馴れしくなる男だろう。

「はい、(こ)ですよ。」
「メルシー！」

ハナコは何だか今の数分の会話で疲れたような気がした。余り身近にグイグイくる男性がいけないせいかな、あのような男性のタイプは少し苦手なのだと思った。DIOは何気に、本を読んでいるだけの時が多いから静かである。

人間不思議なことに、苦手だな、避けたいな、と思った人間にこそ、ばったり顔を合
わせてしまうものである。

「よお！昨日のお嬢さん！」

「……………おはようございます…」

「ね〜あ…」

この日はアイを連れてくる時に先日のお男とばったり会ってしまった。この男、肉の芽
を入れられている割にはお調子物である。ハナコは殆ど表情をかえなかつた変えな
かつた。普通の男は真顔の女の前でペラペラ話を展開する事はしないとすが、この男
は凄まじい速度でハナコに話しかけて来たのであつた。

「お兄さん、今日もお元気ですね。」

「お〜、お嬢さんも元気そうで良かったぜ。それに今日は可愛い坊やも連れて、かわいい
でちゅね〜」

「きやつきやつきやつ」

「息子さん？か？」

「いえ、D I O様のご子息ですわ。」

「へえ〜！じゃあ将来は大物になるなあ…」

「健やかに育つてくれれば十分ですわ。」

子供は好きなようだった。この館にいる悪の中には子供が好きな奴と嫌いな奴それぞれいるが、子供が好きな人は根っこに優しいところが残っている気がする。ハナコはうるさいなと思つてこの男でも、アイの事を褒められると嬉しいのだった。

「……………あんた見てると妹を思い出さず。」

「あら、妹さんがいらつしやるのね。」

「いや……………」

「……………失礼しました。」

「いいんだ。お嬢さん、あんたもここにいてるつて事は色々あつたんだろうが、気を付けろよ。」

「ご心配感謝致します。お兄さん、貴方がいい人だわ。」

「ハハ…俺も復讐の為に生きていますよ。あなたもんだからな。」

「そうね、でもお兄さんもう手遅れよ。この館に頼つてきてしまったなら、せめて妹さんに対する未練を断ち切るように努めることね。」

「ひえ……………あんたみたいな鋭いお嬢さんに言われるとびびっちゃまうぜ。……………まあ、ありがとな、あんたも坊やも元気にな。」

「武運を。」

「ああ、またな。」

男は去っていった。久しぶりに人間に会った様な気がした。

ハナコは男が見えなくなっただけ、名前を聞いていなかった事に気づいた。しかし、男の髪型がまるで電柱のような縦長の逆立った髪型だったので、2度目に会う時は必ず分かるだろうと思ひ、仕事に戻ることにした。

この男が、後に敵対するポルナレフだということをハナコは全く知らなかったが、少なからずともポルナレフの優しさにハナコは内心少しだけほっこりしていたのだった。

「ね〜あ」

「姉やです。お父様がチーズを買ってこいって言ってましたから、今から買いに行きましようね。」

目撃者 その①

「なア、ハナコよ。」

「なんですか、D I O様……………アイ坊ちゃんはD I O様に会いたく無いとおっしゃってましたよ。」

「フン、違う用件だ。お前の過去について部下に調べさせた。」

「……………私が殺人鬼だなんて事、分かりきったことじゃあ、ありませんこと？」

D I Oとハナコの間鋭い空気が流れるのは、およそ半年ぶりである。この2人、あ

のギャンブルが原因の喧嘩の仲直りをした後上司と部下という形で良好な関係を築いていた。しかし、今DIOが「過去について調べた」と、態々ハナコが嫌悪しているプライベートのものを話題に挙げたため、ハナコはDIOに憤慨していた。

なぜ、この男、態々私の過去を調べた……？意味がわからないし、凄く嫌だわツ……！！

と、ハナコは怒ると同時に、軽くショックでもあった。過去は封印したいものの一つであり、海外逃亡は自分は母国に帰らない、という覚悟があつての行動である。今更日本での話を取り上げられるのは、恐れでもあるのだ。

「おいおい、勘違いするなよ。お前が日本で本当に警察に追われる身なのかを調べたんだ。ただそれだけだ。」

「……………当たり前です。私は殺人現場を同級生に目撃されているんですもの……」

「そうだよなア……私はお前を疑っている訳じゃあないさ。だがな、お前の立場を調べておくのは必要だ。指名手配でもされているなら、お前がもし日本に戻らないと行けない時動きが限られるだろう？」

「……………戻る気はありませんよ……」

「まあまあア待て、何も無かつたらお前にわざわざ教えはしないだろう。」

「では、何かあったというのですか？」

「そうだととも」

DI Oが何か企んでいる事をハナコは訝しんだ。

こういうDI Oが何か企んでいる時は、素早く逃げなければいけない。とんでもないことに巻き込まれる、とハナコはギャンブルの件で思い知っていた。

しかし、今のハナコにはアイがいるため、逃げるという選択は考えられないので、嗚呼…今度はどんな死線を潜らないといけないのかしら…と心の中で覚悟をしたのだ。た。

「日本で警察をしている部下に調べさせた。そうしたらなあ、お前のクラスメイトが3人行方不明だそうさ。お前を含めると4人か……殺人事件なんて単語は全く出て来ないぞ…お前、本当に殺したのか？」

ハナコは驚いた。

「ど、どうして…私3人殺して死体処理はしっかりしましたから、見つからなくて当たり前です…でも…なんで…4人目を取り逃したんです私……」

「しかしお前は殺人鬼ではなく、行方不明扱いだな。」

それと同時に、もしかしたら自分は無駄にエジプトに逃亡したのかもしれないという考えが頭をよぎった。

「お前が焦ってエジプトに来ただけで、お前のスタンドはその目撃者と言うのを攻撃し

ていたのではないか……？」

「……………ア…致死量に達していなかっただけで、まだ生きてるって事……？」

「……………お前のスタンド、ドグラ・マグラはその時すでに目覚めており、敵を排除するために動いたが、殺すには至らなかった。」

「なら、消さないと……………黒い赤子汁は一滴でも一週間は頭を狂わす事が出来るけど、もしかししたら……………ふ、不安……こうしてバレて無いつて分かると完全犯罪にしたいわッ……」

こうしてハナコは、日本に戻り同級生抹殺に動くことになったのだった。

なぜそんなりD I Oが日本に戻ることを許したかと言うと、それは、アイを人質にとつていればハナコはD I Oの元に帰ってくるのかを知りたかったからだ。

日本での一人暮らしに味をしめて帰って来なかったら、D I Oはハナコの額に埋めた、保険としての肉の芽でハナコを殺すつもりなのである。

ハナコの気がかりはアイの面倒をD I Oを中心として見るといふ事であったが、ヴァニラがD I Oの息子であるアイを溺愛しているので、少し安心している。

愛する子と数日わかれる事に、後ろ髪を引かれる思いだったが、ハナコは偽パスポートを使い飛行機に乗ったのだった。

第10話 ハナコ、承太郎に会う

目撃者 その② 〳ハナコ、承太郎に会う〳

「おいテメー。」

「……………あら、おはようございます。……………もうお隣の席ではありませんの?」

「……………テメー、そんな喋り方だったか?」

「尺に触ります?」

撮り逃した同級生を暗殺しに日本に来たハナコだが、学校に潜入したしよっぱなから承太郎に絡まれていた。

「……………まあそれはいいが……………俺が聞きたいのは昨日まで行方不明になってた奴がどうして何の前触れもなく学校に来るかって事だ。」

「先生方に話を通っている筈なのですが……………ああ、私がいじめられているから、気を使ってくれたのでしょうか…」

「待ちな、話は終わって無いぜ。テメー以外の奴らは何処に行ったんだ?同時に3人だ……………1人は頭がイカレちまって病院送り……………そんなかでテメーだけがピンピンしてやる。」

「ホホホ……私の事を気になさるよりも、取り巻きの方々に目をかけてあげたら如何です？」

「……………はぐらかすんじゃあ無いぜ。」

「女性のプライベートにそんなに踏み込みたいのですか？私がかもし行方不明扱いされている間、レイプでもされていたら、男にそんな事ペラペラ喋りたくはありませんわ。」

ハナコは席を立ち、承太郎の側から離れようとした。

「……………それは悪い事を聞いたな。だが、どう考えてもテメーは不自然だ。」

承太郎は腕を掴んでハナコを引き留めた。

実はこの時、ハナコは心底焦っていた。

ドグラ・マグラの催眠効果は、液を霧状にして校舎を歩き回れば、術中に嵌るのは余裕であった。が、この同級生の男、空条承太郎はハナコの術中には落ちなかつた。

スタンド使いかと思つたけれど、違う。ならば、恐ろしく気が強い男という事なのか……

承太郎はこの学園の王子様であり、消したら一発でアウトだ。この学園の生徒の大半が大騒ぎになる事間違いない。それに、たとえ生徒全てにスタンドを喚けても、私は人の戸籍やら書類やらを操れる訳じゃあ無いから、行方不明になる。これ以上行方不明を増やすのも危ない。メディアに注目されたら動き辛くなる。

「お前の名前は山田 花子、この俺でも覚えている。ハナコ、テメー、行方不明になつてから急に学校に来たなら、今頃クラスの皆の注目の的な筈だぜ。」

「……………ホホホ、私に興味がある方なんていらつしやらないみたいですよ。」

承太郎は全然諦める様子が無かつた。こつちが真顔なのに喋りかけてくるあの、電柱へアーの男も厄介だつたけれど、この男、もつとめんどくさい。

「いや。おかしいぜ、教室のど真中で俺が女と話していて、騒ぐ奴が居ない事も不自然過ぎるな。」

嘘だろ承太郎、お前、将来探偵志望か。私も江戸川乱歩好きだけど、此処までじゃないわ……この男の探偵気取りはすぐ厄介だわ……………

ハナコは承太郎の鋭さにイライラした。

なんだこの男、私は早く取り逃した女の病院に行つちまいたいんだよ。お前が情報を漏らしてくれたのは嬉しいけど、この状況は嬉しく無いわツ!

彼はニューヨークの不動産王を祖父に持つと、噂で聞いたことがある。何処から情報が漏れるか分からない。辿りに辿つて、今回は偽パスポートで日本に来ていいるから、マークされるかも知れない。今度こそ本当に指名手配だ。

駄目だ……この男消せないわ、殺さないってなんて難しい……

「……………承太郎君、見なかつた事にはしてくれないのですね……」

かくなる上は、奥の手を出そう。それは、承太郎にしかハナコが見えてないことを肯定しつつ、誤魔化せる作戦だ。

それに適す設定は……………幽霊。

そう、幽霊に成り切れればいい。ここは承太郎に違和感を持たせないように、幽霊にでも会ったと思って貰おう。私が少しのプライドを捨てることによって、全てが円滑に進むのだ。

ハナコは決心し、自身に念じた。

私は演技派のはず…あのD I O様だつて初対面でちよつとは私の話を聞こうと思つてくれたくらいには演技派な筈。

いつもの根暗な自分を騙すのよハナコ!!

意を決して役者モードに入った。

「どういう事だ?」

「……………私はとつくのとうに死んでるんですの。」

「……………」

「最後に、学校生活で、唯一私と仲良くしてくれたお友達に会いに必死の思いで学校に来たんですよ。」

「……………」

「イチコちゃんに逢いたいわ。」

「……………」

「どこにいるのかしら、彼女だけが心残りなの。」

「何言つてんだテメー、さつきから隣にいるぜ。」

……………沈黙。

「アラツ氣づかなかつたわ！感動の再会だからアツチ行つてよ。」

「何言つてんだテメー……………」

嘘、私つたらバカだわ…何でこんなミス……………

承太郎は呆れた顔でハナコを見ていた。ハナコだつて白目を剥きたい氣持ちだ。

しかし、意外にも、承太郎は「この目で見た物は、素直に信じるしか無い」というような生活らしい。

呆れた顔をしてはいたが、そのままチャイムが鳴つて、皆んなが着席していく様を見て承太郎も一応着席した。そして、ハナコを見ていてみると、女子生徒から「承太郎どこ見てるのお？」と話しかけられた。常人からしたら、あらぬ方向を見ていることになつたためだ。また、席を立てているハナコを教師も全く咎めない事から、承太郎も少しづつハナコの存在を信じ始めていた。

「……………本氣に幽霊か？」

「幽霊ですわ。」

「本当か？」

「くだいですわよ。」

「……………イチコちゃんに会えて良かったな…待て、本当か？」

「本当にくだいですわね。」

ちよろいぞこいつ。

ハナコは心の中で片方の唇を吊り上げた。

そのまま承太郎が少し目を離れた隙に教室を出た。ちなみに承太郎はいなくなつたハナコに対して、イチコに会えたから成仏したのだと見事に騙されており、南無三を唱えた。

先程、病院に居るといふ情報が出て来たが、それはおそらく中央精神病院。または、近くの総合病院。そのどちらかじやなきやもう名簿を見て直接その子の家に行き、娘の看病をしに行く親を尾行するしか無い。

ハナコは精神病院に向かった。

というか、暗殺の知識なんてあるようで無いし、この娘、殺人は手慣れたものだが、全てがはつきり言えば適当である。やる気と若さで突つ走つて来たが、今も病院に行つて殺して速攻で帰れば何とかなると思っている。

タクシーを使って病院に行く。白くて大きな病院。ハナコは夢野久作の作品が好きなので、精神病院はもつと不気味な物だと思っていた。牢屋でもあるのかと思っていたが、そんな事は無かったようだ。

自動ドアを開けた瞬間に、病院の匂いが香った。病人の匂いが溢れて、それとアルコールのような消毒液の匂いが別世界のようだ、とハナコは思う。

ハナコはスタンドを駆使して、堂々とナースステーションに入り込む。名簿らしき物を発見し、必死に名前を探した。全然見つからず、此処では無いのかと思った。その時、ハナコのターゲット「清水 美智子」の名前が後ろで呼ばれた。

振り返ると、両親らしき人が看護師に面会に来たことを伝えていた。

ミチコの両親は氣力を失い、瘦せこけ、ガイコツのような人たちだった。ミチコは一人娘なのか、随分大事にされていたようである。だって、こんなに心配してくれる両親がいるのだ。

「あの、すみません、娘は治りますかね………ブツブツ」

「……私は担当ではありませんから……えっと、主治医に……」

少し母親はおかしくなっているようだ。

看護師達も引いている。精神病院なのだからそんなのざらだと思いが、ミチコは突如おかしくなったから、看護師達はそれに事件性を感じているのかもしれない。突然おか

しくなった、普通の子供の親の変貌ぶりも気持ち悪がっているのだ。

ハナコはその両親達を見ても、全然可愛そうだとも、哀れだとも思わなかった。

トボトボ病室に歩いていく2人の後をつけながら、考えていた。

どうしてミチコはこんなに心配してくれる両親の元に生まれて、人をいじめたりする女に育つたのだろうか。少なくとも、彼女に私のような噂は無かつただろうし、恵まれていた筈なのに、どうして人を陥れようとしたのか。と、疑問に思った。

しかしハナコは、それが不毛な疑問だという事も知っていた。一言で言ってしまうば、所詮人間そんなものよ、って事だ。人間は自分より下の者を陥れたり、いじめたり、見下したくなる。それは、今まで生きてきて、学校でも、実家での暮らしでも、DIO様の元に仕える中でも、同じことを経験した。

それが酷すぎると、私のような頭のネジが数本外れた人間が出来るのだ。そんな、大多数の普通の人間に押しつぶされて来た、私のような異端児が人間のクズに成り下がって行くのだ。そして、耐えきれなくなると爆発するのだ。

ハナコはサイコパスというような、先天性な物は持つていない。また、ソシオパス(後天性)でも無いし、障害を持つている、又は暴力的になる精神の病気というわけでもない。

ただただ、歪んでしまった女というだけであつた。

が、案外、こういう病気などの、仕方ないというようなものを原因としない歪みが一番不気味なのかもしれない、と本人は思う。ハナコはある程度の常識を兼ね備え、頭も悪くなく、別に人を殺さなくても全然平気なのだ。

でも、DIOの元に仕えたり、殺人を手段として捉えたりと、「普通の人間でも慣れればなんでもできるんじゃないですか？」を体現していて恐ろしい。

そういう、決定的な何かは無いけど、馬鹿みたいにぶっ飛んでる女、それが山田花子という女なのであった。

「で、コレは私、またスタンドで行方不明にしておかないと駄目ね。」

さて、ハナコの独白もそれくらいにしておいて現実に戻ろう。

ミチコの両親と入れ違いになるように犯行に及ぶのも、いいけど、何時間後になるか分からないし、ここはどっかに身を潜めて明日あたり決行しよう。

ハナコのドグラマグラはもっと精度を増せば、人1人くらい好きに操れるかもしれないし、そうして看護師あたりに殺人を代理決行させれば完璧だ。本人も不確定要素の多いスタンドに少なからず夢を持っている。

で、今日は………実家に戻るか。

いや、あそこはちよつとやだ……でも、弟は今も腐り続けている筈。あと、家にある自分の洋服とか取りに行きたいし……

今日の所は家に帰ろうと思った。行方不明扱いされているらしいが、警察とか入っていないればいいと思う。そういえば、私の家族が消えることに関しては全く触れられていないというわけないし、なんか不安になってくる。

ハナコは寝る時だけ帰ればいいかと考えた。

公園にでもいようと思った。水は公園にあるから、その辺でお弁当買ってベンチで食べよう。お腹すいたから揚げ物も買ってしまお。

昼の公園は幼稚園くらいの子が沢山いた。服装とか全然考えずにいたハナコは制服だったので、急いで持ってきた黒いパーカーを着てフードを深く被った。この時間に女子高生が一人で公園にいるのはおかしいし、学校に電話をかけられたら詰む。

前から気になっていたお弁当屋さんの焼肉弁当は当たりだった。今はお金の心配をする事もないので、好きなものを普通に買った。

公園で遊んでいる子供達にはいろいろな性格の子がいた。元気な子もいれば、砂場で静かに遊んでいる子もいた。一人ぼっちで日陰に座っている子にハナコは自分と同じ匂いがすると思った。

懐かしいけれど全然嬉しくなかった。きつと、あの子の服の下は痣やタバコの火傷でいっぱいなんじゃないかな?と思った。あの子の人生がどうなるかが知ったこつちやないけれど。

アイ坊ちゃんには高学歴な人生を歩んで貰いたいわ……それでいいとこの企業に就職して、いい奥さんを貰って、子供に囲まれる。そんな将来になったらいいのだけど……

今回DIO様達にアイ坊ちゃんを預かってもらっているけど、悪影響にならないければいいな……

「ねえアンタ高校生？」

バカそうなヤンキー女子高生がハナコに話しかけてきた。

ハナコはDIOがアイの悪影響にうんたらかんたら考えていたため、ヤンキー女子高生という子供の悪影響の塊が現れて、一瞬嫌そうな顔をしてしまった。

「高校生です。」

「アンタみたいな優等生そうなの？がなんで学校フケてんの？」

「……………フケたい時くらいあります。」

「そ、アンタなんかへこんでんの？何にもないなら学校もどんなよオ。」

「……………お弁当ならあげませんよ。」

なんだこの女。

ヤンキー女子高生はハナコに対してかなり上から目線だ。それと距離が近い。なんだか慰めるような手つきでハナコの肩をさすっている。

「弁当なんか要らないよ。アンタさ、いじめとか辛い事あるんなら逃げればいいじゃない。」

「エ、何でそんな話が飛ぶんですか？」

「でも学校サボって非行に走ったりすると、アタシみたいにしょーもないことになるから、早く親を頼んなよ。」

「親なんて居ませんよ。」

だんだんハナコは自分を下に見たように、訳の分からない説教をしてくるヤンキー女が疎ましくなってきた。

親を頼れだとか、虐められているなら早く逃げろだとか、あてずっぽうな慰めもいところだ。この女、私を慰めて正しい道に導く自分に酔っているだけじゃないのか、とハナコが感じるほどいい加減だった。

「待つて待つて待つてちようだい、それでヤンキーさん、何が言いたいんですか？私、いじめられてませんし、親はいませんし。なんだか凄くイライラする事を貴方からバンバン言われて、ちよつと頭に來るのですけれど。」

「なによオ、人がせつかく慰めてあげてるのに失礼ね。」

「イヤイヤイヤ！アンタの慰めなんか誰も必要としてねエですわよ、ヤンキー女さん。私に説教垂れてないでアンタが学校ちゃんと行きなさいなッ！」

「アンタ優等生っぽいのに生意気だねッ!!」

ヤンキー女のぶっ飛び具合に言葉使いが荒っぽくなっちゃった。

ハナコはいよいよ弁当持つて逃げようと思った。しかし、ヤンキー女は腕をガツチリ捉えて離そうとしない。これ以上説教たらされるのは嫌なハナコはヤンキー女の肩を突き飛ばして、彼女の腕をすり抜け、スタンドを出現させた。

このアマ、消してやる。今日はイライラすることばかりだわッ! 私の精神安定剤になるがいいッ!

いつのまにか殺人がストレス解消になっていることに、ハナコ本人全然気付いていようである。

そのままスタンドをヤンキー女にけしかけようとしたその時、彼女がありえない事を口にした。

「痛エッ! テメー! 何すんだッ! アタシの腹には子供がいるんだぞッ!」

「は…?」

呆れた。

ハナコは口をアングリ開けて本日2回目、白目を剥きたくなつた。こういう馬鹿みたいな女がこの世に溢れているから、世の中には不幸な子供が生まれるのだ、と思う機会は沢山あったが、それを体現したような女が目の前にいる。

白目を通り越して息をするのも忘れそうだ。

「……………貴女、死んだ方がいいんじゃないですか…私を見て優越感に浸りたかったの？なんてチープな。母親になる自分は他の非行に動く高校生を導いてあげないとも思ったのですか？なんて安っぽい……………」

「うっせー！リヨウジがアンタの事ボコすかんなー！」

おそらく彼氏もロクな奴では無い。

構うのも面倒になって焼肉弁当を食べるのを再開した。ヤンキー女は、「無視すんじゃない！」とハナコの頬にビンタをかまそうとする。その手の軌道は丁度、ドクラ・マグラを一つ叩き割った。

「ゴッゴゴゴゴゴガガガ……………」

「ゴ」愁傷様ですわ。」

女はそのまま萎んで黒い赤子になるのだった。

呆気ない最後に再度呆れた。

そして、何故か赤子は二つに増えていた。ハナコは直ぐにお腹にいた子供だと気づき、悪いことをしたと思ったが、宿る腹次第でこういう風にもなるのだと、精神を病むほどのシヨックは受けていなかった。

さて、真の災難はここからだ。

その時、辺りに轟音が響いた。

この公園は比較的大きな道路に面しており、轟音はその道路からだった。少し歩道に出たのぞいてみると、交通事故である。

ハナコの目の中に一台の暴走車が映った。なるほど、あの車が爆走しているせいでトラックは横転し、人は潰されたり、逃げ惑ったりしているのか。

「いや〜ん!」

目の前で女性が派手に倒れた。

うわ、痛そうね、お姉さん。

イテテ、と女性は右足を呑気に抱えて座っているが、お姉さん、そこは道路だからあの暴走車に轢かれますよ。

車は着々と近づいて来る。

ハナコは下がって冷静に傍観していたが、お姉さんは中々立ち上がらなかつた。足を抱えて痛がっている。そのせいで周りをあまり見れていないようだ。

お姉さん、道の端っこあたりだから轢かれないと思っっているのかもしれないが、このままだと確実に轢かれる。

車と私とお姉さんがいる辺りの距離が10メートルも無くなったころ、ハナコはアレ?と思つた。

このお姉さん、今立ち上がらないと死ぬんじゃないか？

「お姉さん早く立ってッ!!」

ハナコは急いでお姉さんに駆け寄った。

「いやだわ私……ごめんささいねッ!」

女性は急いでハナコに謝罪の言葉を述べる。

足を挫いたその怪我は、案外重症らしい。ハナコは彼女の腕を肩に回して立ち上がる大勢を取った支えがあれば2人とも、立ち上がれそうだ。彼女は飲み込みが早く、すぐに動いた。

で、車はどうなんだ。さっと確認するくらいに車の方向を見ると、驚きだった。

なんと、車体と私達は1メートルほどしかなかった。

目の前が超スローに感じた。死ぬ時のアレである。

え、私どこに行けば良いの。前、前、前?でもお姉さん引きずってもこの距離じゃ、2人とも轢かれるわ。え、歩道?歩道に戻るの?でもお姉さん足をタイヤで踏んづけられたら可愛そうじゃ無い。ここまで手を貸したらもう、最後まで助けるしかないわッ!

前か後ろ、ハナコは瞬時に決断を下した。

映画のシーンで車の上を転がっていく俳優の姿を思い出した。

姉さんだけ前に突き飛ばして、私はアクション映画のようにジャンプして車の上を転

がればいいんじゃない？

ハナコはこの前、肉弾戦で殺人鬼に勝った。また、DIOに仕えているというだけで色々体を張ることがあったりする。その事でちよつぱり自信がついてしまったのか、だいぶ斜め上につつ飛んだ結論を弾き出したのである。

「きゃー！」

お姉さんは無事に私に押し飛ばされた。あれだけ飛ばされれば車に体のどこかを潰される事態にはならないだろう。

ハナコは車のボンネットに足をかけ飛び越える要領でジャンプした……………

……………つもりだったのだが、そんな事はアクション映画の世界の話で、現実ではそううまく行くはずなかった。ハナコはフロントガラスに叩きつけられ、そのまま車の屋根を転がり、地面にベシヤツと落ちた。

「うぐっ……………モゴゴゴゴゴ……………」

余りの痛さに口から変な言葉が漏れた。

が、真つ正面から車に轢かれるほどの怪我ではないようだ。案外体も動かせる。骨折もしていないさそうである。

直ぐにお姉さんの心配を出来るくらいには無事だった。

「……………お姉さん……………大丈夫、ぶ？」

「どこも問題無いわ!!それより貴女よく!!平気…じゃ無いわよねツ!びよ、病院にいま連絡するわツ!」

「病院はやめてくださいまし……………ダメなんです。」

「あらッ、駄目よお医者さんに見てもらわないと……………それとも、何か事情があるの?」

気の利くお姉さんの言葉に、ハナコはゆつくりうなずいた。

「そうなのね…どうしましょ、お嬢さん、もしよかったらウチに来る?…いえ、是非きて頂戴…簡易手当くらいは出来るわ。それに後ほど改めて、お礼もしたいし……………親御さんにご連絡も…」

「……………親、居ません。お家…お家にお邪魔させて下さい…」

このお姉さん気が利いたり、ハナコの事を気遣ってくれる心は嬉しいが、非常にお声が大きかった。彼女がキヤーキヤーと騒ぐ内に周りからの注目がこちらに集まって来た。

「お姉さん…私目立ちたく無いのですが…」

「ア、ア、ごめんなさいねツ!静かにするわ。でも、本当に病院に…」

「駄目です。」

そそくさとハナコとお姉さんはその場を離れた。

「ねえ、そういえばお嬢さんお名前は？」

「……………先に、名乗るべきでは？」

「アラツ、ごめんなさいね、私、空条 聖子よ。うちの息子も……………そうよね、同じ高校よ。見たことないかな？ おつきくて、長ランの、承太郎って言うんだけどね。」

「エ。」

「あらツやつぱり知り合いなのね〜！ お名前は？」

「……………も、黙秘権をお願いします。」

ハナコの顔から血の気が引いた。

第11話 若い時の父さんにもそんな事あつたぜ。

目撃者 その③ 不思議な男

※ガールズラブ、過激な描写に注意（オチあり） 承太郎がキャラ崩壊。

「……………マ、マ、マ、マライアお姉様ッ」

ハナコはもどかしかった。

マライアの手はハナコの求める所を避けて、身体を這い回り、焦らし、確実にハナコの熱を高めていっていた。もうさつきからずっとこんな感じである。

百戦錬磨、魔性の女マライアと打って変わって、男性経験の乏しいハナコは、何をどうしていいか分からず、俯いてされるがままになっていた。

「アツ……………ダメ……………マライアお姉様、くすぐりたいですわ……………イヤ……………」

「そんな事言つて、喜んでるわよねえ、ハナコオ？ほくら、いじめて下さいお姉様でしょ？言いなさい。」

「ア……………無理です……………恥ずかしくつて、ン、とても言えませんが……………許してお姉様……………」

マライアの囁き声がハナコを責めていた。囁きに対抗するハナコだったが、言葉を返すたびに自分がいやらしい女に堕ちていく気がして恐ろしかった。

「フッフ、可愛い子。でもダメよ、ちゃんと言って頂戴？」

「…無理、無理なんです…」

「言いなさい、ほら、言え。」

「アツアツアツ、言います言います言うから許して…」

マライアの手が服の上からではなく、地肌を潜り込んだ瞬間もう駄目だった。嫌がっているが、言ったらもつと酷いことをしてくれるかもしれないという期待があった。また、あまりにはしたくないことは出来ればしたくない、という気持ちもあったが、ここで言えば、マライアに責められて仕方なく言った様になると打算的な事も考えていた。

ハナコは好きな人に対してはどちらかというマゾヒズムの傾向があるらしい。

「……………わ、私を…いじめ…いじめてくださいまし…お姉様…」

「どんな風に？」

「ウ……………好きなようにされ…たいです…」

「激しくしてほしいの？」

「アア…激しくても、なんでもいいですわ…」

「……………いけないコだわハナコ。」

ハナコはマライアに夢中だった。

目には涙が浮かび、頬は紅潮し、呼吸は荒かった。

恥ずかしい言葉を言わされてしまった。その事にも酔っていたし、先ほどから覗く、マライアの生足に触りたくて仕方なかった。

ハナコはマライアに乱暴にベットに転がされた。そのまま押し倒され、唇を奪われる。深い口づけにハナコは息ができず酸欠になりそうだった。

いじらしく、卑猥な姿にマライアもスイッチが入ったのか、勢いよくハナコのセーラー服を剥ぎ取りにかかった。

その、強引や手腕にハナコの興奮はピークに達した。

「これからアンタをめちやくちやにしてやるわ、イヤって言ってもやめてやらないんだからねッ」

「イヤッ！マライアお姉様ツ〜!!」

「おい、どんな夢見てやがるんだッ!!!」

「ハッ!」

「いい加減にしろよッ!人の家に入り込んでおいて、卑猥な言葉を垂れ流しやがって……………」

「エ、エ、エ、マライアお姉様は…………?なんで承太郎君…………?」

ハナコは承太郎に叩き起こされた。

目の前のマライアお姉様が夢のように掻き消え、替わりに承太郎が視界ドアップに映った。ハナコは急な視覚情報に処理が間に合っていないようで、目を白黒させた。

「お姉様……………テメー、レズか…気にはしねえが…」

「エ、何で承太郎君がいるん…エ、夢なの…マライアお姉様？エエ…………嘘嘘嘘…」
「夢だぜ。」

現実是非常である。

「なんでよ、なんで起こしたのよオ!!」

「バタつくな!」

「もうちよつとで、マライアお姉様と親密な関係になれるつて所だったのよッ!!」

まだ寝ぼけているハナコは承太郎に逆に掴みかかったが、ムキムキな男子高校生の力に勝てるはずも無く、再度布団に縫い付けられた。

幾ら女性の中で力が強いハナコでも承太郎の拘束の前では無力であった。まだ、マライアとのイケナイ関係になる、美味しい夢を邪魔された事を忘れられないらしく、バタついている。

「暴れんなよ。それよりハナコ、ヤッパリ嘘ついてたな。」

「……………嘘？嘘なんかついたらかしら……………ン…」

「幽霊なんかじゃ無かったなア？」

「アッ…」

ハナコは寝ぼけた頭で自分の所行を思い返した。するとだんだん今日一日の出来事が思い出されて来た。

そして、今の状況は、目の前に承太郎。これは非常にまずいシユチュエーションなのだと自覚し、サーツと顔が青くなった。

「思い出したようだな。あの女（アマ）に聞いたぜ。テメーを目撃してる人間は沢山いるってな。見えるってことはやつぱりテメーは幽霊なんかじゃねえようだなア？」

「……………まさかそんな…ホホホホ」

「はぐらかすんじゃあ無いぜ。これから警察に…」

「やめて…!!やめてくださいましッ!!」

ハナコは電話をしに行こうとする承太郎の足を、必死で掴んだ。足に下がりつくという非常にみつともない凶であったが、なり振りかまっつていられたなかった。

警察にバレたら動きにくくなる。ドグラ・マグラの霧状噴射での催眠は、認識できなくしているだけで、催眠にかかる前に認識した事は、能力が解除された後、又は時間切れで普通に思い出してしまう。

警察はダメだ。この男を敵に回すのも駄目だ。

少し無茶をすればスタンドで捻り潰せる。しかし、今ハナコは恐怖していた。何故か

承太郎を絶対的な強者として捉えていたのである。

承太郎という男の強運に恐れをなしていた。

それにこの男は催眠にも掛からなかったり、スタンド使いじゃあないが、どんなミラクルを起こすかわからない気がした。

なんだかこの承太郎、ピンチに陥った時にとんでもない爆発力を発揮しそうだ。いや、絶対に私が負ける結果に成りそう。

ここは、真実で誤魔化すしかない……でも、一度騙してるから、今回は騙されてくれないかも……嫌だア、この人なんなの……

ハナコはこの1日で承太郎アレルギーになっちゃったのである。

「……もう暴れないから離してください……訳もすっかり話しますから……」

「駄目だね。このまま話な。」

「……」

承太郎は用心深かった。

ハナコは仕方なく布団に縫い付けられたまま、真実を用いての誤魔化しを、必死で繰り出した。

「……………私の両親はトンデモナイ毒親というか……………家はゴミ屋敷で父は酒乱、母は宗教にハマリ、兄はドラック中毒のデブでした。その……………3人が私を置いて夜逃げしまし

て、それをきっかけに、私は奉公先を求めた次第でして……良い職場に就けましたし……警察うんたらの厄介になると、私は未成年ですから、非常にまずいことに……」

「そうかい。」

「エツ、信じてくれないんですかッ?!」

「テメーの親の話は信じる。だがな、方向先を決めたならどうして戻ってきた。それと、幽霊じゃないなら、どうして朝、俺にしか姿が見えなかったんだ。」

「それは……言えません、というか幽霊の件は、超能力としか……説明出来ない……」

「嘘つけ。」

「本当なんです！フヘへ……すごいですよ……超能力……」

自分が何を言ってるかも、もうよく分からなかった。

キツト承太郎君、今度は騙されまいとしているだろう。駄目だ、恐ろしいわ。私、どうなってしまうのかしら……

「超能力……超能力か……」

「嘘だと思われても仕方ありませんが、本当に超能力なんです。」

「超能力……」

「超能力……」

「エ、本当だよな?」

しかし、以外ッ！

承太郎は満更でもないようだったッ！

「ウンウンウンウン、ホント。」

…嘘だろ承太郎。貴方もしかして詐欺に引っかけたりやすいタイプじゃ…いや、用心深いし、今のはこの数秒間で考えに考えた結果なのだから…

ハナコは承太郎の、ある意味早すぎる飲み込みにも恐怖を覚えた。こんなにポンポン情報処理出来るなんて、只者じゃないわ！と、混乱と不安で何に対しても敏感なのである。

「確かに、超能力なら違和感ねエな。」

「ウンウンウンウン。」

こうして、承太郎は呆気なく「ハナコ超能力者説」を信じてくれたのである。押さえつけられていた腕が解放され、ハナコはドツと疲れを感じた。

「ハー、ハー、ハー、ハー、軽く、過呼吸に、なるどころでしたわ…」

「……………乱暴してすまなかつたな。」

「……………意外、ですわ。」

「俺は自分が間違っただと思っただことは、シツカリ謝る。」

ヤダ、すごく誠実じゃない。

「私のご主人様にも見習って欲しいです。」

「……………いろいろ大変そうだな。」

「案外そうでも……………なくはないですね…」

「だが……………どうしてわざわざ学校に来たんだ？」

一瞬言葉に詰まった。

ぽつと出される言葉が冷や汗をかかせる。が、ハナコは嘘八百を連ねる事が案外苦手では無いのである。それっぽいことを本当にそれっぽくするのが、うまかった。

「……………まア、なんとというか……………学校生活が少し恋しくなってしまったんですかね……………イチコちゃんにも、ケジメつけたかったですし……………」

遠くを見つめるようなはかない目で、しつとり言った。

「そうか。」

承太郎は、何かを察したように信じた。

案外いい人で、騙すのが心苦しくなつて来たぞ。

この人案外、悪い人じゃないし、ちよつと冷静になつたら私のプライベートに踏み込んだ事に対して申し訳なく思つてくれたのかもしれない。

確かに、承太郎が一貫して気になつていた事は、ハナコが幽霊で無いなら、なんなのだ。という事だった。少し脅されたが、承太郎の意外な爽やかさに、許せる気がして来

た。許せる気がしてきたので、申し訳なくなつて来た。が、後悔は無かつた。

「あらあ、さつきまで2人で喧嘩してるみたいだったから、承太郎を止めに来たんだけど……もう大丈夫みたいね、よかつたあ〜！」

「ア……………せ、聖子さん……？」

「覚えてくれたのね〜ッ！」

そこに、金髪の女性が部屋に入ってきた。

ハナコはすぐにその女性が車の事故で助けた女性だと気付いた。

今朝、ハナコは空条邸に少しだけお邪魔になり、手当てしてもらおうと思つたのだが、手当ての最中に気を失い、結果夜まで目を覚まさず、承太郎とも鉢合わせる事態になつたのであつた。全てをはつきりと思ひ出したハナコは、濃すぎる1日にため息をついた。

私、よく生きてたな、キャパオーバーで死亡しなくてえらいぞ、と。

「ハナコちゃんつて言うのね、承太郎から聞いたわ。改めて、空条聖子よ。よろしくね。」

「はあ……………」

聖子は変わらぬ元気がいっぱいであつた。まだ体の節々が痛むハナコには、声が骨に響くようで少し辛かつた。

聖子はお夕飯準備するから、と言つて甲斐甲斐しく廊下を歩いて行つてしまつた。

「ハナコ、夕食、食うか？」

「……………エ、そんな、迷惑かけられません。」

「お袋が危ないところを助けて貰ったんだ。これくらいはさせる。」

「…承太郎君、自分が作るわけじゃないのに、偉そうじゃないの凄いですね。」

「……………ハナコ…ちよつと変わつてゐるって言われねえか…？」

「エ？そもそも友達が少ないので。分からないですわ。」

「というか、ほぼ初対面の女に名前呼び捨てしたまつてた。」

「気にしなくていいですよ。」

「そうか。ならハナコも敬語ヤメロ。気持ち悪リイ…」

ハナコは敬語を止めろと言われて、なんでだろう？と思つた。すぐに、そう言えばこの人と私は同い年だつたと思ひ出した。

先程、あれほど承太郎を怖がつていたハナコだったが、会話を交わし、今はそうでもない。

今の承太郎には、謎の説得力と落ち着く声のトーンが兼備わつていた。ハナコは、せつかくこう言う、同級生と話す機会が巡つて来たのだから、今日くらい彼に対して敬語を辞めてみようと思つた。

こいつも案外チョロい女である。

「……………今の職場でメイドをしているの。ご主人様には敬語だから…周りの人も年上で。……………そういえば私、高校生だったわ。」

「ガクセーはガクセーらしく、な。」

「承太郎君結構喋るタイプなのね。……………アア、確かに貴方中学生の時は凄く真面目な優等生だったものね。」

「うるせえ、俺は元々喋るタイプだぜ。」

「遅めの反抗期つてヤツかな？」

ハナコは久しぶりに普通の高校生に戻った気がした。

同級生のモテモテの男の子と話すなんて、世の中の女の子が憧れるシユチュエーションだな、と思った。ハナコの王子様はマライアだが。

…アレ、そういえば。

……………おいおい、writerハナコちゃん家族皆殺しにしているし、結構前から普通の高校生じゃないよね？

残念なことになる、reader。

ハナコちゃんのぶっ飛んだ精神では、学校行って普通に授業受けてたんだから、フツーの高校生。つて思ってるんですのよ。

本人今笑ってますけどね。朗らかな笑みで、とても微笑ましいですけどね、こいつは

殺人鬼で、息をするように嘘をつきますが、最近は全然罪悪感とか感じなくなってきましたの。

つまり、おかしいんですこの女。

イカレ女なんです。まともな考えなんて通用しません。

「貴方、不思議な人だわ。」

「そうかい。で、飯は食うのか？というか、食えるか？」

「貰うわ。………母親の味って食べた事ないの。貴方のお母さんの料理だけど、味わってみたい。」

何はともあれ、非常にいい空気である。

ここから非常にひどいアホエロ。R15程度ですが、朗らかな2人のイメージを崩したくない方は後書きの閑話まで高速で飛ばしてください。

2人が性行に及ぶわけではありません。

全ては作者が徐倫ちゃんが好きなせいです。（言い訳）

非常にいい空気なのではあるがここだけの話、実は承太郎、この日はハナコの喘ぎ声
で又いた。

どれだけカリスマ性溢れる承太郎とて、健全な男子高校生なのであった。

ハナコもハナコで、マライア夢をおかずに同級生の男の子ん家でマスターベーション
をした。本人は。とても背徳的だったと供述している。

今日の不幸はおわらない。続く。

夜中に手を洗おうと水場に行った。

「ア」

「ア」

ぼったり水道で出くわしてしまったのである。

沈黙が辺りを包む。

2人は、ビビりにビビった。なんでお前ここにいるんだと。承太郎はおかずにした相
手が突如目の前に現れた事にビクつき、ハナコは恥ずかしさでビクついた。

承太郎もハナコもポーカーフェイスで静かな驚きだった。しかし、2人とも同時に手
を後ろに隠すという動作を行ったため、勘のいい2人は、お互いのシユチュエーション

を瞬時に察してしまった。

静かな混乱は最高潮に達し、混乱し、はよくわからない事を口走った。

先に口を開いたのはハナコである。

「ウ……………」

「う？」

「は、背徳感……………どうでしたか？」

「(ギクウツ!!バレてんのかツ!?)」

この時ハナコは、混乱を極め感想を相手に求めるといふ有り得ない行動に出たのである。

どうかしてるぜツ!!

(私は同級生の家という)背徳感(が、良かったです。貴方は)どうでしたか?

こう聞きたかったのだが、言葉が足らなすぎたのである。

承太郎は、

(私で又くという)背徳感、どうでしたか?

と意味を捉えた。

バレてやがるツ!!

承太郎は一瞬、シカトを貫いて誤魔化そうと考えた。が、すぐに考えを改めた。真っ

直ぐな男なので、どうでもいいことにも真剣に向き合ってしまったのである。

そして、馬鹿なことここう考えた。

ここでは、引けねエツ!!バれてるならバれてるで堂々としやがれ、男だろツ!

「悪く無かったぜ…背徳感。」

ドン、という、効果音がつきそうな言い切りだった。彼なりの覚悟だった。

「フ……………私も悪く無かったですわ（混乱） 貴方とは仲良く出来そうですわ（錯乱）」

「ああ俺もだぜ（錯乱）」

「この事は墓まで持っていくわ。私、すぐにエジプトに帰るわ。安心して頂戴。安全よ。」

「ああ俺も…イヤ、俺はエジプトにはいかないぜ（混乱）」

「こないで。」

「俺も墓まで持ってくぜ。」

「よろしいわ。」

「俺たちは諸刃の剣だ、それを忘れるなよ。」

「貴方も夢夢お忘れなきようお願いします。」

「俺はまともだぜ（混乱）」

「私もまともよ（混乱）」

「秘密の関係ってヤツだ（錯乱）」

「ええ、10年付き合った友達よりも深い仲ですわ（錯乱）」

「おいアメリカ人より目合わせてくるのやめろ。」

「進路指導の教師よりはマシ。」

2人の間に謎の友情が生まれた。

肩を寄せ合い、手を洗った。その行動に2人は馬鹿なことに、深い仲間意識を感じた。ハナコも承太郎も深夜特有の精神状態で、ぶっ飛んでいた。

「さて、スツキリ寝るぜ。」

「そうですね。アラツ、やだ、敬語になってたわ。えへへへへ、切ってもきれない関係なんですから、仲良くいきましょ。」

「そうだせ。」

「水魚のうんたらですわ。忘年会のネタにしたら殺す。」

「せうだぜ（よくわかってない）」

「ハハハハハハ」

2人は抱き合って笑い合った。友情のハグである。

が、しかし不幸はまだまだ終わらなかつた。

「承太郎オ〜?」

「(ギクウツ!!)」

この2人、夜中なのに煩くし過ぎたのである。

最初は小声だったが、興奮でだんだん声が大きくなり、最終的には大笑いの始末。

聖子が騒ぎを聞きつけて起きて来てしまったのである。

「な、なんでもないぜ…」

「お水、飲みたくなってしまうただけです…」

まあ、お互いに気まずい事をしていたのは確かだが、まあ、一年くらい経てば笑って済ませる話だった。

が、聖子の登場は非常に不味かった。まずいなんて範疇じゃなかった。

「……………そ。」

「違うぜ。」

「誤解しないでください。」

「していないわあゝ」

「していないな?」

「ならいいんです。」

夜中、水場、若い男女2人、興奮した様子、焦った態度。……………最初から奇妙なシチュエーションなのに、事は更に斜め上に飛んでいった。高速道路を通る車のように誤

解の道を突き進んで宇宙に飛んでいった。

違う！私は、俺は、潔白だツ!!

「……………別にいいわよ、誤解なんかしてないわ。」

「良かったぜ。」

「良かったです。」

「ハハハハハ」

聖子の回答に胸を撫で下ろした。

お袋は俺を信用してくれている。と承太郎は心の中で涙を流した。ハナコも親子つていいものだな、と虫のいい考えが頭の中を流れた。

これで今日も安眠できるぜ。

「承太郎も男の子ならそういう時もあるわよね…………でも怪我してる女の子を相手にするのはダメよツ！」

「あ”あ”あ”あ”あ”あ”あ……………」

ハナコはその場に崩れ落ちた。

承太郎は白目を剥いていた。

いつも被っている帽子を深く被り目をつばで覆う動作、あれを帽子を被って無いのにやってしまった。3回やって帽子をかぶってないことを思い出した。

2人の希望は儚く打ち砕かれたのである。

次の日、ハナコが空条邸を出ても聖子の誤解は解けなかった。承太郎は人生最大の黒歴史を抱えることとなったのだった。ハナコに関しては、トラウマを増やす1日となったのだった。

「……………禁欲しよう。」

「……………禁欲するわ。」

第12話 人生は見せ物

目撃者 殺す話

「お、お世話になりました…」

「ホホホホ、いいのよ。ほら、承太郎も挨拶なさい。」

「……………おう。」

「クフフフフ、フフ。」

「あらあら、2人とも仲良しね。」

仲良しでもなんでもない。ただ、昨夜夜に2人でいた所を目撃されて、事があらぬ方向に進んだ事に対する絶望を引きずっているだけだ。ハナコも承太郎も昨夜から一睡もできていなかった。

聖子はそれを分かかって朝から、わざと陽気な態度で、わざと気配りのできない女のように振る舞っている。

この女はいつもと同じですよ、という雰囲気私達を牽制しているのである。

私には、どこぞの知らんビッチが、息子に手を出すなよ。と。承太郎には、出会った初日から手を出すなんて、本当は言語道断だ。大目に見てやるが、反省しろよ。と。

まあ、性的な関係を築いていたのなら、それはとても優しい叱り方なのだけど、ハナコと承太郎に関しては本当に唯の勘違いなので、それは理不尽な怒りである。

「ありがとうございd%# \$€5+÷……………」

「ハナコちゃん、元気でね〜！体に気をつけて〜！私も承太郎もいつでも待つてるわ。」

「お世話に>3#…ました…」

ハナコはどうとう日本語が分からなくなってしまった。聖子は相変わらずだった。

空は青い。太陽に包まれてそろそろ高校三年生になる時期だ。こんな日に卒業式ができたらいいのかな、とガクセーみたいな事を考えた。ガクセーだった。人は気ままずくになると、別のことを考えがちである。

聖子はハナコにタクシーを手配し、明るく振る舞ったが、それが逆に2人の心をダークサイドに引き込んでいった。

なんでこんなことになったんだ。

全ては性欲のせいである。2人は未遂でも、そもそも事に及ぼうともしないが。

この事件で承太郎のグレ期は更に加速する事となった。ハナコはさらに遅しくなった。

人生、強かに生きていかなければならないのだと2人は学んだ。空を見上げて心の友

よ、と妄想のテレパシーで通じ合った。

「……………達者だね。」

「ハナコもな。」

「ばいばい♡ハナコちゃんなら、お嫁さんに全然オツケーよ♡」

嘘つけこの女。案外腹黒いぞ、優しいけれど。

タクシーのドアが閉まる。

ハナコは精神病院までお願いします。と、ぐったりした顔で運転手に頼んだので、とても心配された。車が発進すると、承太郎と聖子の姿が遠ざかっていった。

これで空条邸ともお別れとなると少し寂しい気がした。久しぶりに、危険とはかけ離れた世界を堪能したので、ハナコは、少しのアクシデントもそつと心の中に収めようと思つた。

「おねーちゃん、大丈夫？本当に精神病院でいいのね？」

「大丈夫ですわ。お見舞いに行くんですの。ありがとう、お釣りは有りません。」

目的地に着き、運転手に一万円札を握らせ、爽やかにタクシーを下車した。

精神病院についたハナコは清々しい顔をしていた。

現在の気持ちとしては、さて、仕事頑張るか、というところである。まあ、昨日のことは忘れて爽やかに仕事を終わらせよう。

「アイお坊ちゃん……今から姉やは頑張りますのよ。」

久しぶりにドクラ・マグラを使う気がした。自分の姿を認識させないように霧を発生させ、病室に向かった。エレベーターを使って目的の階まで上がり、歩く。

ローファアの音がコツコツと響く。白い壁、白い服の人々の中にいる制服の自分だけが特別なそんな存在の様に錯覚した。私は廊下の真ん中に引かれている線をまま外さない様に歩いた。

少し歩くと、目的の病室に着いた。ここを開ければ奴が居るだろう。白い横に開ける扉は少し重かった。病室にはベットが2つ。一つは誰もいない。

もう1つの奥のベット、に彼女はいた。

ミチコは相変わらず、ベットの上に座っていた。

「こんにちは。ご機嫌いかがですか？今日は空も青く、暖かい風が吹き、草も嬉しそうにざわめく、いい天気ですね。」

「……………」

ミチコは何も喋らなかつた。私の方を向くと目を見開いて、口をぽかんと開けた。驚いたような顔である。

ハナコは少しおかしいな、と感じた。催眠が続く限りは夢の中にいるように、瞳には何も映らないはずである。が、今の彼女は完全にハナコを認識して、驚いたのだ。

催眠が解けている。それしか考えられない。

しかし、驚かなかつた。逆に、左唇を吊りあげた。

「ミチコさん、もしかして目覚めかけてますか……？」

「……………ハナコ。あ、あんたヨウコちゃん達を、こ、殺したの……？なんで、私……………ここに……病院……………？」

目覚めていた。が、混乱しているようだった。

そりやそうだ、何ヶ月という月日がすつぽ抜けているうえ、病院送りにされていたら、誰だつて焦るだろうと、思った。

第三者から見ると、ハナコがとても性格の悪い女に見えるだろう。ハナコは自分をいじめた女が焦っている様を楽しんでいるのでは無い。

ミチコは本当に焦ってはいるが、同時に、頭の3分の1くらいは冷静に物事を捉えているらしい。右手をゆっくりと置いてある花瓶に伸ばしている。そしてそれを、ハナコは分かっていた。

次の瞬間、ミチコはハナコに花瓶を振り上げた。ハナコはそれよりも早く、右拳を前に突き出し、ミチコの鼻にジャブをかました。

「ヴ……………な、なんて事するのよッ!!」

「正当防衛よ。」

「殺人鬼！」

「なんとでも言いなさい。」

ハナコはミチコの髪を引っ張り上げ、壁に思いつきり打ち付けた。ひどい音がした。今の衝撃でミチコの鼻はおかしな方向に向いた。

さらに、その勢いでハナコは両腕をぶち折った。周りには認識されるはずないし、監視カメラはあらかじめ電源を抜いておいた。管理室の男は今の時間は、新人のナースを最上階で犯すのに必死で、ノーマークだ。あと一時間は戻らないだろう。

ハナコはやりたい放題だった。

「痛い、痛いよ〜ッ！」

承太郎は、弱いものいじめはきつとしないし、彼は恵まれてる分、良い人間になるだろう。でも、この女は別である。完璧な私怨だが、世の中に対する理不尽を、ハナコはミチコにぶつけた。

そして、これでスツキリ、柵や、後悔を断ち切って、エジプトでアイ坊ちゃんとD I O様に使えながら過ごそう。という企みであった。

「ふう、貴方の歯を全部引っこ抜くのもいいわ。貴方を糸ノコギリでバラバラにして煮詰めて、貴方の両親に買わせてやりたいけど、私は貴方みたいに暇じゃないから、直ぐに楽にしてあげるわ。」

扉の外では、急患です！という声が響いた。

廊下で白衣の天使達が走り回っているのだからなくと呑気なことを考えた。

それに比べて目の前の女はとても醜かった。私はたとえ、どんなに痛くても土下座して命乞いしたりしない。それは、D I Oの元に仕えてから学んだ、プライドからの確信であつた。ハナコはなんやかんや言つて、そこら辺の女の子の様に優越感が好きである。しかし、そのジャンルがおぞまし過ぎるので、普通の女の子では無いのだ。

「何か言い残す事ありますか？」

「た、たひけてください………」

また、ハナコの美学の元、ミチコの遺言はアウトであつた。

人生は見せ物

ハナコは任務を終えて、速やかにエジプトに帰還した。エジプトの砂っぽい感じは、妙に懐かしかつた。ただ、ハエがブンブン飛び回っているのはちよつと嫌だつた。

空港に着いたのは夜だつたが、すぐにアイに会いに行きたい気持ちが止められず、無用心にも鍵のかかつたスクーターにまたがり、夜の街を駆け抜けた。ただ、ハナコはスクーターなど全然乗つたことが無かつたので、運転が荒い、というかガツタガタであつた。三輪だつた事が唯一の救いである。

重い門を開くと、夜にも関わらずペットショップがハナコを出迎えた。2人は仲が悪いので、ハナコは身構えたが、ペットショップは嘲笑うようにハナコを見下し、また飛翔した。

「夜分遅くに失礼ですが、帰還いたしました〜」

小声で、あまり音を立てないように館に入る。アイの泣き声は聞こえないため、良かった、とホツとした。

D I O様はこの時間は起きているはずだから、荷物を置いて挨拶に行こうかしら。きつと坊ちゃんもD I O様の所にいるわね。

素早く着替えて、おさげを編み直し、エプロンとヘッドドレスを着けてD I Oの部屋へと向かった。いつも、重々しい扉をノックする時に一瞬躊躇いの様な物が心の中で生まれるのだが、今日はそんな事も無かった。

「D I O様、ただいま戻りました。ハナコです。」

「ハナコか。良い、入れ。」

「失礼いたします。この度は誠にありがとうございました。メイドの分際でD I O様のお手を煩わせるなど、私自身も大変おこがましい事をしたと自覚しております。本当に、申し訳ございませんでした。」

まずは深々と頭を下げて、謝罪する。

これは本当に有り難いと思っっている事だし、申し訳ないとも思った事なので、素直な気持ちを含める。

「良い。任務については滞りないか？」

「はい。」

「ならば、褒めて使わそう。」

「有り難き幸せ。……………あの、ところでなのですが、坊ちゃんは？」

「隣で寝ておる。」

ハナコは心臓が飛び出しそうになった。

な、なんて事を。いつのまにかそんなに仲良くなっていたのか2人は……………D I O様、アイ坊ちゃんに興味なさそう…というか、鬱陶しく思っていたのではないの？まさか、こんなに仲良くなっているなんて……………驚きだわ。

「あ、アイ坊ちゃんと親子の仲を深められましたか…？」

「勿論だ。」

「は、はへ……………」

「……………なんだ、父親が息子と一緒に寝るのがそんなにも珍しいか？」

「いえ、滅相も御座いませぬ。とてもお似合いです。」

む、息子だと……………

ハナコはD I Oがアイを息子と言った事に、また驚いた。どうやら、D I Oには父親という自覚が生まれたのか、アイを特別視し始めたらしい……………とハナコは捉えた。

そしてD I Oがアイに構い始めると、ハナコはアイの養育権を奪取される可能性がある。顔には出さなかったが、心の中で少々焦っていた。

「……………D I O様……………その、私は邪魔になりますか……………？」

「言葉が足らん。」

「D I O様がアイ坊ちゃんを本格的に育てる、となると、私は必要無くなりますかね……………」

この回答次第でハナコは、手を引こうだとか、自分の存在意義を失うとか、マイナスな考えが有ったのでは無い。

むしろD I O様が私から、アイ坊ちゃんを奪うなら、ぶち殺して財産をかつさらって石油王と結婚して悠々自適に暮らしてやる、と思った。

しかし……………

「ばつ、バカな話をするんじゃないぞッ!!お前が居なくなったら地獄が始まるッ!!」

ハナコの心配とは全くの逆であった。

「こいつは普通のガキじゃないんだ、成長も早いし、這い回るし!それも並の速さじゃない。ちょこちょこ動かし目が離せない、目を離すと窓から落ちる、階段から落ちるなど

の危険がいっぱいだッ！お陰でテレンスが階段から転がり落ちた……………」

DI Oの勢いはすごかった。ああ、やっぱり子供を育てるの大変なんだろうな。

「……………ホホ、ホホ、私がいないと駄目ですわエッ！」

ハナコは乾いた笑と、ちよつとだけ自画自賛のような嬉しさが身から出た。

「本当に笑い事じゃあ無いんだ、飯にも気をつけなきゃいけないんだろ、風邪も心配だし。なによりも、目が足りない……………」

「ホホホホ……………」

どうやらこの館は思ったより大惨事だったらしい。ハナコの不在でテレンスの仕事が増える。そこにさらに、アイというトラブルのかたまりの、赤ん坊という存在が増えたのだ。老齡のエンヤに負担をかける事をDI Oとしてしなかった。ので、DI Oがほとんどの世話をしたのだ。

この一週間と半、彼はほとんど趣味の読書が出来なかった。そして、遠い昔に死んだ母の姿を思い出した。父親も思い出した。母親代わりのハナコがいらない今、父親である俺がしつかりするしか無いじゃあないか、と謎の使命感が湧いて来た。

投げ出すよりも、自分の父親と同じになりたくないという気持ちが勝った。

「DI O様投げ出さずに偉いですわ。」

「どんなに子育てが大変だとな、このDI O、あのようなクソ親にはなるものか。しつか

りと息子は大切にするぞ。」

「今まで散々殺して来たのに……………」

「心を入れ替えたのだ。だいたいD I Oの精子から生まれたのだから、還元したただけだろ。」

「精子とか堂々と言わないでください、気持ち悪い。」

「何だとツ！欲しがる女は世界に溢れているのだぞッ！」

「前から思ってたんですが、D I O様精子臭いです、アイ坊ちゃんに悪影響ですわ…」

「黙れ、処女が。知ったような口を聞くでない。」

謎の使命感により、D I Oはアイの事を大切に思い始めたのは確かだが、元の性格は変わっていないようだった。

そして、ハナコはそろそろ無駄話をよして、アイの顔を見たかったので、D I Oの隣で寝ているというアイを見に近づいた。

「この一週間で大きくなったぞ。」

「ふふふ、この数日で大きくなるのなら苦労しませんわ。ハイハイからいつ立つようになるのかしら……………」

「そういえば昨日立ったぞ。」

「はー。」

「だから、立ったって。」

「え」

「立ったんだ！」

「分かってますわッ！」

驚いた。

アイはまだ、生まれて4ヶ月くらいだ。赤ん坊は生まれてから立つまでは1年前後。8ヶ月も早く立つなんて………どれだけ早く成長するんだ……

もしやこのままぐんぐんのびたら、2歳くらいなのに小学1年生くらいの体とか………中身と体がガチャガチャになるのではないか……

とても心配だった。

もちろん、アイを愛しているが、そうなれば、世間から見たらアイは化け物扱いされるであろうと思った。物凄く頭の良い子であれば、飛び級して学校に入れるかな………とか、ハナコは母親特有の先の先ことまで考えてしまう、あの思考を展開していた。

「み、見せて下さい。」

「ほれ。アイ、ハナコだ。」

DIOは布団を少しまくった。

アイはすやすや寝ている。が、明らかに大きくなっていた。成長のスピードがどうと

か、ハナコにはよく分からなかったが、確実に大きくなっている。

そして成長に関して、1番心配に思っていた事を問いかけた。

「DIO様……まさかですけど、もう血を飲むようになったとかありませんよね？」

1番の心配はこれである。

もしも鮮血を好むようになったとしても、輸血パックなど、合法的な血は手に入るだろう。しかし、DIOの側にいれば、生きた女を殺して与えられるなど、悪影響極まりない、将来が心配になるような食べ物を、与えられているかも知れない。ハナコは心配だった。

相当ハナコは怖い顔で睨んでいたらしく、DIOはちよつとびびっていた。それに、明らかに目を背けていた。

「……………まあ、そりや人間好みがあるだろ。」

「血、飲むんですか？」

「いや、まあ、血……………血は飲むな。うん、飲んでた。」

「ア？」

「いや、ちよつと目を……………離した時に。」

「目を離したですってッ!？」

「いや本当に、1分だ……………」

「何を、していたんですか……………??」

ハナコはD I O横髪を引つ張って、顔を引き寄せていた。怒れる母は怖い。ハナコは普通でないの女なので更に怖かった。全身から吹き出す殺気というか、圧が半端では無かった。

「……………雀、を食べていた。ボリボリいつてた。」

「エ、お肉もですか?」

「これは俺の仮説……………というか、血を好むなら輸血パックやらそういうのを入手すれば良いし、合法的に解決するさ。だがな……………その…」

「何なんですか。早く言え、10回くらい離れた娘にビビるなんて感情なしめ。」

「ウ……………その、血だけじゃ無くて、肉も欲しがるんだ。だから、その中間って事でローストビーフを与えた。」

「ナイス。」

ハナコは雀なんか食べてお腹を壊さなかったかしら、と思った。血と生肉を好む事は全く問題視しなかった。そして、案外D I Oは父親だった。

D I Oとハナコは夫婦の様であったが、まともではなかった。それとお互いに生きるのに必死で、恋愛もクソも無かった。

「怒っているのでは無いのですわ。ただ心配なだけ。」

「その心配は、いつかこのDIOを滅ぼしそうだな……………」

「なぜ？ 父親を殺したらアイが悲しむわ。ホホホ、安心していいのです。貴女はアイ坊ちゃんがいる限り、私に守られているのですわ。ホホホ……………」

DIOはハナコの異常性が加速していると感じた。

日本という人を殺したら暗がりには逃げなければ、社会的な死が訪れる平凡な環境から、今はスタンドを使えば簡単に殺人を犯せる環境にいる。

殺人というものにあまり抵抗がない女がこういう世界に來ると、手段としてトンカチやナイフを振り回して人殺しをするようになるのだな、と思った。

「ふふふ……………アイ坊ちゃんの為なら何でも出来るわ…ふふふ……………」

「お前、大丈夫か？」

元気に狂っていたハナコだが、だんだん様子がおかしくなってきた。

「うううう……………アイ坊ちゃんに嫌われたら、私を好きでいてくれる人が居ません……………グズグズ……………」

「おいおいおい、何で泣き始めるんだ。心配しなくてもあと10年は独り立ちしないだろ……………」

「ううう……………日本で完璧な母親を見てきてしまった……………もう胸を張って親代わりですって言えない……………」

「父親が吸血鬼の時点でその方面は心配しなくていいと思うぞ。」

「ううう……殺人鬼に育てられたのでウチの会社駄目ですって言われたらどうしよう……」

「なんの話してるんだ……」

「DIO様ももつとアイ坊ちゃんを大切にしていあげろよ……うう……」

「めんどくさすぎるだろ……」

DIOはハナコのウザ絡みを鬱陶しく思ったが、こいつにもこんな時はあるんだなと思っただけ。

愛に飢えた女なので、支えがないと生きていけない。アイは現在進行形で脳味噌にドサクサとして働いているのである。

確かに、スタンドを操る時点で意識は強いだろうが、17の娘には色々アグレッシブな人生だったのかな、とDIOはハナコを慰めてやる事にした。

「ううう……泣きたい。泣いてる。」

「よしよしよしよしよしよしよし。」

「DIO様、慰めるってよしよし言えればいいんじゃないんですよ。」

「めんどくさいぞ。」

「……優しくして下さい……愛されたいんです……頭撫でて欲しい……優しい家族の元に」

生まれたかった……変な所まで生き延びてしまった……うう……

「分かるぞ、俺の父親も酒癖が酷く、母は過労で死んだな。」

「ううう……D I O 様優しい……お酒飲みたい……」

「少しだぞ。」

ハナコにD I O は飲みかけの酒を渡した。が、ハナコはその横のボトルをひったくり、ラツパ飲みした。凄い勢いで飲み下した。ほぼ、浴びるように飲んだので、酒が漏れて服が濡れた。

「オイ、高いんだぞ。」

「クククク……美味しい。思ってたより甘い……苦いって、聞いてた……」

「お前が思ってるのはやつすい缶ビールだろ。」

ハナコは、D I O の上から降りて危なっかしい手付きでアイを抱いた。それから踊るようにフラフラ回転し、いつのまにか設立されていたアイのベッドにアイを移動させた。

「ククク……熱い。」

カラカラ笑いながらスツポンポンになった。そのまま戻ってD I O のベッドにダイブし、大きく揺らした。

月明かりが照らし出す、シルエットは女性のものだが、腹筋が割れて筋肉が多くつい

ていた。

高い身体能力を兼ね備える女なので、納得の体だろう、シックスパックがあった。しかし、男性ほどの厚みは無く、DIOから見れば、折れそうな体だった。

「何…見てん……」

「お前酔ってるぞ。服を着ろ。風邪ひくぞ。」

「酔ってらい。」

「酔ってる。………何?こんな、ムキムキ、の女の子は、隣に置くおも無理なの……?」

「もう少し柔らかかそうな方が好きだ。」

「ぞ。」

ハナコは日本的な顔をしていた。ザ、アジアンビューティという切れ長だが、つり目が垂れ目か微妙な眼で、化粧つ気がなく、白く、に太もも辺りまで黒髪が伸びる。彼女の顔のチャームポイントは、厚くぼってりした唇だと思う。

「……………フヒヒヒ……」

「お前の顔は日本でもモテるのか?」

「全く。気味が悪い女ですから…外国ならモテます?」

「モテそうな顔してる。」

「ふふふふうれしい。」

「何笑ってるのだ。」

「えへへへへへ、D I O君どこでもセックスだねふふふふ」

「バカにしてるな。」

「ククククク……ふひっ」

「何がおかしいんだよ、バカくくくく」

その後2人は謎の笑いなら襲われ、朝まで酒を飲み続けた。

ハナコはD I Oに、少しだけ仲間意識を抱いた日であった。ハナコは今日、急に泣き出したり酒を飲み始めたり、情緒不安定だったが、今は少し落ち着いていた。

「今の今まで見せ物みたいな人生だったけど……」

「だったけど？」

「今日変わるわ、変わる気がする。」

「ハハハハハ」

2人は大声で笑い合った。青春だった。

「馬鹿言え、クソみたいな人間はそう簡単に変わらんさ。」

「死ぬ。」

第13話 花京院典明君

花京院君の話 その①

エジプトの巨大市場の混み具合は、凄まじいものである。

ガヤガヤと人が雪崩込み、転んでしまおうものなら、踏み潰されてペシャンコにされてしまいそうだ。

168センチと日本人女性にしては、少し大きな方のハナコでも押しつぶされんばかりである。目の前に人の顔がありすぎて、視覚情報が丸と目でゲシュタルト崩壊だ。こう、たくさん同じような物があると、単純化して見えてくる。これは彼女独特の感性なので、あまり理解されないだろうが、彼女にはそう見えるのだ。

こう言う人の荒波で立ち止まるのは、後ろがつかつかえるのであまり良くない。ドミノ倒しみたいになつたら洒落にならない。

しかし…

「ア、可愛い。」

………ハナコはアイに似合いそうな子供用の服を見て、つついっつい足を止めてしまった。

可愛いものを見つけた女子は単純だって良いじゃ無いか。

まあ、単純に動いた結果がドミノ倒しだったら、自業自得なのだがね。

「ア、失礼ッ」

「ごめんなさいッ」

やはり、後ろをつつかえてしまった。ドミノ倒しとまではいかなかったが、後頭部に後ろの方は鼻をぶつけてしまったのでは無いだろうか。そんな感触がした。痛かったら申し訳ない。それに、子供服をもう一度しっかり見たらそんなに可愛くなかった。

「ごめんなさい、私がよそ見を……」

「いえ、僕が……」

咄嗟に、ぶつかった方を見た。

「アラ……」

なんと、ぶつけてしまった相手は学生服を着た、日本人の青年だった。

エジプトに旅行に来る日本人なんて少ない気がするけど……家族旅行かしら？なら、すごい家族である。珍しい……修学旅行は流石に無いだろう。

また、ハナコも男の子もお互いにびっくりした。まさか日本人に会うなんて、と。

「こんにちは。」

「こんにちは、君日本人？」

「ええ、そうよ。高校生？家族旅行？」

逆方向に行くわけでも無いので、進みながら話しかけた。ハナコより10センチ程背の高い、緑がかつた色の学ランを着た男の子だった。

そして彼は、ハナコに話しかけられて少し、ホツとした表情をした。

まるで、「助かった」とでも言いたげな顔だった。

一瞬、「困っている人」に話しかけてしまったのかも知れない、と思った。声をかけた事を、少しだけ後悔した。

道案内してくれと言われて、簡単にするほど……いや、出来るほど、エジプトの市場は優しく無いと知れ。

ハナコは他人から頼られることが、あまり好きでは無かった。

が、まあしかし……最近、日本人に会う機会もなったので、快く助けてあげよう。旅の思い出がキツイ日本人の女に会った、ではかわいそうだ。そう考えた。

確かに両親の姿が見えない。こいつ絶対迷子だぞ。

「高校生です。家族旅行です。」

「そうなのですね。」

「君も高校生？」

「そうですわよ。」

「あの、突然で申し訳ないですが、パピルスっていうお店、知ってますか？」

「パピルス……あの、つかぬ事をお聞きしますが、もしかして……迷ってます？」
「分かります？」

その辺りで、1つ思った事があった。

おと……この子、もしかして結構変な男の子だったんじゃないか……？

家族旅行なのになんで学ランなの……

内心、「なんだこいつ」と思った。

家族旅行で学ランは、さすがに無いだろう。また、先程の質問もなんだか気に食わなかった。素直に「そうなんです」と答えろよ、とツツコミを入れるも、小さな事なのでスルーしてあげよう。普通に助けてあげる事にする。

ファッションセンスのことを話題に挙げるのなら、ハナコの職場には、ヴァニラ・アイスという最強のファッションリーダーがいるので、学ランごときスルーしてやろう。
「分かります。」

「人混みに流されて親と離れてしまいました……集合する約束の店も、どこにあるのかわからない状態です……かなり歩いてしまいました……」

「助けて欲しいんですね？解りましたわ。」

「ありがとうございます。」

「というか、パピルスは今さつき通り過ぎましたよ。」

「エ」

「斜め後ろの旗が立ってるお店ですわ。」

「ア、あれか。」

彼は素早くありがとうと言いながら、人の流れに逆らおうとした。が、馬鹿みたいに人が多いので私の隣から全然動いていない。

ハナコなら人を無理やりかき分けて進むけれど、彼は人をなるべく不快にさせないように進もうとしている。なんだか、日本人の推しの弱さが甲斐見えた気がした。

それと同時に、自分の我が強くなつた気がして、ハナコは軽くシヨックだった。

「迂回なされますか?」

「いや、平気です。」

「どこが。」

「本当に平気なんです。場所を教えてくださいありがとうございます。」

「いいえ。良い旅を。」

さて、君はどうやってこの人混みをかき分けるのかね。ゆっくりしていると、どんどん店と離れていくよ。もう5mくらいは離れているし、やっぱり迂回する道を教えてあげようかしら………

男子高校生の奮闘をバカにしつつ、迂回路を教えてあげようと、彼の肩を叩こうとする。

その次の瞬間、ハナコは目を疑った。

「……………スタンド……！」

「見えるのかい!?!」

「……………貴方、スタンド使い……メロンみたい……緑の……」

男子高校生はなんと、スタンドを出していた。

彼のスタンドから出た、紐の様な物が目的の店の看板に巻きついていて、スタンドに引つ張ってもらい、道の端の方に出た。スタンドを先行させ、自分が通りやすいように道を作る。そのまま、店まで引つ張って貰う要領で、着々と波を逆流していくのであった。

そして何故か、ハナコは彼にがっしり腕を捕まれていた。ハナコは「エ、なんで私連行されてるの?？」と疑問だったが、彼は「やっぱり、見える人はいるんだ、僕だけじゃ無い!」と興奮気味に話しており、すこし怖いので刺激しないようにそつとしておいた。

グルンツ!と、勢い良く彼の顔がハナコに向くのは、彼女曰く、軽くホラーであった
そうなの……

「ねえ、君もこの子が見えるよね?」

「見えます、見えます、見えます。」

「やっぱりそうだ！僕だけはおかしい人間なんかじゃあ無かった！」

「よよよよ、良かったですわね。」

「本当によかったよ！とても嬉しい！ア、君も同じような能力を持っているの？見える人に初めて会った……君の周りにも見える人はいるの、ああ、さつきスタンドって言ってたけど、それって僕の友達の話？ア、友達っていうのはね、ハハハ、それは気にしないで。それより、業界用語みたいに、この力の総称はスタンドって言うのかい？ねえ、君の力も見せてくれないかな？」

男子高校生は、火がついた花火みたいに喋り始めた。オタク特有のアレである。そして、無駄にキラキラした目をこちらに向けてくるのやめろ。新社会人みたいな眼差しやめて。

ハナコはいきなり腕を掴まれて、謎の強制連行に遭っている上、凄まじいマシンガントークを浴びせられて何がなんだかわからなかった。もちろん、彼の質問に答えることはできなかつた。そのかわり、

「……………んひえ」

と、口から変な声が出た。

話しかけた日本人が、想像以上にやばい奴だったので消費税分くらいのショックとと

もに、インパクトが凄かったのである。

あと「早口で話す人は、友達が少ない」という人生経験から、この男の子は友達が少なそうだと思った。

「あ、ごめんね。」

「……………いや、こちらこそ、言ってる事の99割くらい聞き取れなくてごめんあそばせ……………」

「本当にごめんなさい…僕だけ興奮してしゃべりまくってしまつて…すみません。」

「ホホホホ……………エ、で?ご両親は?」

パピルスに到着したのはいいが、彼の探すご両親の姿は無かった。おそらくまだ、着いていないのだろう。

「アレ…まだいないみたいだ。」

「……………店の前で待つのも…ここ狭いですし、入るお客さんの邪魔になりますわね。入ったら如何ですか?」

「いや、その、」

言葉を濁された。店の外に置いてあるパネルの料金をチラリと見たり、目に見えて焦っている様子から、ハナコは瞬時に彼の立場を察した。

「…………………………おごりますから、お入りなさい。」

「本当に申し訳ございません…お金は必ず、お返しします…」

彼は相当変な奴だし、なんかとてもめんどくさい雰囲気だったが、ここまで助けて中途半端に見捨てるのもなんだか嫌な気分になるので、ハナコは懐を広くして彼を店に引つ張り入れた。それに、彼は、初めて自分以外のスタンド使いに会ったのか、興奮している様子だ。また、とてもハナコと話がしたそうでもあった。

同じスタンド使い同士、ちよつとは助けてあげても良いかもしれない。と考えたのは事実だが、ハナコは同時に最近マライアから教えられた言葉を思い出していた。

ふつと思ひ出した言葉であつたが、ハナコが目の前の男子高校を助けるのに、十分な理由であつた。

「お財布、無くしてしまつたのですか？」

「財布を…ホテルに忘れてまして…特に買いたい物も有りませんでしたから…親も居ましたし…本当に申し訳ない。」

「……そんな日もありますわ。なに、一食くらい奢つてあげても私の懐は寒くなりませんから、安心してくださいまし。」

「……いや、本当に大丈夫です、すみません…」

マライアは最近、ハナコに男のイロハを教え込むのにハマっていた。その中で、マライアが言った言葉がある。「たまに、純粋にバカがいるわ。そういう奴つてのはね、助

けてあげると、すぐにこちらを信用するのよ。利用できるわ。」というものがあつた。

ハナコはその時、正直よく分からず、話すたびに揺れるマライアの胸ばかり見ていた。が、目の前の男子高校生がバカっぽいので、マライア尊師から教えて貰った、「今後に役立つ男の確保、初級」を実践してみようと決心した。

好きな人の言うことは、実践したくなつちやうお年頃である。

そして、ホテルを聞き出したら誘拐して、上手いことD I O様の審美眼の御前に引張つてきてやろう。最終的にハナコの功績でD I O様の部下が1人増えたら、この話をネタに、マライアに褒めてもらうつもりである。

マライアはDSなので、最近、ハナコを安易に褒めるより、焦らす事にハマっていた。ハナコは何気に下半身の欲望に忠実なので、そのワナにハマリ、一生懸命、褒めてもらえるネタを探していたのである。

「ホホホ、なんだか、私に聞きたいことがあるようですし…もう家に帰るだけですから、少しくらいお話しても大丈夫なんですよ………」

「ほ、本当ですか？本当にありがとうございます………」

「私も同年代スタンド使いとお話出来て、とても嬉しいもの。」

真つ赤な嘘である。

花京院典明君の話 その②

「私は山田花子です。お名前は？」

「花京院典明です。」

「おいくつ？」

「17歳です。」

「1つ年下なのね。何か質問ありますか？」

「いつ、能力が使えるようになりましたか？」

「1年前です。」

「へえ………どんな力が……それとも力の種類はみんな同じ……？」

「いえ、スタンドというモノは、精神の具現化なうな物ですので、1人1人違います。私のスタンドのフォルムは赤ん坊の形をしています。」

「……そうなんですわね……はあ……へえ……」

ウエイトレスが注文した品を運んできた。私はお腹が空いていたので、おつきいチキンを頼んだ。中に米やら色々なものが詰まっているらしく、美味しそうだ。あとは、食後にスイーツを頼んだ。

「すみません、適当に頼んでしまったのですが、これで大丈夫でしたか？」

「いえいえいえ、僕は……」

そう言っている典明君のお腹は、さつきからだんだんうるさくなくなってきているけれど。ハナコにはお腹が空いている人を見ると、いつも、少しかわいそうになってくる、謎の気持ちがあった。

「体は素直なので、しつかり食べましょうね。嫌いならいいですけど……他のものを頼みますか？」

「……………イタダキマス……」

大人しく食べ始めた。

彼は大袈裟に焦ったり、狼狽たりしないタイプであるが、承太郎君のように、たまになに考えているか本当にわからないタイプでは無いらしい。好青年のようだし、ハナコは承太郎と話すよりずっと気が楽だった。

「一つ、注意的なのですが……………スタンドを使うのは良い人ばかりではありませんので……私が今まで見てきたスタンド使いは、どちらかという野蛮人や、闘争心の強い者のスタンドばかりですわ。」

「……………なるほど、ある程度精神力のある者でないと、スタンドは使えないのですね。」

「そういう事ですわ。」

「例えば、どんな能力者が……………？」

「……そうですね、レーザービームを出したり、筋肉質なスタンドでパンチしたり……氷とか

を生成したり……ア、全てが攻撃的などという訳ではありませんよ。」

「なるほど。殺されてもおかしくない事もあると……」

典明君はなかなか飲み込みが早い男の子であった。今まで自分しかスタンド使いを知らなかった割には、スラスラと理解していつている。

「…それで、ハナコさんのスタンドは、赤ん坊の姿をしているようですが、それは、「戦闘向きでは無い」にカテゴリーされるということですか？」

「………さあ？環境に左右されますから、どちらとも言えません。」

「なるほど、ご職業は…高校生？ですか？」

「年齢的には高校生ですが、今はとある館の使用人として働いています。」

「ハナコさんの周りにも、スタンド使いの方がいらつしやいますか？」

「マア、理解のある方はいますね。」

「……ちなみに、エジプトに来たのはいつごろ？」

「約一年前ですわ。」

ハナコ自ら、質問に受け答える形式に会話を設定したが、もともと質問攻めが大嫌いなタチなので、後悔し始めていた。

「へえ……話が少し戻ってしまっていますが、戦った事とか…あるんですか？」

「スタンド同士の戦いに興味がお有りですか？」

「僕もスタンド使い、ですの……」

「ご想像にお任せします。」

「どうやって倒したんですか？ア、能力を聞くのは、もしかしてタブーなんですか？」

「……………秘密にしたがる人も居ますけど……私は貴方に隠しても何のメリットも無いですが……」

また、ハナコは花京院の質問に疑いを持ち始めていた。

この男は自分を疑い始めているのではないか、と思い始めた。知らない人について行だちやあ駄目だよ。というのは何歳になっても変わらない事である。

ハナコのどこが怪しかったのかハナコ自身には分からなかった。しかし、質問はハナコを探るようなものになってしまっている。少し、怪しまれているようだった。

怪しい人に警戒するのは当たり前だ。

今目の前にいる女は、もし、スタンドを悪用した殺人鬼だったら……？そこまできなくても、犯罪者だったら、どうしようか。

花京院の頭を締めているのはそんな事だろう、とハナコは推測する。

「……………あの、大変失礼なのですが、ハナコさんは随分、戦いを想定した考え方をしているらしいですよね？」

「どうしてそうお思いで？」

「……………そうですね、根拠は色々ありますが…」

確実に勘付かかっていると、確信した。

しかし、ハナコは、花京院に自分が「戦闘慣れした女」であると言うことを勘づかれた事を、深く考えている訳ではない。

別に、警戒されるだけで終わるかな？と思っている。

さすがに、私の態度も胡散臭すぎたし、そろそろ質問攻めも飽きたし、彼の母親と父親がここに来るまで、ドグラ・マグラで軽く催眠をかけてしまおう。そこから少し記憶を飛ばしてもらって、ホテルを特定したら、夜に誘拐しに行く。このプランで行こう。

と、初めて自分以外のスタンド使いに出会った花京院を、ハナコは舐め腐っていた。

「……………良くお気付きで。まあ、エジプトにいる女子高校生なんてお察しですけどね。私を、怪しいと思われていますか？」

別に、私が戦う事を経験しているスタンド使いだとバレても、典明君は少し警戒しておこう、つてくらいにしか考えちゃあいないだろう。冷静に取り繕って、内心ではびびってるんじゃないかしら？

自分からスタンドを使う可能性は低いし、私がどんな能力かも知らないまま動くほど、大胆な事はしないだろう。初心者なのだから。

ハナコはそう考えた。格下の存在として見下していたのである。

「……………失礼なのですが、確かに、怪しいな、とは思ってしまいました。……………ですが、僕は貴方に恨まれるような事はしていませんし、攻撃される理由はありませんよね？」
花京院は予防線を張るように、ハナコに尋ねた。ハナコはそろそろ動こうと思った。すでに、皿の中の肉と飯は、ハナコの驚異的な食事のスピードで完食された。
御馳走様をして、今度は目の前の男の相手をしようと思った。

「そうですねよ。」

ハナコの唇が釣り上がった。

そう言いながら、素早くスタンドを出現させる。催眠の霧を発生させるためである。

「ナ……」

花京院は目を見開いて驚き、ハナコに手を伸ばした。しかし、それよりも早く手に持っていたフォークを、黒い赤子風船に振り下ろした。

「私個人には理由は無いのですが、ご主人様にはあるらしいのですわホホホホ。」

ハナコは小さめに高笑いした。勝利は確実である。

これでマライアお姉様に褒めてもらえるのは確実ねツ！と。心の中でガッツポーズをした。

けれども、フォークは寸の所で、黒い赤子風船に届いていなかった。全身に力を込めるが、体がビクともしなかった。

「ハイエロフアントあんまりキツくしちや駄目だよ。」

「な、何……………こ……………声も、出せ…でない……………く…」

「……………あんまり、こういう女性を貶める事は趣味じゃないのだが…」

スタンドも出せなかった。また、喉あたりに物が詰まったような息苦しさがあつた。

そういうえば…

ハナコは気づいた。目の前の男は、スタンドに話しかけているのにスタンドは花京院の隣にいない。そして、ハナコは先程から、体内で何かが這い回っている感覚に侵されていた。

「スタン、ド……………私の、ナカに……………」

「そうですよ。貴女は相当、自分のスタンドに自信があるようでしたから、早めに仕込ませていただきました。怖かったんですよ。すみません。」

「…ア、アア、入ってるッ……………」

「僕のスタンドは、狭いところが好きなんです。」

「気持ち、悪い…体の中を、巡る、なん、て…このッ、へ、変態ッ！」

「心外だし、何か変な事をしている風に聞こえるから、やめてもらえますか？」

「……………ア”ア”ア”ア”ア”ア”」

内臓を掻き分けて、体の狭いところを通られている様な、なんとも言えない、気持ち

悪い感覚であつた。そして、だんだん声も出なくなつていった。

ハナコの目は苦しきで血走つていた。しかし、体も動かせ無いため、静かにもがいた。「……………僕に何かする理由は、ハナコさんには無いようですが、貴女の主にはその理由があるのですね？両親も流石に着く頃だと思ひますし、ハナコさんの存在は少し紛らわしいです。…かといつて、殺害なんて、普通の高校生の僕には出来ませんし。危害を加えられても困る。なので、しばらくこうしたまま、僕から離れないようにいて貰います。」

「んんんんん！」

「心配しなくても、少し距離が離れたら解放しますよ。」

ハナコは、まるで、同人誌のようなスピードで返り討ちに遭ひ、その瞬間から、会つたばかりの男子高校生にいいようにされる一日中が始まるのであつた。

まるで、「マサガキにモブおじさんがお仕置き」する同人誌のように、返り討ちに遭つた馬鹿お姉さんハナコは、白目を剥きながら、お会計を済ませるのであつた。

奢らされるうえに、体の自由を奪われるという、最悪の展開である。

同人誌の通りなら、このまま路地裏に引き込まれて、年下男子高校生にレイプされるどころだつたが、この小説はエロ同人誌では無いので、ハナコは事なきを得た。

「クソガキツ！絶対殺してやるッ!!」

T
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d

第14話 愛

花京院典明 ③

「おかしいと思つていましたよ、私だつてッ！」

「はいはいはい、貴女最初から胡散臭すぎたんですよ。」

「だつてッ！全然チョロいと思つてたんですつてッ！」

「それを慢心というのですよ。」

「クソツ……殺してやる……」

「いい能力のスタンド使いなら、貴女的能力で引つ張つて来なさいな。」

「内臓の隙間を、管みたいで細いものが這い回るあの気持ち悪さ……許せないわ……」

その後、ハナコはボロボロになつて帰つて来た。そして、あまりの惨めさから、今、テレンスに泣きついているのである。

日本から家族旅行に來た男子高校生、花京院典明にスタンドで体を操作され、数時間放置されたハナコは、脱水症状を抱えて館に戻つたのだつた。

少し休み、現在体調は回復した。

そして、思い出す失態の数々……恥ずかしくて、悔しくてたまらなかつた。また、その

理由が、自身の慢心ということも、原因であった。

しかし、一番悔しいのは、花京院の用意周到すぎる対応である。戦闘初心者に出し抜かれたのが気に食わなかった。ハナコの脳味噌は、餌に入れ食いする鯉のように、荒立っていた。

「どうしてあんなに迅速に対応出来たのかしら……：……スタンドを出現させてからのスピードが流石におかしすぎる……」

この女は、案外物事を追求するところがあるので、府に落ちない点には敏感であった。つまり執念深いのである。

確かにハナコは、胡散臭くて、「この人犯罪者なんじゃ……？」「エ、何でこんな死線潜ってきたような事話してるの？」と、ちよつと関わつてはいけないギャングの様な雰囲気漂わせた語り口をしてしまったが、いくら何でも花京院の対応の早さは異常だと考えていた。

あの時、ハナコがスタンドを出現させて、フオークを振り下ろすまで、3秒もかからなかった筈だ。3秒で緊急事態に対応出来る人間なんて、特殊な訓練を受けてる人間でもなければ、絶対無理な筈である。ハナコはそう考えていた。

「……………ハナコさん、1つ私が考えた事を話しても良いですか？」

テレンスが紅茶を差し出しながら言った。

「是非、お願い致しますわ。私、もう奴をD I O様の毒牙にかけてやらないことには、腹の虫が収まりません。」

ハナコは、いつもの冷静沈着な姿とは程遠く、とても苛立っていた。その原因は、女性特有なモノであるから仕方ない。

ハナコの月経症候群は普通より重い方であるが、いつも立場をわきまえて、人前では冷静を保っている。しかし、今回の事件で、自らの平和ボケしたような慢心を自覚し、イライラに拍車がかかっていた。

「D I O様の毒牙……それ、ヴァニラの前では言っただけじゃないよ………コホン、1つ思うのですが、ハナコさんが目をつけたその少年、最初からスタンドを仕込ませていたのではありませんか?」

「……………エ、どういう事ですか?」

「だからですね、その少年はそもそも仕込むだけで害が無いなら、スタンドを最初から仕込ませておいて、万が一にも誘拐やリンチに合わないようにと予防線を張っていたのでは無いですか?」

「……………ア、たし、かに。」

「ハナコさんが出現させたから、彼もスタンドを出したという認識から間違っているのでは? 申し訳ないですが……………初手と王手もとづくに取られていたということでは

ね。」

「くううううう……」

テレンスの言い方は、少々馬鹿にしている感じが含まれているが、本当のことなので、甘んじて受け入れた。

確かにそれで辻馬は合う。

ハナコは「どうせ私の能力で強制的に従えるんだから、少し犯罪者っぽくても楽勝。」と馬鹿みたいな慢心をしていたが、花京院は「ここで誘拐でもされたらたまったものじゃない」「やられる前に予防線だ！」と言う考えの元、己の能力でしっかりと対策をしていたのだった。

「アア……そりゃあ異国の地で怪しい女に言い寄られたら、対策しますわ……」

「でしよう？彼はきつと、怪しいと感じ始めた辺りから、バレにくいというスタンドの特徴を活かして、自己防衛策を練っていたのですよ。」

「つまる所、私の敗因は……」

「やはり慢心。」

「……………つうううううう……」

机に突っ伏して声にならない声で叫んだ。テレンスは、あまり見たことの無いハナコの年相応な姿に、この子もまだ子供なのだ、と思った。

どんなに考えても、やはりハナコの敗因は慢心であった。

ハナコは、腑抜けた精神に自分自身で嫌気がさした。最近では荒々しい戦闘も無かったせいも、よく切れる中華包丁の様な鋭さが失われつつある様な気がして不安になった。

……余談であり、個人的な会見だが、ハナコの鋭さはナイフの様なチマチマ切るものではなく、中華包丁や鉈の様な一刀両断という類の案外豪快な物であると思っ

「……………自分自身が許せません……………人を殺さないといけないと思いました。」

「相変わらずのぶっ飛び思考ですけど、確かに最近では穏やか過ぎましたね。少し分かりませんが、平和が一番ですよ。私も人形のコレクションが3体も増えてほのぼのします。」

「私、D I O様に稽古でも付けてもらおうかしら……………」

「やめた方がいいですよ。」

「冗談です。」

ハナコは更なる強さを求めて、自らを追い込む作戦で行こう、と考え始めたのであった。

また、本日悔しい思いをした花京院チャレンジだが、今度は主であるD I Oにチクるといいう形で、完遂させようと考えてるのであった。

ＤＩＯ様に告げ口する話。

「……………確かに、面白そうな能力者ではあるな。」

「はい、本人の判断能力も凄まじく……………ゆ、有能な部下になると、思います。」

「……………お前を一杯食わせるだけの能力者ならば、十分だろうな。」

「不甲斐ない私をお許してください……」

ハナコは、ＤＩＯに対しては、「一応」下手に出る。

一応上司であるし、リストラされない為にも敬う心は少しばかりでも必要だと考えていた。また、アイが最近ＤＩＯに懐きつつあるので、アイの前で機嫌を損ねたくないと言うのも理由であった。

「パパ、姉やを、いじめちゃ、め！」

頭を下げるハナコを見たアイは、ＤＩＯの頬をペチンと叩いた。

「虐めちゃあいないさ、アイよ、ハナコは私の大切な部下だからな。」

「なら、よいぞ。」

「少し生意気になってきたなあ？誰に口を聞いていると思っっているのだ？」

「姉や〜！」

「……………まだ言葉が難しかったか……」

「姉やが いい！ だ あつこ お〜！」

DIOの腹の上で暴れるアイは既に4歳位の姿になっていた。言葉も達者になり、文字の読み書きも覚え始めた。

ハナコの予想通り、成長の速度は徐々に増していき、食べ物も完全に獣や人の生肉と血となった。

「お呼びだ、ハナコ。」

「はい、坊ちゃんハナコが抱っこしてあげますよお。」

アイが、吸血鬼と人間よ中間の生き物であるという認識は、主に食べ物などからである。

アイは血だけでは満足せず、絶対肉まで欲しがるようになった。そこは、吸血鬼より、人間的な物を感じさせるし、何より個性が出てきた事がハナコをとて喜ばせた。

また、太陽の光は、浴びると廃になる程では無いが、火傷を負う程の怪我となる障害になってしまった。そうなるとアイは自然と、DIOと同じく夜行性の生活習慣になるのだった。これに対しては、ハナコはアイに構う時間が減ってしまい、とても残念がつている。

「姉や〜！」

「何ですか？」

「大好きー！」

「私もですわ。アイ坊ちゃんのこと一番大好きです。」

アイとハナコが一緒にいる時間は減ってしまったが、それでも殆どの世話を焼いているのはハナコであり、アイが母親として慕うのはハナコただ一人であった。No. 1の地位は、不動の物である。

「アイよ、私は？。パパはどうだ？。パパは好きか？」

そしてDIOはパパ嫌期を怒っていた。

この男、何気に言葉達者になって来たアイを好いていのである。自分の父親、ダリオと同じようなクソ野郎になってたまるかと、イクメンパパを目指して努力した結果、そこそこ息子を気に入る事に成功したのだった。

「パパ………パパも好きい〜！」

「パパ嫌期じゃないな、パパ嫌期じゃないな？」

「アイ坊ちゃんもパパ嫌期になんかならないですわ。」

「そうだな？」

「好きい〜！」

DIOは満足した様子で、ハナコの肩も抱きながらアイの頬に口付けた。ハナコの頭を軽く撫でて、彼なりの柔らかい笑顔を向けた。

2人は数秒見つめ合って目配せした。ハナコの目は本当に笑っていた。

しかし、こういう時のハナコは、D I Oには悪魔の様な顔に見えるのだ。この女に命令されると、D I Oは何も断れないような気がしていた。

ハナコは最近浮気性が治ったD I Oを気に入っていた。

浮気性が治ったと言っても、子供を産ませたりせず、直ぐにやつたら食べる様になっただけであるが……

兎に角、アイが育つてから、腹が膨れた妊婦を殺す事は無くなった。D I Oの管理不足で妊娠した女性は3人居たが、腹が膨れた女を見るとこの男は最近、何故か、軽い吐き気を覚える様になっていた。

これは実はハナコの催眠効果なのだが、それでも3人子供が出来たのは、D I Oの女癖の悪さが催眠術を超えたからなのであった。

「D I O様……あの、花京院典明の事は……」

「……ア・嗚呼、今すぐにも行こう。」

「フッフ、腕が鳴りますわ。」

楽しそうにアイをあやすハナコを、D I Oは不気味に感じた。

アジア圏の女は、童顔が多い。D I Oは18歳は大人だと思っていた。しかし、ハナコの見たい目は白い肌と高さの無い頭や、重めの前髪から、少女の様に見えた。

「お前がセーラー服を脱ぐ姿が見てみたいなあ。」

決してイヤらしい意味では無く、いつもセーラー服を着ているハナコは、永遠に少女であるような気がして、「大人にいつなるのか」と言う意味で、言ったのだ。

「子供の前でよく卑猥な言葉が吐けるな、次にそのような言葉を漏らしやがったらぶち殺すぞ。」

「やってみろ、自意識過剰め。お前の様な女に発情する男が見てみたいわ。」

「黙れ、私でマスかく男はいたぞ。」

「誰だ、名前を言え、名前を。片腹痛い。」

「誰が言うものかッ！私は墓まで秘密を持って行くと決めたのだッ！アイ坊ちゃん、パパに死ぬと言うのです、し、ね、と。」

「止めろッ！止めんかッ！」

この2人、いつまで経ってもこんな調子であった。仲良くなったり、イチヤイチヤしてると感じる時…それは気のせいである。

花京院典明 ④

「典明君、貴女が虐めた女は、テロリストやスタンドを利用した人身売買組織の一員よりもモット厄介な女だったと知りなさい。」

「……………」

「今度喋れないのはお前のほうよ。」

ハナコは花京院一家の泊まるホテルのトイレに忍び込み、ドグラ・マグラをけしかけた。風船を贅沢に四つも割り、花京院の動きが完全に止まった頃、トイレから出て花京院をベランダに引っ張り出した。

ちようどよくD I Oが現れ、ハナコと花京院を抱えて街の路地裏に連れ去った。花京院は絶望的な顔をしていた。それに対してハナコはエジプトの空を飛ぶのを満喫していた。

「ハナコ、スタンドを解除してやれ、あともういいぞ。帰ってアイに食事を用意してやれ。」

路地裏に着地したD I Oは、ハナコにそう命じた。ハナコは正直、いきなり1人で帰れと言われて驚いだが、主の命令なので大人しく従った。適当にタクシーでも呼ぼうと思った。

路地裏を抜ける頃に、花京院がゲロを吐いていたのでザマアミロと思った。

ハナコが館に帰るとアイがわざわざ出迎えてくれた。

これには思わずハナコは昇天しそうになったが、なんとか耐えて朗らかな笑みを保

つ。

「姉や、お帰り、なさい!」

「アイ坊ちゃん、お出迎えありがとうございます…：はあ、可愛い…：お腹空いていませんか?」

「すいた!」

「くふふ…：柔らかいお肉が食べたいですねえ…：テレンスさんに頼んで用意してもらいましようね。その間に、お風呂を済ませてしまいましようね。」

「姉やと入るの!」

アイは、無邪気な笑顔でびよんびよん飛び跳ねている。可愛らしい笑顔にハナコは破顔したし、柱の影にいたヴァニラ・アイスは鼻血を吹き出した。

アイはDIOに似て美しい少年へと成長しているので、廊下を歩くだけで、館に居る者達は心を奪われるのであった。そして、ヴァニラは相変わらず怖い。

「姉や、ね?」

「いかなさいましたか?」

「僕、ね、姉や大好きい。パパも好きい。いつも、ありがとうって思って、るの、皆んなにも。」

「アイ坊ちゃん…」

「アイ様……」

「天使……」

「罪深い少年だ……」

「ヴァニラヤバイ……」

「犯したい……」

幼い子の感謝の言葉には親の大半が涙する物だが、アイが発する感謝の言葉が繰り出すのは、涙ごときでは無い。一瞬で周囲の常人は骨抜きになり、血を吐き、ヴァニラは変態になる。

ハナコは幼い内からこんなにも可愛いアイが、将来大きくなったらどうなってしまうのかと、とても心配していた。

「みんなだ〜い好きい♡」

「くふくふくふ、早く姉やお風呂に入りましょうねえ……」

決して、ハナコはやましい気持ちをアイに抱いている訳では無い。決して……

DIOの息子

アイは本当は1歳にも満たない赤ん坊である。しかし、姿は既に、3歳か4歳ほどのしっかりと二足歩行をし、言葉を発する幼児に成長している。

何故成長速度がこんなにも早いのかと言うと、それは確実に、父親DIOの血が原因だろう。アイは他の子供と比べても、髪や顔つき、肌の色など、DIOのものをよく受け継いでいる。また、太陽の光を長時間まで浴びると、皮膚が火傷の様な炎症を起こしたり、食べ物も、生肉と血を好んだり、吸血鬼の生態を強く引き継いでいた。

それでも、中身は見た目通りの無邪気で、可愛らしい男の子であった。楽しいことが有れば笑い、嫌な事は泣き、父と乳母が好きで人見知りを少々する、男の子である。

「パパ好きい〜。」

「姉や大好き〜。」

「テレンスは、ご飯、お上手。」

「ヴァニラは……ヴァニラ……う……」

「お姉ちゃん、は、可愛いです、ね〜」

「鳥さんカツコいいカツコいいかつこいい〜!」

と言った具合に、言葉達者で興味を持った物には単純で、館のアイドル的存在である。皆、アイを可愛がり、子供が嫌いな者でもDIOの息子である為、丁重に扱った。DIO本人も何気にアイを大切にしていた。そして、アイも健気に父親に気に入られようとしていた。

まさに天使である。

しかし、天使と言うのは間違いである。

例えば、アイが父親に対して抱いている感情は下の通りだ。

「初めはアイに見向きもしなかつたくせに、虫のいい男よ。我が父は吸血鬼の癖に、とても人間臭い、執着心が強く、力を求めるなど、人間の極みであるな。あのような男にアイはならない。人間はどこまで行っても人間だということを知るが良い、愚か者め。」

……：天使だと思っているのは周りの人間と父親とハナコだけである。

本当に成長が早いのは、脳味噌の方であつたのだ。寧ろ体の方の成長が追いついていないくらいだ。この少年すでに野心を持ち、己がどう見られているか熟知している。

どの様に行動すればどう思われるか、自分の身の程をわきまえ、父を見下している。父は、分かるの者には分かる馬鹿であると思つている。カリスマ性は有るが、小心者でつけ上がり加減もいいところな男だと、アイは思つていた。

また、ハナコの事を深く愛していた。

1人の母親として愛しているのでは無く、将来自分の妻となる女として愛しているの
で、他の兄弟にハナコを取られるのはあつてはならない事だ。他の兄弟が館に居ないの

は、アイの策略なのである。何かしらの妨害をして、己以外の子供を館に置いておかないようにしているのは実はアイだったのだ。

ちなみに、ハナコの事を母親として呼ばないのは、詰まるところ、そういう事である。

「姉や〜お風呂入る!」

「ちよつと待つてくくださいまし〜、アレ、髪ゴム…」

「これ?」

「それですわッ!」

「後で、結んであげるね?」

「はあ〜、有り難き幸せですわあ……………」

「えへへへ。」

愛情の種類は何であろうと、真剣にハナコを愛している。

しかし、まア、下半身は父親に似ているらしい。こいつは、生後1年のくせに、女と一緒に風呂に入る事をねだったり、添い寝したいと思ったりする。

やりたい放題である。

「僕ね〜」

「何ですか？」

「将来は姉やとねえ、結婚するのお」

「やっくん♡アイ坊ちゃんに私なんて勿体ないですわっ！」

「本気だもっくん！」

本気である。

第15話 まさかあいつが敵だったなんてッ!!

「ハナコよ……………お前は天国を信じるか…?」

「ヤリすぎてチンコだけじゃ無くて頭も馬鹿になったんですかD I O様?」

「……………天国を信じるか?」

「……………信じてませんわ。」

D I Oは飛行機墜落の報告書を片手に尋ねた。

ハナコは最近はというと、アイに構うのと、屋敷の掃除やら配膳やら死体処理やらで、主婦を優に超える忙しさに囲まれていたのだった。

D I O様が宿敵(?)を仕留めようと部下に指示をうんたらかんたら……………は殆ど知らないが、どうやら手こずっているらしいわね、私の出る幕とか…あるのかしら。

ちなみに、この質問をするのは3回目である。ハナコは頭でも打ったのか?と毎度の如く思うのだけれど、D I Oが、妙に真剣な顔をして訪ねて来るので最終的にはちゃんと答えてあげている。

この人どうしたのかしら、天国だなんて言い出して…自己啓発本でも読んだのかな…随分おセンチでスピリチュアルな自己啓発本だわ。

アイ坊ちゃんの為に、何か読んでくださったのなら良いけれど、あんまりスピリチュアルな思想は、個人的にだけれど、やめてほしいですわ…

「ところでD I O様…私、全くD I O様の宿敵について全く存じてございませんのですが………そのところ大丈夫なのでしょうが………」

とりあえず話題を変えよう。

「お前はアイの世話があるだろう。万が一にも館にジョースター一行が到着する事は無いだろうが………万が一にもだ、決して無いことであるが、もしそうなくても、お前が取るべき行動は、敵の抹殺では無く、アイを守る事だからな。」

「それでも追い詰められでもしたら、私、死ぬかもしれないせんわ。得意なのは奇襲ですもの。パワータイプに中心核の本体の赤子を削られたら、頭吹っ飛んじやいますわ。せめて、判明している能力くらい教えて欲しいですわ。」

決して自分の能力が、パワー系スタンドを前にして役に立たない物だとは思っていないかった。

自分のスタンドは、知力と全力を出し尽くせば、どんな相手にも勝りうる、素晴らしいスタンドなのだと思っている。

そして、これは完全に女の勘なのだが、ハナコは何となく嫌な予感がしていた。

D I Oが、宿敵だなんて大層な言い方する相手は、きつと一筋縄じゃ行かないような

手強い相手に違いない。

ＤＩＯ様が本当に雑魚だと思ってるならば、もつと見下した態度で煽っていくはずだわ……ＤＩＯ様、心の中では相当強敵だと感じているに違いない……かと言って引きこもりのＤＩＯ様じゃ直々に手を下しに遠出も出来ないしね。でも、信頼性の高い部下に命令を下していないという事は、ヤツパリ、焦っていないのかしら……焦っていないけど警戒はちゃんとしているってことかしら…

情報が無いにもかかわらず、推測したって無駄である。

「姉やあ……婆ばが、忙しいって、遊んで、ないのっ!」

不満そうなアイが部屋に駆け込んできた。そのままハナコの胸に顔を埋めて心音を聞いていた。最近アイがハマっているのはこれである。

読者の皆様はアイの下心をご存知でしょうか、お察しく下さい…

「あらあら、エンヤお婆様は忙しいのですから、邪魔しちやあいけませんよ。」

「ふむ……アイもここに来た事だ、確かに、我が宿敵について、語ってやっても良いかもしれないぬ……」

ＤＩＯはドヤ顔をしつつ、急に上から目線になった。

アイ坊ちゃんが来たから武勇伝聞かせたいのね。語りたいただけだわ。

「アイ坊ちゃん、お父様の武勇伝聴きましようね……」

「ぶゆうでんって何〜?」

「私のカッコイイ話だ。」

遅めの「父親ヅラしたいお年頃」である。

「パパのお〜?! (弱点とか聞けるのお〜笑) 聞きたい〜!」

「ん〜、いいぞ。……………しかし時にアイよ…お前は少し単純過ぎないか、少しワルさをしてもいいんだぞ。」

「アイ坊ちゃん、変な裸族のおじさんがなんか言ってるけど耳をかしちやあいけないわ。姉やとあっちで…」

「待て待て待てノンノンノン、話してやろうではないか……………ん〜、仕方ないなあ……………」

「早く話せや」

「ブチ犯すぞブス」

アイをハナコの胸からひったくり、ハナコの手も引き、2人をベットのの上に収めた。

そこからは、D I Oの自称武勇伝語りが始まった。ハナコは上司である彼に一応耳を傾け、アイは父親が吸血鬼である理由を知るチャンスかもしれないと、耳を傾けた。

知りたくも無いが、父を知ることそれすなわち、自らを知る事であると心得ている。

「その昔……………100年くらい前だ、俺は貴族の養子になった。その貴族さジョースター

と言って、クソつたれ正義感を全面的に押し出す教育方針で代々育つたに違いない、貴族だった……………」

アイはビンゴ!と目を輝かせた。父親の昔話である。

「へえ……………確かにそれは閥属性のDIO様にきツイものがありますね…」

「そうだ。……………そして俺には同じ年の兄弟が出来た。名はジョナサン。ガキの頃は虐めぬいて、彼女のファーストキスを奪って、孤立させて、飼い犬を焼き殺したりした。俺はジョースター家に乗つとるつもりだったからな。」

「なんて計画性の無い……………」

「まあ、でもある程度成長したら、自分も力を蓄え無いといけないと気づき、いじめをやめて仲良くなったフリにシフトして、信頼を得たのだ。そして、大学生になって……………ジョナサンの父に毒を盛ったがバレて何やかんやあつて吸血鬼になったのだ。」

「嘘やん。」

アホかこいつ!その何やかんやの部分が知りたいんだよ、チンパンかよテメー!

アイの心境は複雑であった。

「パパふられたのお〜? (煽り)」

「アイ坊ちゃんに悪影響すぎる内容だわ。」

「ふられたのお〜? (煽り)」

うジヨナサンさん…不幸な…」

「何か言ったか？」

「いいえ、なんでも。」

ハナコはDIOの下らない話から逃れる為に、「お茶を入れてきます。」と頭を抱えながら台所に逃げた。DIOはいつもと変わらないハナコを、つまらないと思った。

ハナコは素早く湯を沸かして紅茶を淹れ、すぐに戻ってきた。

「アイ坊ちゃんもいらっしやるので、無難に紅茶です。」

「アイねっ、甘いのがいい！」

「お砂糖なん個ですか？姉やにしっかりと聞かせてくださいまし。」

「6〜！」

「それは多すぎなので3つにしましょうね、糖尿病になっちゃいますよ。オシッコが砂糖になって死にます。(嘘)」

「ぶ〜！」

可愛らしい表情に、思わず口元が緩む。

アイ坊ちゃん…沢山話すようになってくれて嬉しいわ。今すぐ、私のこと好きですか？つて聞きたいけど、あんまり言うとうざがられちゃうし、完璧な優しい姉やであることを心がけていなければ……

と、ハナコはいつているが……

この女もD I Oも凄まじい親バカであるため、1日に三回は「私（俺）のこと好きですか？（だよな?）」とアイに尋ねるのである。アイは、ハナコから聞かれる分には心がキュツと締まるようなトキメキを感じるが、D I Oに聞かれるのは、すでに、うざったいと感じているのだった。

テメエ、脳天かち割られたいのかグズ!!と思っっているのだった。

話が脱線したが、先程の武勇伝（笑）を聞いたハナコは、何故その話が現在D I Oの部下が応戦している、「宿敵」に繋がるのか疑問だった。

「あの、D I O様、一つお尋ねしてもよろしいでしょうか？」
「なんだ？言ってみろ。」

「先程のお話、詰まるところ宿敵とどんな関係がお有りなのですか？」

「ア…結論がまだだったな…」
「気になりますわ。」

「つまり、何が言いたいのかと言うと、現代まで続くジョースターの血統……：ジョナサンの孫と孫がこのD I Oを倒す為にエジプトに向かつてきているのだ。」

「ファツ、ジョナサン、ハネムーンの時点で孕ませてたんか!？」

「いや、ハネムーン1日目でもう孕んでたから……」

「下半身の活発さはどっこいどっこいだわ……………」

ジョナサンさんハネムーンまで我慢できなかったのね…………でもそれがジョースターの血筋的には、結果オーライだったのかも知れない。子孫残ってるんだもの。

ハナコは、DIOが語った正義の塊と邪悪の化身の、漫画のようなお話に、若干他人事のように聞いていた。

時代を超えて尚受け継がれるというスケールの大きすぎる話だ。我が身に起きてくる出来事のように聴ける人間の方が少ないんじゃないか？

「クククク、スケールの大きな話よ。」

「自分でも思ってるんですね。」

「このDIO、JOJOには一種の尊敬の念を抱いている…………それくらいのスケールでなければ逆に困ると言うものよ。」

「んっ、んんん？JOJOとは……………？」

突然出てきた聞き覚えの有るあだ名…………そのワードはハナコは肩を大きく跳ねさせた。JOJO、など滅多につくあだ名では無い。

気まずい思い出を思い出し、ハナコは動揺する。そして、まさかまさかだが、空条承太郎のことを言っているのではあるまいな？と不安を胸に抱えた。

「JOJOというのはジョナサンの愛称だ。名前にも名字にもジョが付くからという、

安直な由来だが、そう呼ばれていたし俺もそう呼んでいた。」
「そ、そうなんですの……」

空条承太郎のことではない……………

「だが、この度俺の首を狙う男もまたJ O J O!!」

「ブツ…………!!おえ、紅茶吐いちやった……」

「ククク、いい反応だなあ〜ハナコよ…………」

「まつ、まあ……我が主人の危機ですの……………ゲホツ……」

上げて落とすのはやめてくれ!!!今回もJ O J Oなのかよ!!

心臓が既に飛び出たんじゃないか、それくらいの動揺っぷりだった。

またJ O J O!!

そう、「あの事」があつてからハナコは一種の空条承太郎アレルギーとなつていたのだ。まさかまさかまさか、と思いつながら心臓が大きく動いてしまうのだ。

いやまさか、本当に空条承太郎なわけがない、一応主人のD I O様の宿敵が私でまさか男だなんて、そして、私の気まずい所を知っている奴だなんて、そんないらねえ奇跡いらねえし、ジョナサンって完全に日本人じゃない名前だし、全然関係ない人物に決まつているわ。

二度と顔合わせたく無い相手なのツ!!

「いいだろう教えてやる、我が友ジョナサンの子孫であり、我が宿敵の名は……………」
「宿敵の名は……………」

DI O様のお話は外国の話なんだから、急に日本人になる訳無いから……………国際結婚でもしない限りはね。

そんな、国際結婚なんて無いわ、そんな偶然ないわ……………

ン、空条君のお爺さんってニューヨークの不動産王だったかしら？

一方、承太郎サイド

「何イ、ハナコだと!?」

「ど、どうしたんだ承太郎……………」

「アツ、いや、何でもねえ……………」

空条承太郎17歳……………父が世界的なミュージシャンだったり、祖父がニューヨークの不動産王だったり、色々ハイスペックな上、本人の195センチという日本人離れした身長、美貌も相まって、どこか空想上のキャラクターのような男だと家族を抜いた他人は思っているに違いない。

しかし、承太郎とて17歳の少年であることに変わりはない。いくら大人びていたとて、年相応の反応や考え……焦ってテンパる事だってあるのである。

山田ハナコ……承太郎はあのことがあったからハナコという名前に敏感になつて来た。

不倫した夫はこんな気持ちなのだろうと思つた。

承太郎17歳、とてつもなくモテる彼は、童貞であつた。そしてそつち方面に対してピユアすぎてゐるのだ。

だから、オカズにした女に、オカズにしていた事がバレるなど、ピユア童貞には初っぱなからハードモードすぎたのである。

仕方ない、自分の家で普段大人しそうな女が卑猥な夢を見て腰をくねらせているなんて、どこのAVだツ!!とツツコミたいシユチュエーションだ、けしからん。それを見て反応しない方がおかしい。至つて正常だが、相手にバレるのは不味かつた。

「どうしたんだい承太郎……? もしや、ハナコという名前にトラウマでもあるのかい?」
「ついや、何でもねえ…… (クツツ花京院鋭いぜ、流石ではあるが……)」

「J O J O がそこまで動揺するなんて、君をそこまで動揺させるハナコさんが気になつてしまうよ。僕が出会つたハナコさんは恐らくD I O の下部だから……僕も優しいハナコさんに会いたいよ。」

「……そのD.I.Oの下部の女ってのは、スタンド使いか?」

「おそらくそうだ。相手の動きから察するに、奇襲が得意なスタンドで、僕のように相手を操作したり出来るんじゃないかな…彼女の自信からも、一撃必殺のような、即死攻撃をしてくるに間違い無いと思うんだ。…襲われた時、全く体が言う事を聞かなかったから……」

「そいつあ、恐ろしいスタンドだな。」

「本当だよ。街でぶつかっただけなのにつてやつさ……あのおさげの、おとなしそうな見た目からは想像もつかなかった。」

「ゲッホ!!オエッホ!!」

「大丈夫か承太郎!!」

「おさげ!!おさげだとツ!!山田ハナコはおさげだったぞ!?アレアレ、これはピンゴなんじゃあないか!?!なんてこつたい……いやまだだ、そんなはずないだろ、と言うか本当に勘弁してくれよ。」

「ち、ちなみにだが、そいつ、妙にかしこまった言葉の言い回しをして、静かそうな女で、三つ編みおさげも腰近くまである髪の毛の長い女じゃあないか……?それでもつて、苗字は山田……」

「さあ、どう出る花京院!!」

空条承太郎は覚悟を決めた。しようもない理由から、暗闇の荒野に進むべき道を切り開いたのである。

この返答次第では、俺は花京院をDIOに明け渡した女をオカズに抜いた男という、珍妙極まりない立場に立つことになる。それでも黙秘を貫くが、ハナコと闘う可能性も出てくるし、奴も俺を全力で倒しにかかってくるだろう…

俺がオカズにしたせいでハナコの戦闘意欲に火をつけ、仲間が犠牲になったらたまつたもんじゃあねえッ……

だから、決めるッ！覚悟つてやつをなッ！！

「どうなんだ、花京院ッ」

「な、なんてことだ、その女の人だッ、承太郎、彼女とはどういう関係なんだッ!?何故君が彼女を知っているんだッ!？」

「言える分けねえだろうがッ!!」

「……ッ!」

「………チツ、怒鳴つたりして悪かった…ハナコはクラスメイトだった。ただのクラスメイトだ……突然いなくなつたがな。お陰で謎が解けた。」

「な………ッ、まさか………分かつた、これ以上は聞かない。」

「嗚呼、そうしてくれ。過去の女だ。出来ることなら忘れたい。(花京院のまさかつてな

んだ?」

花京院は顔を青くして去っていった。

承太郎は覚悟を決めたのだ。花京院がジョースターとDIOの因縁に巻き込まれた原因を作った女でシコってしまったという、心の苦しさを背負って、前に進もうと決心したのである。

しかし、疑問に思ったのは花京院の動揺っぷりである。承太郎は思わず叫んでしまったが、それだけが原因とは考えられないほど、花京院が凄まじく動揺していたのは何故だろうと思った。

マア、今後この話は出さないと察してくれたようだし、それで良いかと思った。承太郎はどこか勇者のような気持ちで寝床についたのだった……

「まさか、承太郎とハナコさんが知り合いだったなんて……いや、それだけじゃ無い……過去の女……突然消えた……承太郎はハナコさんと付き合っていたんじゃないか?」

勇者のような気持ちで眠りについた承太郎とは打って変わって、花京院は承太郎との

会話と文脈、態度から、必死に情報を刷り出していた。

※全て間違っています。

「だとしたら、僕が深く介入することを阻止した理由も分かる……付き合っていた女性が突然姿を消した……そしてその理由がD I Oの配下に着いたから……いや、承太郎の彼女が理由もなくD I Oの部下になるとは考えられない……ハッ、もしや私のように日本人のスタンド高いを使い、承太郎の彼女であるハナコさんを拐い、肉の芽を埋め込んで操っていたのではあるまいな？ いや、そうだったらあの時の凶暴性も理解できる……」

花京院は恐ろしい事に気付いてしまったと言わんばかりに、身を震わせた。

思えば、ハナコさんは静かで大人しく、髪を染めたりせずに自然体で、まさに大和撫子と言った風であり、彼の女性の好みに合っていた。

※大切なことなのでもう一度言います。

全て間違っています。

花京院の迫真の独り言に「なんか夢っぽくなってきたので、オイオイどうしたんだよ」と感じる読者の皆様、違います。

花京院のアルプスの山々の如く壮大な勘違いです。

「なんて事だ、なんて事なんだ、全てD I Oの筋書き通りではないか……これで承太郎は

人質を取られてしまった……いや、いてもたっても居られない気持ちだろう……」
思ったよりもずっと深刻な自体であった。

しかし、花京院も推測だけで事を考えるような男ではない。なので、翌日、ジョセフ経由でホリイに少しでも電話できないかと頼み込み、電話を繋いで貰う事にしたのだ。もちろん、自分の思い込みかもしれないので、承太郎には内緒である。

花京院の深刻そうな顔に何かを察したジョセフも「ホリイの体調が良い方の日であつたらな。」と許可した。そして、運良くその日はホリイは体調が比較的良い日だった。高熱にうなされていることに違いはないが……

「ホリイさん、一言だけでいいです、山田ハナコさんという方と承太郎の間に何か関係があつた事をご存知ありませんか？ 僕の思い過ごしの可能性も十分ありますが、その、付き合っていたとか……」

そもそもホリイは、交通事故から守ってくれた女の子というイメージを持っていた。また、あらぬ勘違いをしていた。しかし、「ハナコさんと息子さん付き合っていないませんでしたか？」と聞かれて、合点がいったような気がした。

夜中に水回りで手を洗う2人、寄せ合う様に立つ姿と息子の珍しく動揺した態度……なにもないなら、息子はどっしり構えているはずである。なのに動揺していた。ということ、そういうことで間違い無いんじゃないかと思つた。

承太郎は会ったばかりの女の子に手を出す息子ではないと思っていたし、いまも思っている。だから、「付き合っていないませんでしたか?」と聞かれるとそうかもしれない、とホリイは思った。

なので正直に答えた。

『あまり、よくわからないけれど、私を交通事故から守ってくれた子、だわ。一度、家にハナコちゃんが、泊まりに来た時、その、2人で夜中に一緒にいる所を、見たわ。珍しく承太郎が照れていたから、そういう事だったのかしら、ね……』

「あ、ありがとうございます。わざわざすみませんでした、どうか安静に……」

花京院の心配は確信に変わった。マア、お年頃であるから、不思議な話では無いけれど、肉体関係もあった(?)らしい。憶測だが……

「この事は、どうすれば良いんだ……取り敢えず承太郎に相談して……」

花京院は自分よりずっと長く肉の芽を植え付けられている、承太郎の彼女、ハナコを思い頭を抱えたのだった。

※3回目ですが、承太郎とハナコはそんな関係じゃ無いです。花京院君はマスター・ベーシヨンした後、お互いにぱったり出くわしてしまっただろうもない2人に対して、真剣に心配し、心を痛めています……

真実はもっとしよもない話です………